

職場のこだま

—働く少年少女の生活記録—



労働省婦人少年局編

職
場
の
こ
だ
ま

女性労働協会
氏守贈

職場のこだまによせて

「はた織りの女が、本なんか読まなくてもよいではないか」と、まわりの年寄りたちからいわれながらも、夜業の多い人絹の町工場に働く娘さんは、お昼のお休みになると、せめて新聞なり、本をよんで、明るい日本を築く力になりたいと、純真な叫びを訴えています。

また北陸の町に、こぶ巻き売り歩く行商の少年は、朝、行商の町角で、カバンを下げて学校に通う同級生たちと顔を合わせるとき、自分の不幸を思いながら、（人間は誰でもいずれは働くんだ。早くから苦勞をしたこの自分の足で、汚れたこの社会をみつめながら、力いっぱい歩いていこう）と、深く自分にいいきかせている力強い感慨。

こうした働く少年少女の生活文をよんで、しみじみ思うことは、どうして日本の働く少年少女たちは、こんなにも不幸な環境におかれているものが多いのだろうかということ。生れながらにして、父も母も知らない子供。長い労働時間に追いまくられながら、家計をささえて働く子供。苦しい労働環境のなかで、向学心にもえながら、夜間通学に取り組んでいる子供。娯楽にもめぐまれず、たゞ働くばかりの暗い生活の中で、なんとか正しく伸びようと努力している子供たち。

働く子供たちは、不幸な環境の中でも、こうして一生懸命のびようと努力を続けています。その純真な生活態度、シンの強さには、心から胸を打たれないではいられません。

けれども、そのことは、また同時に大人の私たちにも多くの反省をよびかける力となって、訴えてきます。子供たちの多くの不幸は、大人の私たちの責任であります。大人の私たちは、働く子供の不幸を、たゞ、冷たく見ていないで、あたたかく、力強くささえる柱ともなつていくべきものでしょう。

労働省婦人少年局では、働く子供たちを守るために、日ごろから多くの調査や啓発などの働きを続けてきました。年々行われる「働く年少者の保護運動」に際して募集される、働く少女の生活文は、こうした働く子供たちのなみや、声を、少しでも世の人に知っていただき、働く子供たちを守る力を強めていきたいという願いから始められたものであります。

そうして今年もまた、働く少年少女の生活文集「職場のこだま」をおおくりすることになりました。

今、全国には三百万に余る少年少女が、工場に、鉱山に、漁村に、商店に、事務所に、いろいろの職場で働いています。そうして、この生活文に盛られた働く少年少女たちの声がこだまして、働く子供をまもるための、大人たちの反省を深め、又、それが同時に、働く少年少女の生活を勇気づけることに少しでもお役にたつことになればと願われます。

この生活文をおおくりするために、およせ下さった多くの方々のお力添えに心からお礼を申しあげます。

昭和三十二年七月

労働省婦人少年局長

谷 野 せ っ

目次

序文

「職場のこだま」によせて……………谷野せつ…一
 働く少年少女の生活文……………

日記から……………(農)業)細川 豊…八

車内のできごと……………(車)掌)古川 芳江…三

自分ひとりのためではなく……………(給)仕)匿 名(女)…六

ぼくの仕事……………(豆腐売り)相 沢 耀 司…一九

見習の記……………(製菓見習)匿 名(男)…二三

私の生活ノート……………(農)業)青 木 伶 子…二六

百姓になつて……………(農)業)森 谷 松 治…三一

あきない……………(行)商)千 葉 正 子…三五

病院にて……………(事務)員)青 木 信 吉…三九

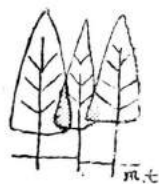
強く生きたい……………(縫製工)神 田 君 子…四四

誤 解		(ガラス工)	日馬 進	四
印刷工		(製版工)	匿名(男)	三
激流にさおさして		(商)	美武田勇三	五
仕事に愛着を持つことの喜び		(組立工)	高木栄一	五
機械の歌		(機械工)	浅川和美	三
私の一日		(總物管卷工)	津原 由紀子	七
女工なりとも		(紡織工)	籠瀬 スイ	七一
仕事の楽しさ		(給仕)	宮前 礼子	七五
初めて職について		(經物工)	山本 茂子	七五
行 商		(行商)	加藤 敬三	七六
私の一日		(工員)	中江 久	八六
働きながら学ぶ		(農)	十返一平	九〇
しあわせの歌		(店員)	柴 さとみ	九五
遠い道		(工員)	安藤 慈朗	九九
コーヒーの陰に		(食堂給仕)	中村 久子	一〇四
働く体験		(配達)	林 啓元	一〇八

働く幸福感	（紡績工）岡田喜久子	一二三
嵐の船出	（郵便外務）京美季男	一六
ある日の記録から	（養成工）福沢友行	二〇
給料日	（紡績工）糸賀邦	二四
人間となるために	（店員）田中淑子	二七
私の生活	（店員）水尾好美	三一
就職難を突破して	（塗りとみ工）匿名（女）	三四
電話交換手	（電話交換手）清水八代委	三八
ひがみを捨てて	（綴物工）大坂利子	四一
僕はがんばろう	（煉瓦成型工）加藤志郎	四五
僕は養成工	（養成工）松岡洋一郎	四九
見習工	（機械修理工）長岡博司	五二
社会は違う	（店員）匿名（男）	五五
綿ほこりの中で	（紡績工）谷高子	六〇
雑務課長	（觀光社員）野辺当宗	六六
綿ほこりの会話	（紡績工）匿名（女）	七六

働きながら学ぶ喜び	（店員）山内栄一……一七五
働く青少年に愛の手を	（販売外交）相原正信……一七九
働きつつ学ぶ	（豆腐製造販売）山田裕男……一八三
あゆむ道	（料理士見習）上川頼雄……一八七
深夜の仕事	（洋服見習）匿名（女）……一九一
カワラ焼き	（カワラ工）富迫勝……一九四
豆腐づくり	（豆腐製造配達）田中好市……一九八
過去と現在	（洋服見習）E・T（男）……二〇三
「働く少女少女の生活文」	
労働大臣賞受賞者の消息	労働省婦人少年局年少労働課……二〇七

装 幀 月 岡 良 太 郎



日記から

細川 豊

(北海道 農業 17才)

三十年三月〇日

中学校を卒業し、これで学校生活とは永久にさようならだ。きょうから社会への第一歩を踏み出す私になった。八名の同級生はみんな誓い合つて部落に落ち付いた。うれしいことだ。先輩などは、ほとんど都会をあこがれ走り去つたのに。三名の男子は往復五里の道を歩いて夜学に通うそうだ。私も願つたことだつたが女であるゆえに、父母の賛成を得られなかつた。しかし父は「豊、お父さんにはお前が勉強しようとする気持はよくわかるよ、しかしね。考えてごらん。勉強のためにからだをこわしてはなんにもならないんだ。学問も名誉も地位も、健康であつてこそ成り立つものなんだ。それに真に勉強するという気持があるならば、みんなが夜学に通う時間だけでも余分にできるのじゃないか。学校に通うだけが学問を身につけるのじゃない。お父さんはこう思うんだ。自分で勉強するのさ。つまり独学だね」。そうなんだ。自分で勉強しよう。ガラ

スの割れめから月を見た。馬舎で牛が「モーッ」と一声大きくないた。明日から元気で働こう。

五月〇日

早くも五月である。今日は朝から空が重く垂れさがつていた。こんな天候の作業としては不適だつたが遅れているので馬鈴薯地を馬で耕した。父が馬の口元を取る。私が後でプラウのハンドルを握る。一番軽い一頭三分だが女身の私には相当の重労働である。「からだは大きくてもまだまだヒナなんだよ。無理をしないようにじよじよにするんだよ」といつては私の手からたびたびプラウを取ろうとする。しかし苦しそうにプラウを動かしている父を見ると、かえつて私の方が苦しくなってくる。「お父ちゃん。やつぱり豊がやるわ」とむりやりに取り返した。まだそんなに老いた父でもないのだが、長い官吏生活（奉天警察署長・森林警察隊長）から五十を数えるようになってから初めて土に接したのだから無理もない。敗戦前まで「お嬢さん」だった私も、男同様にプラウを握るようになった。手指のふしぶしも日増しに大きくなってくる。夕方一粒二粒の雨が次第に大きくなってきた。予定の所まで済んだのでやめた。三年前まで机を並べて勉強した四国の同輩は今ごろなにをしているだろう。

六月〇日

今日は朝早くから同輩と一緒にKさんの所に手伝いにいった。お父さんが入院のため、お母さんは付き添いにいつているし、長男のT雄さんは家出して自衛隊に入っている。だから私と同

年のKさんと姉のY子さんの二人が畑の方をいつさいやつている。あまり気の毒だから卒業当時の先生に相談して見たら「よい事だ是非やり給え」と励まして下さった。同輩もみんな文句なしに賛成してくれた。朝から、どんより曇つていたがみんなの顔は明るかった。先生もきてくださった。昼食にはみんなの持寄りのタケノコ、馬鈴薯醬油と、先生の持つてきてくださったお米でとてもおいしかった。Y子さんは、私と肩を並べて固い土地に鍬をおろしながら「豊さんなんかえゝなあ、親に理解があるから」。私なんか働くばかりの毎日を送っているのに、いつも頭の上に雷が落ちるんだもの。一そうのこと家出しようかと思うけど一銭のお金もないし」。とても淋しそうだつた。このてん私は本当に恵まれている。今の生活ではたゞ親の愛情だけがその日の楽しみなのに。夕日も山のむこうに落ちた。山中の道を六人は「ごくろうさまでした」と三方に散つて行つた。

九月〇日

楽しみに待つていた盆も、村祭りもすんだ。手といわず足といわず顔といわず一面に真黄になつた。常食に南瓜ばかりを食べているからだ。もう二ヶ月近く一粒の米も口にしていない。配給米が受領できないからだ。入植の年、二十七年は勝手がわからず蒔いただけの種分も取れなかつた。又二十八年は冷害。昨年は少しよいらしいと喜んでいたら、十六号台風で一晩のうちに消えてしまつた。こんなことだから借金はつのる一方だ。生活扶助を受ける家庭も七割を

占めている。村の民生委員の人が受けるようにすすめて来てくれたが、父が断り私も「受ける位ならいつそ死んだ方がいゝ」と泣いたので帰つていつた。この日を「開拓月給日」と口のわるい者が名付けている。この日の若松（消費物すべてをこの地区で得る）は、商人が嬉しい悲鳴をあげるそう。世の矛盾だろう。受けない三割の家庭だつて決して楽ではない。おそろく配給米も受領できないまゝにがんばっているのだろう。父母の顔も四人の弟妹の顔も一樣に黄色くなつた。

十一月〇日

入植以来初めての豆落しをする。これが一年間の涙と汗と努力の結晶だと思ふとうれしくて仕方がない。「お父ちゃんこれ何俵くらいだべ」「さあ、お父さんにはよく解らんね」。弟と父の嬉しそうな会話はそばの私をも明るくする。予想は九俵だが十俵余りになりそう。でもまあ、今年はどこも豊作でたくさん取れたから一俵三千円を割るそう。父の顔は暗くなる。十俵で三万円、それで一年間の消費物をまかなうのだから苦しい。むこうから「お父ちゃん」と妹がトウモロコシの茶と、南瓜の塩煮を持つてやつてきた。とてもおいしかつた。人はよく（一生働かないで、食べられる身になりたい）というが、あまりにも無意味だと思う。働いていればこそ南瓜も馬鈴薯もおいしいのだ。働けない者になんの楽しみがあるのだ。働こう。働こう。いつかはくる。夢に見る楽しい日が……。もう初雪も降つた。又暗い長い冬がや

つて来る。でも我家はいつも春の陽ざしのようだ。少年よ大志を抱け。そうだ、がんばろう。
黄色い手が美しい。

車内のできごと

古 川 芳 江

(青森 車掌 17才)

悪路のため徐行している車のボデーを、ドンドンとむやみとたたく者がある。

ふと車外に目をやると、四人連れの青年達であつた。車が止つたので、早速ドアを開けたらドヤドヤと大きい面をして乗りこんできた。一瞬、停留所でもないのにといい、大変いやな気がした。でもお客様だ、どこから乗つたにせよ同じなのだと、自分にいい聞かせて「さつそくで恐れ入りますが乗車券を……」といつて、意味ありげに散らばつてすわつた後の方の客に近づいた。するといい終らないうちに右前の連れをあごでしやくつた。そこへ行くと一番前の人だという。何か胸にくつとくるものがあつたがこらえ、前の客の所へ行くと、さも仕方ないというふうに一A町まで四人分……これだけしかないからマケロ」といつて八〇円出した。しかもニヤニヤ笑いながら。ところがA町までは四人で百円なのである。(この人達は無賃乗車でもしようとしているのだろうか?)と思つたが「あと二〇円いただきます」というと「ないんだ」とい

う。先まわりして「千円札でもお釣はありますけれど」といつたら「どうしておればかりにこうしつこいんだバ」と連れをふり向きながら言う。その時、後席にいた六〇代のおぢいさんが「車掌さんおらあ出してやらあ」と、もどかしい発音でいつてサイフを取り出した。このおぢいさんは、みすぼらしく、やつれきつており、始発から手を取つてやつと乗せ上げた方なのです。「まあ、いいんです、いいんです。御迷惑かけてあいすみません」と私はしわだらけの手を押しとどめると、上から下まで流行のマンボスタイルに、指輪までつけているこの若者にくらべて、なんという尊い姿であろうと、この時胸深くあついものがこみ上げてきた。

在行くと「オーライ、オーライ」とはやしたてる若者や子供達のちよう笑。そして今この人達からもからかわれているのかと腹立たしくなる。でも後のおじいさんの氣持を思うと勇氣がわいてきた。「四人で八拾円よりないんでしたら、B町までは八拾円です。B町からA町までは一キロもございませんし、どうせあなた方は歩くつもりだつたんでしよう」といつて二拾円券を四枚切つて渡した。ひどく不平そうである。B町についても降りようとしないので、(又誰かにこんな行動を取るのではないか)悪いと思いつゝも、むりやりに降ろし、やつと我れにかえた。入社以来私に最大のショックを与えた昨日の夕方のことであつた。

寮に歸つてみんなに話すと「よくやつた。私達でなければそのようなつらさ、かなしさはわからない。解決するには会社までつれてくるとか、運転士さんになんとかしてもらおうとか、い

ろいろあるが、やはり車内のことは私達車掌が勇氣を持つて、難行もつき進もう」「正しいと思うことは堂々とやりましょう」と口々に同意を示してくださつた。

入社当時は、発声の一言一言にも訓練を重ね、無我夢中だつたので失敗も多かつたが、こんどこそと思えば希望がわく。だが氣持を暗くするのは、不正乗車である。勤務終了後、その日一度でもお客様と対立しようものなら、どうして自分だけがこうなのかと、自分をいましめたものだつた。でも今では自分が正しいんだ、どこへ出しても理屈が立つ正しい行いは、堂々とやろうと勇氣がわいてくる。

どんな職業でも世のため人のためにつくすということには変りはないが、私達の職業こそ、皆様に直接ふれる情と良心を養える。又不正を改めさして行けるのだと強くつよく感じた。

今朝は早番である。「おはようございます」。乗るお客様はどなたも、きびきびしている。窓からはすがすがしい初夏の風がほゝえみかける。私は「皆様毎度御乗車くださいましてありがとうございます」と声高らかにいつた。

自分ひとりのためでなく

匿

名

(女)

(岩手 給仕 16才)

白い土ぼこりを上げて十時のバスが通り過ぎると、芋の草を取りながら何か考えこんでいるらしい母がいつた。「もう時間だろうから行つておいで」。私はすいと立ち上がり急ぎ足で家に帰り、土のついた手をよく洗つて、野良着から白いカッポー着に着がえて小学校に行く。途中で会つた子が、「どこに行くの」と聞く。「学校に」とするとF子はまた「ミルクね」と明るく笑う。私は軽くなずいて再び足を早める。今日は薪を割つていないと思うと、急いでいながらも氣ばかりあせる。

私は二週間程前から小学校の給仕にやとわれた。仕事は給食のミルク作りだけで、二時間もあれば十分である。

私はこの仕事についてから、働くことの喜びと嬉しさを前より一層しみじみと感じる。

むしろ、まだ無邪気な子供達を相手に生活することが楽しいくらいである。そしてこの仕事

が自分に最適しているようにも思われる。

給食後生徒に、今日のミルクはどうだったかとたずねてみるのが、何よりの楽しみだ。最初ひどくこがしたことがあった。あとで生徒にきいてみたらみんな「くさかった」と答えた。その時は詫びたのだが、やつぱり第一目の失敗は深く印象に残る。

給食を受ける生徒は百数人という少数ではあるが、これらの小さな子供達に、自分の仕事が少しでも役立ってくれることは、他のなにものにもかえられないほどうれしい。

私の家では、貧しい暮しの中から今春、兄をT市のV大学に進ませた。

もちろん本人の志望によるものではあったが、沿岸漁業を営むかたわら、営林署より配当してもらったわずかばかりの山で製炭をして、家族八人が生活するにもたりないという中で、兄一人の進学は家中に大きな反響を呼びおこした。

私は、今朝も主食配給店に米を借りに行く母を、心からあわれだと思った。

まして、田舎の長男である。初め父母達も反対していたが、兄の働きながらでも学ぶという意志に家中の者はみな心を動かされ、どんな苦勞しても希望通りに進ませることになった。

幸い一次試験にパスした。さて合格したまではよかつたのだが、問題はそれから先のことである。最低でも一ヶ月七千円はかゝるという。

収入の少ない上に、これという財産もなく金にかえることもできない。家内中働けるだけ働

いても、借金に借金を重ねる苦勞は私にもよくわかる。だがしかしこれだけを苦勞ということ
はできないだろう。こうした生活の中から送られる金で学ぶ兄の身を考えてみれば、その氣持
はよくわかるように思われる。

いつか兄が友人宛に書いた手紙の中に、親兄弟の生き血を吸うごとくだと書いてあつたのを
思い出す。兄はそれぐらいのことは感じていてくれる。

今のお互いの苦勞とみじめさを忘れることはないだろう。

世の中の人達は「貧乏人が苦しい思いをして学問などして」と笑つてゐる。侮辱と輕べつの
世間の目が私達一家にそそがれているようだ。だが私は負けるものか、きつと負けない。

そうだ、兄が学校を出て成功したあかつきには、兄ひとりだけでなく、家中の者に幸福の訪
れることを信じて、その日の来るまで何事にもまけず、ほゝに伝わる玉の汗と共に私は働き、
がんばり通すのだ。

ぼくの仕事

相 沢 耀 司

(宮城 豆腐売り 13才)

朝五時半に起き顔をあらつて外に出る。

朝の空気はともいい気持だ。早い家では朝のすいじを始めている。豆腐屋でも仕事を始めている。「おはよう」といつて店へ入り、すぐ豆腐やあぶらげなどを、かごにつめ始める。お客さんたちは、あぶらげなど大きく色のいいのを喜ぶので、なるべくいいのをえらんでとると、豆腐店のおじさんは「あんまり大きいのを持つて行くなよ」などと、じよう談をいうのである。やがて豆腐屋を出て一軒一軒「豆腐にあぶらげ、納豆はいかがですか」といいながら売つてあるのである。僕のまわつてゐる所は、せまくてあまり売れない。

僕が豆腐売りを始めてから二、三日目のことである。田んぼの所まで来ると急にだれかが後のほうで「おまえ、ちよつとまつてろ」といつて僕においついた。「おまえいづからこごら辺まわつてんのや」ときかれた。僕は「二、三日前からだ」と答えると、その人は「こごおれまわつ

てる所だから明日からこまわんなよ」とおこるようにいった。僕は少しこわくなつて「うん」と返事をしてしまった。するとその人は「明日からまわつたらひつぱだつかな」といつてどこかへ行つてしまった。僕はなきそうになつて心の中で（どうしたらいいだろう）と思つていた。僕はすぐ豆腐屋に帰つて、おじさんにいうと「どこのやるこだ。いいから、かまねからまわれ」といつてはげましてくれた。そんなことが何回もあつて、僕の売る所がだんだんせまくなつてきた。

やがて豆腐売りが終り、家に帰ると七時だ。それから朝食を食べたり学校へ行く用意などをしてしていると七時半だ。朝食を食べるとすぐ学校へ行く。

やがて学校の授業が終り家につくのが四時ごろである。学校から帰るとすぐ新聞配達に行く。

三月から新聞配達をしているが、新聞配達には楽しいことや、つらいことがある。

僕はお金もほしいが、新聞配達はからだにもいいし、家でただぶらぶらしているよりもいいので配達をするようになった。

配達は初め五日ばかり教えられ、それから自分でずつと配達することになった。自分で配達した初めの日に一軒不着してしまった。初めから不着してはおこられると思つたので、余つた新聞を新聞屋に持つて行かず、そのまま家へ持つて帰つてしまった。二日目は一軒も不着しな

いですが、三日目にある家へ入れて通りすぎようすると、その家のおばさんが家から出てきて、「ちよつと新聞屋さん」とよびかけたので、「はい」といつて僕は立ち止つた。「おとこの夕刊入らなかつたから、これからわすれないでね」といわれた。不着した家は、それから後氣をつけて入れるようになった。

つらいことは犬においかけられたりする時である。新聞配達を始めてからまもない日のことである。ある家のポストに新聞を入れると、門の中から大きな犬が「ウー」とうなりながら僕の方へやつて来る。僕はそろそろにげるようにして来ると、犬はうなりながらおいかけて来る。僕はしかたなく雪をかためて投げるまねをすると、犬はやつとにげて行つた。

雪や雨のふる日は新聞がぬれておこられたり、手がつめたくてポストに新聞が入れられなくなつたりする。そんな時どこかのおばさん達に「ご苦労さん」などと声をかけられると、うれしくなつて手のつめたいのなんかわすれてしまう。

また僕の家では父がおらず母が一人で働らいているので、その一部分でもたすけることができると思うとうれしくなる。

見習の記

匿 名 男

(秋田 製菓見習 17才)

私は中学校を卒業後、湯沢市のある菓子店に見習工として就職した。今年で二年間を過ぎた。その二年間におきたこと、また考えたことを書いてみようと思う。私達見習工は朝は五時半ごろ起き、店をあげ店の掃除をして工場の掃除である。七時半ごろに食事をして、すぐ仕事にかかるのであるから、食後の休みもない。私の働らく工場は、工場と名のつくほどでもなく、昔からの家内工業である。そこで主人と二人で仕事をする。朝起きれば仕事に追われ、昼休みもなく一日いつぱい立ちどろしである。夜は仕事ができる店に行き、店のことを習う。だから寝るのは九時半ごろであるから、自分の時間は寝ている時だけである。最初のうちは足が棒のようになり、階段を登るのもようやくのようだった。だが自分が好きでかかった職業なら、どこまでもやり通す意志と努力が必要だと思う。(ここで、へこたれてはならない。一生懸命がんばるのだ)と自分にいいきかせながら、毎日がんばってきた。

だが我々の生活に一つの不安がある。それは自分の身である。菓子店は重労働の中に入るといわれているくらいである。それだから自分の身体がそれにもちこたえられるかが、心配である。それに家の中の仕事なので、外に出るのは月に一、二回のものである。まるで土の中のモグラのような生活である。自分の身体の健康、それが一番である。一年に一回ぐらいの健康診断をうけようと思つていたが、そんなことはとうてい許されない我々の世界である。なにかと昔の人のことをひつぱりだして説教されるが、説教も度をこすとききめがなくなるものだということを、知つてもらいたいものである。私は一日に一回、おこられない日はないくらいである。そういえば、おこられる者が悪いというかもしれないが、もうすこし大目に見てもらいたいものである。

そして、我々のまず一番最初にやらされるのはあん煉りである。私は一人なので、あん煉り、洗物まで全部やらなければならぬ。なれないうちのあん煉りは大変なものである。直径二尺五寸ぐらいのなべに五升のあん和二貫匁の砂糖を入れて煉るのであるから、煮立つてくると、そばにいてかきまわすのも大変だった。なにしろ手にはねたと思ひ舌でペロリとなめると、舌の皮がむけるくらいだから大変である。手足、顔と、ところかまわずはねてくるので、思わずヘラを投げてにげだしたくなるくらいだ。

だが今では平気でいくらはねてもびくともしない。そこにも経験がものをいうのだろうか。そ

して、ちようど一年たつた春、青年学級に行つてみないかというので行くことにした。最初のうちは何もいわずに出してくれたが、だんだん日がたつにつれて、青級に行けば仕事をする時間がつぶれるので、文句をいい始めた。青級に行くようになってから生意気になつたなどというので、私は腹が立つので十二月からいなくなつた。だが私達青年十人ぐらいでペン字の練習会をやつていたので、それだけは今も続けている。私は何も青級に行つたからとて仕事をなまけたわけでない。かえつてがんばっているつもりでいる。なまけるといわれたくないので、帰つてきてからも仕事をした時もあつた。そして私は、我我見習工という立場を大変不利な立場にあると思う。労働基準法という法律があるのに、それを守ろうとしないで、正味十五時間は働かされる。だれのための法律か、国民全体の守るべき法律を、守つていないのが大部分である。守られているとすれば、大工場か、ある一部分の商店、会社ぐらいでしょう。そしてなんの楽しみもなく毎日をすごすが、私は自分で楽しみをつくらなければいけないと思つて、楽しみをつくるように努力している。だが私はふとこんなことも考える。こんな生活がなにがおもしろいか。

いつそのことやめてしまいたくなるが、そのたびに、私は世間の笑いものになりたくなく、自分で自分をはげましががんばっている。それなのに、主人があまり無理をいうのは、本当に残念に思う。もうすこし、主人の方も我我のたちばを理解する目があつたらと思う。そして、自

分達は休んでも我々には休みがなく、休みといえ盆と正月合せて六日間だけ、あとの三百六十日は働きどうしである。月に一日でもよい、我々に自由な時間をあたえて、仕事から解放されて、ゆつくりした気分でいられるような時間がほしいものだ。それが仕事の方にもかえつて、プラスするのではないかと思う。そして私には私なりの希望もある。一生懸命に働き、意志と努力をおしまずつかい、りっぱな製菓職人となること、それ以外のなものもない。我々が主人となる日には、もつと今よりたのしく働けるような職場を作りたい、そして世の中のために、よきお菓子をつくることに一生の生甲斐があるのでないだろうか。



私の生活ノート

青 木 伶 子

(山形 農業 17才)

桑

「根がりの桑の木の株づくりをして来い」と、昨日から母にいわれていたもので、ハサミを腰につけて山の畑へ急いだ。背をかぶめていると背中が暑くて気持ちが悪かったが、それでも吹き出した芽を傷つけまいと注意しながら切つていった。この桑は、繭の値が活気に満ちていたころ、他の家にならつて植えたものでもう四年目である。新聞によると今年は養蚕がかんばしくないらしいが困つたことだ。米とともに繭も高く買つてもらわねば百姓は生きて行けない。だがつい最近も宮内の製糸工場がつぶれた。頭のひねりつから作り出されたナイロンやビニールによつて、養蚕家と工場で働く人々の生活はせめめられつゝある。百姓という仕事も、ただ働くのみではゆきずまつてしまう時が来るだろう。

ラ ジ オ

弟と私は三〇分も前から、新しいラジオの前に座つて十時になるのを待つていた。十時の時報が終る。『NHK高等学校講座山形県の時間』が出た。二人は思わず顔を見合せて「聞える聞える」「よかつたよかつた」と連発した。「山形第二放送が入らないからラジオをとり代えたい」とのことには「小屋の屋根をトタンにしたいから」という、母と祖母の強い反対があつた。だが弟にも加勢してもらい田の中でも、食事中でもと五日ほど頼んだあげく「二人でうんと働く」ということをその代償にして、とうとうとり代えてもらつたのである。だのに時時（今夜はよそう。一晩ぐらいあとで何とかなる）と思うのである。私はその度に（眠いといつて床に入るようなら、なぜラジオをとり代えた。途中で耐えられぬなら始めから受けない方がよかつたのに：受けたくとも受けられぬ人のことも考えるのだ）と自分にいい聞かせる。これが怠慢になりがちな生活から自分を守るための唯一の言葉である。

学 校

商業法規の時間が始まつて間もなくすると、〇さんが机にうつぶせになつてグウグウと眠つてしまつた。先生は隣のSさんに「起こしてやれ」といわれたが起こさなかつたので、先生は

一時間中機げんがわるかつた。先生は仕事と学問の両立の辛さなどよく話されるが、本当はその半分も知らないのではないだろうか。学校は私達にとつて、学ぶよりもまず憩いの場である時が多いからだ。他人のじやまにならない居眠りなら、多少は認めてもらいたいというのは虫のいゝ要求だろうか……。

馬 耕 かけ

（男しかやらないなんて）という例の負けん気から、弟と代つて馬耕かけを三〇分ほどやつた。段々がはげしいのでとても疲れる。

牛に気を奪われていると馬耕スキーが道から外れてしまつたりして、両方をうまく動かすには骨がおれた。それに牛を曲らせる時に牛がいうことをきかないので、思いきりなぐつた。弟がすれば素直に動くので「牛に甘く見られたな」と立つて見ていた母が笑つた。私も思わず笑つてしまつた。

“馬耕する我を見つめる母に笑みなげつゝ牛を強く追いけり”

祖 母

供米で忙しい昨年（昭和）の十月、祖母は目を病んだ。近くの診療所で顔面神経痛と診断されたが、

眼科医に行つた時は「急性青そこひ」でもう手おくれだつた。痛みもとまらず、また左の目を守るために翌日の夜祖母の目は抜かれてしまつた。家事一切をやつていた祖母のいない後は実に忙しかつた。そしてある夜「そうしてける」といわれても、決して泣いたり悲しんだりしないことと、いくどもいくども自分にいい聞かせて「学校をよす」といつた。「結果が悪ければそうしてもらうかも知れないが、まだ片方あるし当分様子を見てから」と母は退学を保留した。二度目の入院生活を終えて病院へ通う祖母の目を、自分のことのように気にして見ながら一日を送っている。

「目を病んで申しわけないという祖母をなぐさめてけさも地下足袋をはく」

雨の日

（働いてさえいれば食べて行ける）（土があれば生きて行ける）とよくいわれ、また聞かされる言葉である。科学や文化の発達は生活にも変化を与えている。だがそれをよそに、さも誇らしげに、何の不安もなく語られるこうした言葉に出合うとき憤りすら感じる。進歩もない足踏みのな百姓の生活、これこそ（百姓に学問はいらぬ）という古い考えが生んだ悲劇でなくてなんであらう。自主性や、判断力の不足から自分で自分の首をしめつける行為をする人がなんと多いことか……。百姓の生活を向上させることは、百姓の人で着手しなければならない。それが学

間をやることから始まるのである。私は今日も雨に打たれて田の畦切りをやつた。しずくが笠を伝つてポタポタと落ちる。でも負けやしない。(私は苦しく、貧しいからこそ学問をするんだ。幸せは必ずつかんで見せる) こう思いつつ動かす鎌は軽い。

百姓になつて

森 谷 松 治

(福島 農業 16才)

百姓になつて

吾妻山の噴煙は今朝もゆつたりと南に片向いている。四月末にまいた種籾は一つばいに張つた水の中に小さな芽を出した。手を入れて水温を見た。春とはいいいながら朝の水は肌を刺すように冷たい。僕は毎朝四時半遅くとも五時半までに起きて、いつもといつてよいくらいこの苗代を見に来たのだ。なぜならば自分の手で耕し、自分の手でまいた種が日に日に大きくなるのを見るのがとても楽しみだからである。また澄みきつた朝の空気を胸いっぱいにするが、大なる吾妻連峰をながめ、大自然に生きる喜びを味わいたいためでもあるのだ。僕がこんなにも朝早くから起きて苗代の管理から牛羊等、家畜の飼育まで、すべてやらねばならないのも、いやするようになったのも、父のいないためである。父は僕が中学三年だつた昭和二十九年十二月三十日、雪のたくさん積つた夜に突然死んでしまつた。こんなわけで中学三年の三学期はろくろく勉強もせず、に過ぎしてしまつた。父の生前の僕は(百姓はいやだ百姓になつて偉い人に

なれるか、おれは高等学校に上つて立派な人になるんだ」と意気まき、親の職業をそのまま子供が受け継ぐなどという考えには全く反抗的だつた。「百姓とかけて何と解く、五合マスと解く、心は一升つまらない」、こんなナゾまである百姓である。高等学校を出て、上等な服を着て会社へでも勤めることが最も幸せなものだと思つていた僕だつたから、年中土まみれになつて働かねばならない百姓には、だだを踏んでもなりたくなかつた。こんな考えをしていたのも、父への甘えだつたのかも知れなかつた。

父が世を去つた途端から、父の死後を立派に守つて行くのが当然の義務であり、父への最大の親孝行なのだという考えに一転してしまつたのだ。この考え方の変化は自分でも全く不思議な程であつた。それからというもの、毎日戦いのような農繁期を想像すると、勉強などもちろんのこと、寝ることすらできない日がたびたびあつたものだ。こんな月日は過ぎ去るのが特に早く思えた。長い冬もいつか過ぎて僕は学校を卒業してしまつた。まるで変つた日課に一日でも早くなれようと努めた。何をしたかさつぱりわからぬうちに、いつしか苗代作りの時期になつた。牛は初めて仕事をする小牛だ。大きくなつたと思つた体も、広い田では小犬のように小さい。母が鼻取りをして僕がすきを握つた。この日から僕の苦勞が始まつたのだ。それというのも牛がいうことをきかないからである。くねくねと曲つて歩いたかと思うと、草のある方に一目散に行つてしまう。こんなことでは九反の田をどうして耕すのか、行く先が真暗になる思い

だつた。それでも二日目には何とか、八畝あるという苗代を耕し終ることができた。その次の日も田耕を続けた。やつと歩き方を覚えたと思つても、一日たてばまた逆もどりをし、曲つて歩くしまつたつた。

日曜日などには行楽の客が通る。楽しそうな姿を見るたびに、百姓が馬鹿げた仕事に思え、牛が思うように歩かない時など、なお更自分もあんな身分になりたいと思ひ、思ひきつて家出でもしようかと何度迷つたことか知れなかつた。ところが二反と少し耕した時に、鼻取をやめてやつてみたら牛は上手に歩くではないか!!自分の切なる心が牛に通じたのだろう。全くあの時ほど嬉しかつたことはない。初めて知つた働く喜びだつたのだ。立派な百姓になれる。一人前の百姓になれると大きな自信がわいたのもあの時だつた。それ以後、牛と二人で毎日田耕をした。麦や油菜を作つた田を残して全部耕し終つたのも数日の後だつた。田植時には四時頃起きて一反五畝ほどシロをかき、食事後に苗をとり母と姉と三人一生懸命田植をし、家に帰るのが七時過ぎ。夜寝つくのが九時か十時。五六時間の睡眠である。こんな日が十日以上も続いて、田植に人を頼まずに苗代まで植え終つたのが六月の二十五六日頃だつた。戦争のような日程で働いた僕だつた。こんなにも自分の働きが大きなものであつたのかと思ひながら、一生百姓に生きる決心をしたのだ。

田植後も四時半か五時までには起きて毎朝牛の草を刈つた。三十五度を越える暑さの中で、

田の草取も何日したことか。疲れた体で夜水もかけた。しかし血のにじむような苦勞も実りの秋には水の泡と消えてしまった。これも父のしていた施肥を、無経験な母と僕とでした施肥計画の失敗だった。窒素成分の多すぎから、穂を出すとすぐ稲は倒伏してしまったのだ。折からの風雨のために、大豊作の年に僕の家は他の半作だった。苦しい、しかし尊い経験だけが自分のものとなった。

日に日に迫る農繁期前の毎朝、今年の苗代を見ながら、一年間の苦勞と尊い経験をともに増産に意気を燃やし、常に大自然と農業に生きる自分の幸せを感じるのだ。

あきない

千葉正子

(福島 行商 12才)

学校から帰ると「なんだ、おそいこと、また遊んで来たんだべ、もう五時だから早くあきないさ行つてこ」と母にいわれて、私はすぐ黒い大きなふろしきに、のりのカンと茶のカンとを包み、自転車がかわれているので、しょつて出かける。

なにしろ、私の家では一家をささえていた父が昨年なくなり、母が体が弱いため、私と五年になつた弟と二人で『あきない』をし、ようやく生活しているのだ。

雪の降る時など五時に起き、ナットウを自転車につけ、弟は近所、私は少し遠い所に一軒一軒「ナットよかつたか」といつて売り歩く。

なかには「小さいのに感心だな」といつて買つてくれる家もある。

しかし一つか二つしか売れない時は家に帰るのがいやなくらいだ。冷たい風がいよいよ冷たく、私にばかりおそいかかつてくるような気がする。でも、たまに十も十五も売れた時の喜び

はなんといつてよいかわからない。胸にあふれるばかりのうれしさと、働いたあとの満足感で、喜んでくれる母の顔を目に浮かべながら家に向う足どりもしぜんとかるくなってくる。

でも辛い毎日、手はこごえる。はあはあと息を吹きかけながら、木枯らしの中をかけて歩く。この前「孝行納豆売り」と新聞にだされた。弟と二人の写真まででている。なんだかおもしろいような気がした。おかげでほうぼうの見知らぬ人から「正しく強く真面目な人間になつてください」「お母さんを大事にしてあげてください」など、たくさんの励ましの手紙をもらつて、弟と二人で一生懸命やろうと誓い合つた。今は暑くなつて、なつともあまり売れないので、のりと茶を売ることにして、一日も休まずあきないに出かける。(少しでも売ればよいのだが)、と思いながら私は一軒一軒「お茶はよかつたか」と声をかける。農家のワラ屋根は何も知らぬげにどつしりと動かず、その下からはなんの返事もかえつてこない。今は農繁期なので猫まで田んぼにでているのだろうか。

学校ではバレーの選手としてはげしい運動をするため、疲れて寝て学校を休んだ時もある。そうすると母は悲しそうな顔つきで私を見つめながら「正子はお父さんがいるし、たくさん収入があるからいいね」という。そうだこうしてはいられないんだと我が身をはげましながら、大きなふろしきつつみを背負い出す。その時のつつみの重さは肩にくいいるばかり。父さんがいるところが思い出されたりして、歩いていてもさびしい所にくると、とても悲しくなる。また

同級生がみんな楽しそうに遊んでいるのを見ると、背中のふるしきをぎつちりしぼり、足をいそがせながら（どうして私ばかり、こんなことをしなければいけないんだろう）などと考へてしまふ。それを知つてか近所の人は「正ちゃん、商いというのは、どこまでもあきないことをいうんだよ」とはげましてくれる。思わず温い心にふれた思ひで目がしらが熱くなる。

そうだ、あきないでやるのが『あきない』なのだから、今は辛くても悲しくとも、あきないで絶望しないで働いたならば、きつといまに明るい春も訪れるだろう。

体の弱いおかあさんが安心して生活できるようにしてあげたい。弟も今は新聞配達をしている。「いまにお金もらつたらお母さんに養命酒買つてやるんだ」といいながら、雨の日も風の日も休まず出かけて行く。それをみながら、弟だけはみんなと同じように思う存分勉強したり、遊んだりさせてやりたい。そう思うと一家の生計をあづかる責任がひしひしと胸にせまつてくる。

私の家では社会保障制度のおかげで月に三千円支給されている。母は「三人で三千円では生活できない。人なみに栄養をとることもできない」とこぼすけれども、この三千円は私たち一家の生活のもといだし、強く生きよとの励ましでもあると思う。しかしあまりにも辛い時など母は「いつそのこと学校やめたらどうだい」という。でも私は勉強と、運動と、あきないことをどこまでもやり通そう。そしてよい子に、よい大人になろう。そして私のような子供があつた

らどこまでも温い心づかいをしてやろう。また、私のような子供がいない社会だつたらどんなにいいだろう。そういう社会はつくれないものだろうか。そう思いながら、今日も黒いふろしきつつみを背負い出すのである。

病院にて

青 木 信 吉

(茨城 事務員 17才)

春雨がいつ止むともなくしとと降っている。静かな朝だ。朝のひっそりとした景色は、いつになくものさびしく感じられた。

窓際にぼんやり立つて、ある無限の夢想到にふけていた。突然ノックをする音に、はたとわれに返った。ドアの所に体温計を手にした看護婦さんが立っていた。にこにこしながら「お早ようございます」といった。自分もつられるように「お早ようございます」とあいさつをする。看護婦さんは「きょうも雨ね。よく降る雨なこと」といいながら、ちよつと寂しそうな表情でふりしきる雨に目をやる。自分は最近になつて、はじめて看護婦さんの一日がいかに多忙であるかを知った。「ゆうべはお変わりございませんでしたか」とききながら弟のまくら辺にすゝんで体温計を渡すと、いそがしそうに行つてしまつた。

弟が入院したのは雪の降っている日だつた。あれからもう四ヶ月目である。過日の思い出

が、走馬燈のように浮んでは消える。苦しかったこと、つらかったこと、悲しかったこと、また反面楽しかったことなど数限りがない。入院したばかりはまだ寒中であつた。雪の降る夜などは、寒さと病人を抱えてどうしていいか、たゞ焦り立つばかりだつた。幼い弟は泣き叫びながら苦しんだ。自分はおろおろしているだけだ。悲しさで胸がいつばいだ。その度ごとに、十年前に亡くなつた父母が懐しく思いだされるのである。父母がいたなら弟はどれほど幸福であつたろう。自分もまたそれを思うと一層悲しくなつてきた。忘れようとしても頭の中にこびりついて離れないのだ。

六時であらうか。教会の鐘が静かに鳴り響いている。病院の裏側にあるカトリック教会の鐘だ。鐘の音は清らかに澄んでいる。心の中にまでしみ通ってくる。

やがて院内が騒騒しくなつた。今日もまた一日の活動が開始されたのだ。院内のほとんどの人は知合いである。自然にあい知るようになったのだ。入院している人達は、皆たがい弱点を認めあつている。健康の時にくらべれば、入院している人人はみな不幸である。だからおたがい同志に同情心があり、ヒューメンな謙虚さが通つているので、自然と親しくなつてゆくのだ。退屈になつたり孤独感に襲われると、たがいにあちこちの病室へ遊びに行くのだ。もちろん重病人の病室だけは遠慮された。

人人は「学校へ行つたり、看病したり大変ですね。しつかりやりなさい」と励ましてくれ

る。今日もまた雨の中を忙しく過さねばならないのだ。朝食をすましてすぐ職場へ出勤である。他の人は皆つきよりで看病している。しかし自分にはそれができないのだ。「退屈だろうが我慢して静かに寝ている」といい聞かせて、職場へ出勤しなければならぬそのつらさ。しかし生きるためにはやむを得ないことなのだ。出勤してからは、いつかい患者のことは忘れ、職務に従事することになっている。それでも雨の降る日や寒い日は心配でならないのだ。ぼんやりとして職務も手につかないときがある。職場の人はいつも励ましてくれる。

掃除を終えてから職務につくわけであるが、事務員といつても自分一人きりである。責任者はいるが、たいていは出張して留守である。だから重要な事を除いては、ほとんど自分がするのである。まず先方からきた文書を整理したり綴つたりする。また文書を発行したり、印刷して広く配布することもある。月に一度は定期総会があるが、その給仕も自分がするので。月末には集金もする。汽車に乗って行くような遠方へ出張することもある。だから忙しいときもあれば、暇なときもある。暇なときは新聞を読んだり、書物を読んだりして埋め合せている。

十一時になると自転車飛ばして病院へ行き、昼食をするのだ。食事は病院でつくつてくれる。日中は外来者や看病人達でいっぱいだ。みな忙しそうだ。

昼食を運んで病室に入ると、弟は窓から遠い外をじつと眺めていた。自分も視線を向けて見た。それは市内の中央にある小学校であつた。市内の学校では唯一の鉄筋コンクリート建の校

舎で、その向う側ではまた増築中であつた。遠くてはつきりはわからないが、弟と同学年ぐらの生徒が数名、窓から首を出して何かはしゃいでいる様子だつた。弟は溜息をもらしなから、何かつぶやいていた。学校が恋しくなつたのであろう。無理もないことだと思う。「もうすぐ退院できるさ、それまで辛抱している」と励ますようにいつてやつた。弟は無言のまゝじつと眺めたまゝだ。

事実今月の末日には退院できるのだ。しかし二ヶ月くらいは、週に二回病院へ行つて診察を受けなければならぬのだ。それにしても退院できるときは、一家そろつて踊りださんばかりに喜んだ。入院した当時は、連日三十八、九度も熱を出し苦しんだ。一家の者は皆もう手遅れかと思つた。しかし一生懸命に看病したかいあつて、二ヶ月目あたりからは熱も三十七度程度で病人もさほど苦しまなくなつた。最近ほとんど回復の途に向つてゐる。一家の者も、やつと安心感が満面に浮んで皆うれしそうだ。しかし弟にはまだそれをいつてないのだ。かわいそうだとは思つてゐる。しかし万一不可能になつたときのことを思い、その方がいいと思つたからだ。

昼食をすましてから一時ごろまで二人で話をしたり、本を読んだりまた外の話などをして屋のひとゝきを一緒に過ごす。それから職場に帰り午後からの職務に励むのだ。五時から学校である。妹もまた学校から帰るとすぐ、やすむひまもなく病院へ来なければならぬ。しか

しなにひとつ愚痴をいつたことはない。とにかくそれだけはあるがたいと思つてゐる。

自分も学校へ行つて友人に対し不快な顔は見せたくない。学校ではすべて忘れてしまふのだ。

四時限の授業を終了してから急いで看病に行く。日中はいつもつきゝりでいられない。だから、せめて夜だけでも一緒に寝てやるのだ。妹は七時頃になると家に帰る。それから夕食である。雨の降る日はさすがにつらい。しかし病氣さえ治つてくれればと、それだけをたのしみに一日一刻も早く退院できる日を待つてゐるのだ。病院へ着くのは九時二十分頃である。長い廊下はうす暗く物音ひとつしない。もう皆寝てしまつてゐる。弟の寝顔はかわいらしい。自然に微笑がこみあげてくる。起きないように自分もベッドにもぐりこんで、静かに過去のことを思いだす。

人人はいつも悩んでばかりはいない。多くの人の病室には、美しい花が飾つてある。美しい絵が掛けてある。花はいつ見ても美しい。悩みの中にも、美しい花や絵によつて自然と明日への希望がわいてくるのだ。

そしてくる日もくる日も、こうした暮しの中に皆が幸福を信じていたい。一日の反省さえもできないうちに頭の中は風車のように疲労が襲い、やがてぼんやりとしてくる。

強く生きたい

神 田 君 子

(栃木 縫製工 17才)

製品を仕上げ、きちんとたたんでビニールの風呂敷で包んだ。今日は私が納品に行かなければならない。

針柔らかに春雨の降る、と子規の歌った風景が、外で待ちうけている。「行つて参ります」私はこういつてレインシューズを履き、男持ちの洋傘を広げた。背負った荷物が落ちつかないの、で前こごみになり、不恰好に歩く、アスファルトの路、プラタナスの並木は静かな町を思わせた。

春雨は容赦なく降りかかり洋服を濡らしている。

働くことに変りはない。事務員だけが働くすべてではないと思いつながらも、通りがかりの家のガラスに写し出されたあまりの不恰好さに、恥ずかしくも思う。そんな時、いつも（働くことに変りはない）と、心の中で負けおしみをいう。思いつき元気な足どりで歩く。電車にぎ

りぎりの時間で乗る。途端に電車は走り出す。ビニールに包んで持つてきた単行本を取り出して読みはじめる。この時が私にとつて誰にも束縛されない自由な時間でもある。忙しい時に見つけた余暇を読書に費すことは最大の喜びである。

途中で乗った紳士が「荷物を上げてあげましょう」といつて、網だなに上げてくれた。佐野につくと、また黙つておろしてくれた。私の身近にもこんなに親切な人がいたのかと、しみじみと温かいものを感じ、私は感謝して幾度も礼をいつた。駅の構内で（どつこいしよ）と心の中にかけ声をかけて荷物を背負つた。

私はいつか、今日と同じような恰好をしている時、学校の友達に逢つて「買出しのおつかさんみたいよ」と笑われたことを思い出した。確かに私は不恰好であつた。

「これも勤めのうちだ」と思つて、笑つた友のあさはかさを哀れんだ。

荷物の届け先きまでは駅から約十五分位かかる。それまでの間を、雨の降つてない日は両手でささげるようにして持つて行く。はじめはあまり重くて休みながら運んだが、今ではなれてしまつた。

事務所の傍の小さな路地を入つて行くと、さわがしいモーターの音が聞える。工場は入口のわりあいによく女工が五十名くらい働いている。裁断機、穴カガリ、カンヌキ、ハザシ、工業用ミシン等が数十台となく動いている。天窓がいくつかあるきりで窓もろくにない。女工達

は黙々と機械のように働いている。冬は寒さにふるえ、夏は流れ出る汗にまみれて、生きがために働いているのだ。一日中陽のささない工場は人の心まで暗くするようだ。

彼女達は力の限り働くことが精一杯で、考える余裕など失っているかのようだ。彼女らの会話には、若さも見受けられない。働いて休む、休んでは働くという時間の切れ目に、自分に気がつく。そして自分の姿を鏡に写して、よそおいにこる。断続的な生活と、意欲を失った同性。

私はこの会社に納品に来ることにより、大人の社会を一部知ることができた。機械的に動かされる彼女達に、真心をこめている余裕がどこにある。魂の抜けた製品が人台に着せられている。検査係は私の持つてきた製品を検査しはじめる。その一挙手一投足に、私はじいつと弱弱しい視線をむけている。あんのじよう製品のことと注意されると、つぎの仕事が渡される。なんだかいやな気がする。

「昼間働いて、夜勉強するのは疲れるだろう」と、気の変りやすい検査係はこういつた。そして皮肉とあわれみの目を持つて笑つていた。私は見下げられたような感じを強くうけた。

苦手な時間は、黒板と先生の顔をじつと見つめていても、頭がぼーつとして睡魔に襲われる時である。昼間の疲れが一度におしよせてきて、思わずコックリし、びつくりして目をさます。(いけない、いけない)と思いながらも、目がかすんで見えなくなる。昨日の睡眠不足で頭が重くなってくる。

けれども私には希望がある。女としての教養を身につけ、社会のためにもなんとかして働きたい。今までの女のように一人立ちできない女性の道を、再びくり返したくない。もつと強くならなければ、それだけに、睡魔に負けてはならないと自分で自分にいいきかす。ときどき会社の人に、「女なんか勉強したつてなんにもならない。それより女としての仕事をみつちりやつた方が、どんなに利巧か知れやしない」といわれると、私の知る限りでの人達のように、安易な生活におぼれ、古い考え方にしばられたくないという考えが強く胸をついて、（かならずやり通してみせるぞ）と自分をはげます。ともすればくずれてしまいそうな弱い体をいたわりつつ、希望のため、自分自身の心の成長のために、職場と学校を両立させてゆこうと思う。人にどういわれようが、自分自身を信じて四年間がんばります。



誤

解

日

馬

進

(群馬 ガラス工 16才)

「二人前の仕事だぞ」と家庭訪問に来た社長は、六尺二十五貫という体に以合わぬ優しい細い目で僕にいった。だが、働きながら自分一力で高等学校を出るんだという僕に、定時制の苦しさや、仕事の辛さを並べ夜学に通うことをとめながらも、自分の会社に入りたいというまな指しは隠せないようだった。父亡き後、家計の苦しさを知っている僕は、無理しても全日制に出すという母を振り切つて、社長に入社を申し込んだのだ。——二月末のことだった。——

谷川岳を始め、名も知らぬたくさんの山山に囲まれ、右手に利根川を従え、新鮮な空気、美しい自然に恵まれた硝子工場に入社したのは、中学卒業後まもなくだった。寄宿舎は三部屋あり、最端の十畳に新入の僕達六人が寝ることになり、他の二部屋には先輩の二年生六人、三年生七人が寝ていた。同僚の五人は、十三人の先輩の中の、自分の同郷の人達と愉快そうに話し合っている様子だ。汽車で一時間半も離れた高崎から来た僕は、ふと一人取り残されたような

氣持になり、この時から一人むつり屋になつてしまつた。

四月九日、どんより曇つた朝に、僕は初めての六時の起床ベルを聞いた。先輩に真新しいほうきを渡され、成型場、仕上場、加工場等見慣れない道具や機械に目を驚かせながら、先輩に叱られないように懸命に掃除をする。一応終つたのでちよつと手持無沙汰になり、ふと見ると、他の同僚は知つている先輩からどんどん教わつていろいろ働いている。そういう姿を見てみると、会社の附近の村や町から来ている大部分の先輩や同輩が、一人高崎から来た僕をさけているように見え、なおさら質問するのがいやになる。勝手のわからない工場の中で、たうろろう同輩の後をついてまわつたり、ぼんやり立つていたりすることが多かつた。

作業は七時四十五分から始つた。前の晩、工場長から仕事について話があつたので、先輩には聞く必要がなかつたのでほつとした。

作業は熱かつた。工場外では肌寒い日でも、仕事をしていると止めどもなく汗が出た。手は軍手をし、てつこうをはめていてもやけつくように熱く、顔は燃えているかの如くほてつてゐる。二、三日続けたら手が紫色にアザになつてゐた。真夏になると時々貧血を起した。作業が終つて、がばがばとかたくなつた作業服をぬぐ。背中に手をやると白いものがばらばらと落ちる。それが自分の体から出た塩だとわかつた時、僕は精神的に一貫目もやせたように思つた。貧しくても町育ちの僕は、作業の肉体労働や、孤独感の精神労働に対する対抗力がなく、時時

寝込んだ。先輩や職人の「精神がしつかりしてないんだ」「やつぱり町つ子はだめだなあ」という声を聞くと、寢床の中や便所の中で泣いた。学校は、会社から二里も離れた沼田の高等学校だ。会社のトラックで送り迎えされ、故障で来ない時は雨の日も、切れるような雪の日も十九人は二里の山道を歩いた。昼間の疲れと、空腹と寒さに懐しい中学時代を思つて、落ちかゝる涙をたえながら歩いた。先輩や同輩が、こうした僕に道々何か話しかけるが、それ等の全てが弱々しい僕を茶化しているようで、皮肉にとられた。僕の人生第一歩はまったく寂しく、苦しいものだつた。しかし、母や先生や社長に対する責任感が僕を退社させなかつた。

夏と冬がすぎ、あれから一年目の四月の雨の日のことだつた。多くの先輩の中で、いろいろの点から僕の最も尊敬していたTさんが、今日にかぎつて僕に悪口をいい散らし、最後に「むつつり野郎」と叫んだ。尊敬していた人に裏切られたような気がして、少なからず僕は憎しみとうらみの念を持つて見返した。Tは僕を真暗な裏庭へ引つ張り出した。僕は殴られると思つた。しかしTは「お前は感違いしているんだ。お前が何時も寂しそうな様子なので、皆でなんとか話し相手になろうと話しかけるのだが、お前には何時も皮肉に取れるんだ。俺達が入つた時は、みな職人ばかりだつた。オスといつて背をたゝいてくれる人間は一人もいなかったんだ。そのためにずいぶん気を使つたり、殴られたりしたんだ。お前は一人高崎から来たために気を使つてゐるのだろうが……みんなお前と話そうと努力してるんだぜ」といつた。とたんに僕は今

までの自分の考えのすべてが間違っていたことを悟った。緊張した気持がゆるんだと同時に、多くの先輩に対してすまなかつたという気持で一ぱいになった。「先輩すみません——」……いゝんだ——、真暗な中で雨にびつしよりぬれながら先輩は泣いた。僕も泣いた。共に故郷を離れているという共通な点から（がんばるんだ）そんな気持になった。

——朝が来た——空は真青、先輩と僕はほうきを持つてまぶしいように顔を見合せて笑い合つた。上を見ると紺碧の空に北極の氷山のような谷川岳が輝いていた。僕は大きく深呼吸して「お母さん！」と叫んだ。すべて……すべてがほゝえんでいるようだった。

そうだ！がんばるんだ。良き先輩のため、会社のため、母のため、そして日本のために！

印刷工

匿名男

(埼玉 グラビヤ製版工 16才)

僕が本当に学校がいやになつたのは、卒業近い二月ころだつた。就職が確定したせいも早く会社へ行つて働きたかつた。しかし、いざ会社に出て見ると、そうは僕の心がおさまらない。高校生を見ると非常に劣等感を感じるようになった。僕も定時制に行きたい。しかし簡単に進学はできない。大体僕の体では職場から見ても少し無理である。しかし僕はできるかぎりがんばり立派に成長したい。

僕の職業は印刷工員である。印刷といえば活字を思い出すが、その活字を使用しないのに驚いた。従業員は三百余名で、印刷の範囲も非常に広い。代表的なものは、平凡社の全集物、中学時代に使用した数学、音楽などの教科書、車内ポスター、雑誌など、種類雑多である。しかし僕は、どうして印刷会社を選んだのか分らない。

この辺で僕の職業をもう少し説明しよう。朝は八時二〇分前に出勤して職場の掃除をする。

いま会社の経営状態が思わしくないので完全就業を実施している。完全就業とは、八時のベルと同時に全員が作業につき、十二時のベルまで働き、又十二時四十五分から定時の四時迄完全に作業をするのである。僕の仕事は、グラビア製版といつて、グラビアを印刷する版を作ることである。先ず入社すると「銅板みがき」という仕事をする。この銅板の大きさはたゞみ半分からいで、これを目の細かい紙やすりでみがき、その上にアモールという研磨剤で面を鏡のように磨く。これが大体、僕の仕事である。それがおわると現像をする。それは、チッシェという物を、銅板の大きさに切り、重クロム酸カリウムの3%液で感光させ、これに焼付けをする。焼き付ける物はネガと同じフィルムであるが、暗部と明部がフィルムと逆である。これをポジと呼んでいる。ポジを焼き付ける前にスクリンを焼き付ける。これは新聞の写真を見るとわかるように網の目があるが、あの目を細かくしたようなものを初めに焼き付けて、そのあとにポジを焼き付ける。焼き付けの終つたチッシェを銅板に張り付けて、これを現像するのである。現像を終つたら製版最後の工程である腐しよくにかゝる。腐しよくの前に、銅板の見える面と不用の部分を防腐剤でぬり腐しよくにかゝる。液は塩化第二鉄で、濃度の濃い液から始め、二〇分から二五分で終る。これで完全な版になりクロムメッキをかけて印刷するのである。

僕はまだ腐しよくを一度もしたことはない。これは非常にむづかしくよほど経験がないとできない。僕も勉強して早く一人前の製版工になりたい。これが僕の職場の簡単な内容であるが、

僕は今一番骨の折れる「銅板みがき」、それに現像の二つの仕事をしている。一年たつた今、日給は一七〇円である。この日給に不満は持っていないが、いくつか悩みを持つている。代表的な悩みは、つい最近解決したようだったが、また起りそうである。

昔から「長いものには、まかれる」ということわざがあるが、僕自身まかれかかった。会社のすぐ横に菓子屋がある。僕はちよくちよく就業中に例の菓子屋に、つかい走りをやられる。就業中無断で外へ出ることは、会社のおきてをやぶることになることを知っているので、自分で行くのはいやなものだから僕にたのむ。裏側の一米余の鉄じよう網は、いつも使い走りにとつてはまさに非常線同様である。ある時は鉄じよう網にズボンがかゝり破れた拍子に下に飛びおり足に釘がささった。またある時は守衛に見つかつた。その度ごとに僕は便所で泣いていた。入社して半年位は平均一月一回くらいたのまれた。僕はたのまれると「いやだ」といえなかつた。そんなこんなである時は会社がいやになつた。そして、とうとう泣いて家の人に訴えた。家の人、僕が入社する時は「上の人にはなんといわれても、はいと返事をすればいいんだ、決つて口答えをしてはだめだ」といつたが、その時ばかりは本当に僕の氣持がわかつた様子だつた。

そして翌日、始めてお使いを断つた。すると相手は「新米のくせに生意氣だ」といつた。その時から彼は白い目で僕を見るようになった。顔にこそださないが態度ですぐわかつた。この頃では月に一回ぐらいなので守衛所から行かしてもらつてゐる。また今年も新入社員が入つて来

た。僕は新入社員達と一緒に、一日中何のなやみもなく、堂々と働ける明るい職場になることを望んでいる。

激流にさおさして

武 田 勇 三

(千葉 商業 17才)

十才になる兄が合羽の上からリュックを背負つて、雨の中を飛び出してゆく。七才になる私と風呂敷包みを背にした母がその後が続く。これは今なお私のまぶたの裏にやきついてゐる十年前の夏の私共の引越風景であります。

三才の時父を失い、東京で戦災にあつた私共は、着のみ着のまま父の実家に引取られホッとしたのもつかの間、ここは安住の地ではありませんでした。折合いの悪いことが続いたある土砂降りの日、母は私共を連れて父の家を出ることを決意いたしました。たんす一つない私共は、ほとんど身一つで、つてを求めて辿りついた安房の地に生活の根をおろしたのであります。幼い私共を抱えた母は、ここでも針仕事、野良仕事と仕事を求めて働きました。いわゆる東京者で農業の経験のない母には、特に野良仕事は大きな負担でありました。しかし母はなれぬクワを手に必死に働きました。そしてその細腕で、私共兄弟の命がささえられておつたのです。一日の労

働につかれきつた母が力なく玄関にくずれおれる姿に、私共は幾度か泣きだしました。また母が借り受けた猫の額ほどの畑で、汗まみれ泥まみれになつてたんせいした水つばいさつまいもと小さなカボチャが、幾日も幾日も私共の食膳をにぎわした唯一のお菜であります。食慾の盛んな私共には、わずかな芋やカボチャだけでは足りず、そのツルや葉までも食膳にのぼせたのであります。こうした母の苦斗の中に兄は高校を卒業し、私も中学校を巣立ちました。

そして片親という点で就職を危ぶまれた兄は、なんの支障もなく郵便局員として採用され、母の苦斗も十数年ぶりに第一の実を結んだのであります。そして兄が初めて俸給をいただいた日、それを仏壇に供えて合掌する母の頬に一筋二筋と光る涙の跡、私共も目頭を熱くしながら亡き父に出発の決意を誓つたのであります。「お母さんには随分苦勞させただけ、これから僕も精一杯働くよ」、めつきり白髪のふえた母に、力強く誓う兄をこれ程たのもしく感じたことはありませんでした。「あゝしつかりやつておくれ。これからはまだまだ苦しみはあるだろうが、どんなに苦しくとも辛くとも希望を失なつちやいけないよ」、久しぶりに聞く母の教えは、私共の腹の底にしみわたる思いでありました。

現在私も母と二人でささやかな店を開き、朝夕には新聞配達をしております。開店当初には種類の少なかつた菓子も今では店内せましと並べられ、五円十円と求め行く小さなお客さんにささえられて、問屋から取り寄せる品に需要者もふえ、資金の回転も円滑になつてまいりまし

た。過勞からすつかり足を痛めた母に、商店の仕入れを一任された私は、新鮮な菓子と健全なオモチャの仕入れをモットーに、忙しい毎日を送っております。また、時には思わぬ貸倒れがあつても、幼い頃のあの悲惨な私の生活をしのんでは、踏倒さねばならなかつた人よりも、それを哀われむ気持になれる吾が身の幸福を考え、むしろ神への感謝の念を深くしております。世間には片親なるがゆえに就職に悩み、生活に苦しむ人も多いとは新聞雑誌でしばしば取り上げるところですが、それらの人人に見られがちなひがみを私共が持たずに過ごしたのも、献心的な母の愛情あればこそであり、愛情一筋に生きた母の力で今日あるを得た私共は、世の激流にさおさして舟を乗り出したのであります。

かつては大海の捨小舟であつた私共も、今ではさおかじを得て力強く激流を乗り切ろうとしております。もちろん母の言葉通り前途に幾多の苦難はあるにしても、年老いた母を守り、兄弟が力を合せて生き抜くならば、必ずや幸福の彼岸にたどりつくものと信じております。母への感謝と大いなる希望の中に迎えた昭和三十一年に、更に更に努力と精進をつづけようと誓いを新たにしますものであります。

仕事に愛着を持つことの喜び

高 木 栄 一

(東京 組立工 16才)

最後のボルトを力一ぱい締め終ると、ほつとひと息いれながら油で黒ずんだ仕事着の袖で、ぐいつと額の汗をふき取る。そして思いきり腰を伸ばす。全身が宙に浮いたように氣持がいい。

何百台、何千台目かのモータが、これまで、そして今また自分の手によつて完成されたのである。毎日の仕事の中で、この一瞬が一番幸福感到満ちあふれる時だ。

ついこの間まで、どうしてこのような幸福感を想像できなかったろうか。幼い頃から立派な実業家を夢に見、高級サラリーマンの姿にあこがれた自分だったのに、社会での第一歩はそれとはあまりにもかけ離れた、油まみれの工員なのである。工員、こんな貧弱な文字がたまらなくいやだった。自分にかかわりのあるすべてが、この貧弱な文字でおおわれていると思うと、それだけで頭の中がもつれてしまう。

学校へ行きたい。学校へさえ行けば偉くなれるんだと、通勤の路上で、そしてまた電車の中で僕はいつも、えたいの知れない圧迫感になやまされる。偉くなるために学校へ行くんだ。いや偉くなるには学校へ行かねばならないんだ。むやみに学歴を重要視する今日の社会で、中学校卒業だけで社会へ飛び出した者が、どうして偉くなれるだろう。

月日の流れとともに、僕は現実の社会を、まじまじと知るようになってきた。智と力と情があれば、どこまでもものびられると思つていた自分の空想的な考え方は、完全に打ち破られた感じがした。

騒音の激しい工場の中で、ヤスリを掛けハンマーを振り重い物を持ち運ぶ仕事は、決してなまやさしい労働ではない。肩は痛み手には豆ができて、またまわりの人に何を言われても、ただじつとこらえてがまんした。他の小企業で働く僕達と同年輩の人達を思えば、今この大会社に勤めておられることだけで、どれ程幸福か知れないと思つたからだ。

しかし職場での生活は、それほど甘いものではなかった。骨の折れる労働はもとより、まわりの人達に対しても、こまかい点に気をつかわねばならない気苦労からくる疲労感も決して少なくはない。

そんな目に見えぬ苦しみの中で、僕は何かにすい込まれるように仕事に興味を持つようになったのである。

四月の或る日だった。

「君、五馬力のモーターに防爆用ケースを取りつけてくれないか」と組長さんから指示されたのである。

むろん僕にとつては初めてのことであった。組長さんのさし出した図面を受けとつてはみたものの、まだ図面さえ満足に読めない自分に（果してこれがやれるだろうか）瞬間、暗示的な自信のない気持ちにおそわれて、胸がドキドキ高鳴った。

じつと図面を見つめながら必死の思いで組立に取り組んだ。誰の手もかりずに自分一人の力で完成したかったのだ。何度も何度も組み立ててはくずし、くずしては組み立てた。自分の頭は、もう仕事以外に何物もなかった。にじみ出る額の汗を拭きとることさえ忘れていた。（徹業の精神）ふと重役のお話が頭をかすめた。先ず自分の仕事に徹底する。学歴でも、頭でもない、僕はついに独力で自力でこの仕事を完了した。組長さんに「よくできたなあ、ごくろうさん」といわれた時は涙が出るほど嬉しかった。

僕が真に仕事に興味を持ち始めたのは、この時からである。そしてこの時はつきりと自分の進むべき道を知ったのだ。

（どんなつまらない、面白味のない、ちつぽけな仕事でも、それを完成することこそ偉大なのだ。忍耐と不屈の魂を持つてぶつかって行くなれば、必ず大きな喜びを感じる時が来る）と

いうことを……。

あれほど悲観し、きらつた工員である自分に自信と、ほこりと、力を持つようになった。どんなに油に汚れても、如何に仕事がつらくても、もうそんなことは問題ではない。仕事ノ仕事のみが常に僕を励ましてくれる。

『いつも徹業の精神でいこう』……と。

今の僕は、与えられた職業に満足している。だから誰よりも幸福だと思つてゐる。

今のこの幸福な毎日が、いつまで続くだろうか。波乱の多い人生は、そううまく渡れるものではないだろう。いつかはきつと以前と同じように、油まみれの工員がいやでならないと思う時がまた来るだろう。其の時をどうきりぬけるか……。

今はそんな未来のことを考える気もしない。ただ現在の僕には、頭ばかりの人間でなく、手足、頭のどれもが、よく働く人間になる努力のみがあるばかりだ。僕はこの工場の技能者養成員であると同時に、日本工業の養成員だ。これからの自分の仕事や勉強に大きな責任が秘められている。それだけに明日への希望を大いに感ずるのである。

機械の歌

浅川 和美

(神奈川 機械工 17才)

グーン!!とモーターが回り、それと共にガタガタゴトゴトと、言葉では表現できないさまざまな音をたてて機械が動く。ガーガーと鉄と鉄とがぶつつかり合う。すさまじい勢いで鉄を削っていく鉄(バイト)。それを耐えに耐えて耐えきれなくなつて削られていく鉄、それは一種の闘いだ。そして人の世の縮図だ。切くずがあたり一面にとび散り鉄の粉が漂う。それを見つめる自分の脳裏には他の何物もない。手は真黒、もちろん作業衣も真黒だ。そして全身汗でびつしより、思わず額の汗を真黒な袖でぬぐつてしまう。このように僕は毎日機械工として働いている。

機械の歌

概して世間の人は、機械工といえど油職工などに見くだした呼び方をするが、機械は誰れにでも使用できるものではなく、それにはむずかしいこと苦しいことが山ほどある。またその反面働く喜びがある。それは僕達にだけしかわからない尊い喜びだ。

苦しいことといつても、僕達は養成工として一般工員とは違つた特別な待遇を受けているので、昔とくらべたらずつと楽らしい。だから「俺達がお前達ぐらいのころはもつと苦労したもんだ」とよく言われる。それでも苦しいことはかなりある。自分の立場や氣持を理解してもらえず、なまけてもないのに誤解されて叱られたり注意されたりする。そんな時ずいぶんくやしいが「怒られたときはそのままとらずに、激励されたと思えばいいんだ」と誰れかにいわれたのを思い出して、じつと我慢する。

また仕事がうまくできないときなど、非常に自信を失つてしまつてやる氣がなくなる。それと反対に自信をもつて仕事するときには、うまくいき仕事が目白くなる。このようなことから仕事をするには、自信というものがどれほど大切かがよくわかる。しかし僕にはまだいつでも自信を持つて仕事をするには困難だ。それは技術が未熟であることは勿論であるが、それともう一つ人間そのものが未完成だからである。職場で指導的な立場にある人は、どこか落着きがある。だからどんなことでも一つの仕事に熟練するということは、人間が完成されることなのではないだろうか。会社に入つたころよく「自分の仕事に愛着を持て」といわれた。そしてそれにつけ加えて「愛着は自分がその仕事を愛することによつて生ずるが、ただそれだけではなく言葉で表現できない何か加わつてなければならぬ」と……。

何でもそうだが、ひとから無理に押しつけられたものは身に入りにくいもので、自分も初めは

「愛着」といわれてもピンとこなかった。

それでも最近はおぼろげながらわかつてきたような気がする。それはあの時いわれたとおり、言葉であらわせない抽象的なものである。

人間というものは成長するにつれて欲が出てくるのだ。これは人間に限らず動物すべてにいえるかも知れない。自分も中学校を卒業するころは非常に気が小さく、これといった希望を持つていなかった。だから先生に「高校へ行け」と熱心にすすめられても、このような性質のうえ、農家の次男坊の自分にはどうしても「学校へ行かしてくれ」とはいえなかった。それは家計に余裕がないのをよく知っていたからである。それより少しでも金をとつて家計の足しにしようという気持が強かつたから、学校をあきらめた。あのころのことを思い起すと（高校へ行つていればなあ）と思うこともある。しかし機械工として勉強するチャンスがないわけではない。

現在自分は夜間高校に毎日通っている。たしかに昼間働いて夜学ぶということは楽ではないが、このような境遇で学ぶ自分達には、昼間学生には得られない尊い何物かが得られる。そして自分には苦しさの中にも、将来につながるいくつかの希望があり夢がある。その一つは工員は工員でも単に金を得るだけの工員に終らず、ひろく工業一般の知識を身につけて、将来工場の中堅になりたいと思つているのである。（夢のない人間ぐらい不幸な人間はない）とよくいわれるが、自分には小さいながらも夢があるから幸福なんだろう……。

今日も機械は動く。ガタガタゴトゴトという雑音も、何となく希望に満ちた合唱のように聞える。それはリズムだのハーモニーだのという窮屈なものではない。のびのびとしていて、自分だけにしか味わえない音楽なんだ。機械というものは機構学などの理論の上から見たときは、単に各種機構の組合せにすぎないが、僕から見た機械には魂があり生命がある。それは作業者、すなわち僕自身の魂であり生命である。だからこの雑音も僕自身の希望の歌なのだ。



私の一日

津原 由紀子

(新潟 管巻工 15才)

朝起きてから寝るまで身体と頭を使う。それは、なんと苦しいことでしょう。社会には、これに打ち勝つことのできない人と、立派にやりとげる人の二つがある。苦しいことや悲しいこと、これらに負ける人達は、おそらく自分を弱い人間だという劣等感の中に生きているのだろう。これにひきかえ、何事もやり抜ける人、この人達は自信と希望に満ち、そばで見ても気持ちのよいものである。私もこんな人間になりたいとよく考える。まず朝起きると二十分くらいでふとんをたたみ、洗顔をしたり御飯を食べたりして、五分前ころに職場へかけつけて行く。その忙しい朝から私の一日は始まるのである。仕事が始まつてから終業時間まで毎日同じことを繰り返す。そして時々(こんなことばかりしていて、いつたい何が得られるのだろうか...)と考える。中学時代にはよく友達といひ合つたものだ。「江戸の花は、火事と喧嘩だそうだけど見附の花は何だと思う。たぶん人のうわさでしょうね」と…。このように見附、いや、見附というより工

場といった方が適しているようだ。工場と名のつく所は、大勢の人達が集団になり一日一日を過ごすのだから、話もやはり人のうわさよりほかにないのだろう。なぜつて、誰かが少しでも勉強に関した話をする、つまらなそうな顔をして「そんな本読んだことない。第一見るひまがないもの」などとうそぶく。そして話はまた人のうわさや映画の方へとんでゆく。私はこんな光景を幾度か見た。こんなときなんとなく悲しいような、憎らしいような妙な気持ちになつてくる。中学時代家庭科の時間に「なるべくなら、その人その人に応じた言葉や動作をしななければいけない」と習ったがずいぶん努力を要することだ。時時、人と話しながらその人の態度がいやになつて、気まずい沈黙をつくつてしまう。

これをどうすることもできないのは、自分が馬鹿だからかしら？と考え込むことが時折りある。そして世の中がいやになつてしまう。（こんなことでくよくよするようでは生きられないかもしれない）

こうして職場でたゞ時間の過ぎるのを待ちわび、そして家に帰り夕食をする。あとは何もすることなくぼんやり起きている。いい加減な時間になるとねむり、翌朝はまだねむい目をこすりこすり職場へかけつけて行く……。このような単調な生活のくりかえしがいやになつて、私は夜学に入ることを決心した。実際、夜学生の記録などを読むと辛そうだ。しかし今私は、職場と学校の生活を体験し、そんなにつらいとは思わない。朝七時にエンジンがかかると共に、町中は機

械のガチャガチャという音に活気づき、そして皆が活動を始める。私は？というと機を織るために管巻くだまきをする。管のまわっている合間に、糸屑で機械の掃除をしたり、床をはいたりしてそれを一日中繰り返す。だから家へ帰ると、もう足が痛くて立つことがおつくうになる。母が隣の人に「家の子つたら真青な顔をして帰つて来るんですよ。今に病気になるかと思うと心配で……」と溜息まじりにいうのを聞いて、顔を伏せてしまう。私が意気地がないばかりに、たつた一人の母に心配をかけてと思うと、熱いものが頬を伝つて流れた。

こうした慣れない職場生活も一ヶ月たつた。今では慣れたせいか、別に気にかかるほど疲れなくなつた。夕方仕事が終わつて帰ると、少しでも母のためになればと思ひ、買物にいつたり夕食の仕度をしたり、その合間に学校の本を開いて読んだりノートの整理をする。

夕焼けで真赤に染つた空を背に学校へと急ぐ。日の沈むころ六時五十分に始業合図のサイレンが響きわたる。先生が教室に入つてこられると、皆緊張して出席をとり終るのを待つ。一時間目の中ごろになるとそろそろ騒がしく、あくびをする者、ごそごそ話をする者、中にはいつも眠っている者もいる。そんなのを見るとちよつとなさけなくなる。いつたい学校へなにしくくるのだろう……。体裁で学校へくるのかしら？　まるで私達が馬鹿にされているようだと、腹立たしくなる。このようにして八十分を一時間とする。二時間授業をして帰るのである。

星の出ている夜は、空を見ながらでんでに明日への希望を持ち家路へと急ぐ。

夜空の彼方から星達の、合唱団の歌声が聞こえて来るようだ……。

しあわせは、おいらの願い

仕事は、とつても苦しいが

流れる汗に、未来をこめて

明るい社会を作ること

皆んなで歌おうしあわせの歌を

ひびくこだまを追つて行こう

ああ、きょうも一日平穏な日だった。

女工なりとも

籠 瀬 ス イ

(富山 紡績工 16才)

私はある紡績工場に勤めながら定時制普通高校の二年に籍をおくものです。紡績にもいろんな仕事がありますが、私はその中の練粗ヘンコという部署で糸になる一步手前のところですよ。今日も白の作業服に黒ズボン、白ズックをはき、腰には運転ブクロという白い袋を二つくつつけたまえかけのようなものをつけ、シノマキのかわるのをおつかけまわしています。

私達の係長はチョボヒゲをはやした、いわゆるロマンスグレーの紳士で、大抵の女の人に好かれています。私達の工場には昼専と番付といつて、保全と、運転という、時間的作業的な区別があります。昼専の人はいつも昼ばかりで、番付の人は早番と後番にわかれ、これが一週間交替になつています。だから私の場合には一週間交替にしか学校に行けないわけです。けれども一週間をふり返つてみると、その間にはいろいろなことが走馬燈のようによみがえつてきます。今日も後番の二日目、朝からひどい雨です。寄宿舎より四、五百米くらい離れた同級のYさ

んの職場までノートを借りに行つてきて、スカートをしぼつたら水がジャーと出たくらいです。でも「これで安心。きのう皆が先生に教わつたことを知ることができるといいです。」といつて、部屋へ帰つて見るとまだ部屋の人が皆寝ていました。皆は後番がよいといひます。しかし私は早番の方が大好きです。学校へ行くと、今日の疲れも、部屋でのもつれごとく、どこともなく遠く遠くふつとんで行つてしまひます。そして黒板と先生を相手に少しでも何かを読みとろうと一心になるのです。また五分間の休みの時間は童心にかえつて皆と冗談をいい、またくやしかつたこと、楽しかつたこと、苦しかつたことなど語り合つたりします。

今日もこうしてノートにより昨日の学課を学びそして働く始業時間となります。ようやく仕事も少しひまになつたので、汗をふきふき時計を見たら五時三十分……学校では今ごろは先生がガラリノと戸をあけて入つて来る。皆は急にまじめな顔をして礼をする。「エー今日は十三ページの能楽のお話だつたな」と、いつもの調子でいつているだろう。ああ私も早番か昼専だつたら行けるのに。今ころはSさんが読みをあてられているかな、などと思つてふと気がつく、汗とチリで向うが見えないくらいだ。これは大変とあわてて台へ入るのです。

また試験の時など、運悪く後番にかかり試験を受けられない場合があります。そんな時はきまつてすぐに係長の助けを求めます。

欠勤者があり余剰人員十パーセント以上必要となると、どうしても台を休ませなければなら

なくあります。そんな時私は「今日は人員がいらないからいいわ」というと、「人がいなけりや僕が見ていてやるよ」と私を出すのです。私はあたりの人目をさけて洗面所で綿ぼこりをはらい、学校へ急ぐのです。試験を終つて帰つてくると、いつも八時過ぎの休憩も終り、皆一生懸命に働いています。夕食も食べずにこれから十時までかと思うと、その場ですわりたくなるくらいです。しかし係長が来て「今日はどうかたつた」「うまくいかなかつたわ」「明日こそがんばれよ」といつて肩をポンとたたいてくれる時は、ただ涙がこみあげてくるばかりです。（もつとしつかりしなくては、これほど親切にしてくれる人がいるのに）とおなかのすいたのも忘れて働くのです。

しかし工場にはこんなよい人ばかりではありません。休憩時間に少しでもと思つて本でも読んでいようものなら、「インテリ―女工か」とか「未来の女代議士様か」「女の学問なんてくそにもならぬ。嫁にいけば理屈ばかりいつて、姑におこられるばつかりだ」などと陰口をいわれたり、また直接に耳にしたりする時には今までの夢も希望も一瞬に消え去り、ただ夢遊病者のようにそこらをかけまわり、手に持っていた本などもなげつけて（なぜ女工なるがゆえに学問が必要でないのか）（私はいつたい何のために、誰のために勉強しているの）などと、何度も何度も自分に聞いて見ます。また部屋へ帰つてからもわざと『明星』『平凡』を見たり、ばかな話をして、教科書を開けないつらさ……。

消燈がすぎてからむつくりおき出し、暗い廊下の電燈の下で、冬は寒いすきま風に身をちぢめ、夏は蚊にさされながら、むさぼるように本を読みふけたことも寄宿舎生活でなくては味わえない話です。

しかし私は希望をすてません。昨日までの女工ではなく、新しい世代に生きてゆける理想的な女性になるよう一心に努力しています。

仕事の楽しさ

宮 前 礼 子

(石川 給仕 16才)

私は三十年に中学校生活を終えた。就職難のころである。母も兄も心配したが私はべつに心配もせず残り少ない学生生活を惜しんだ。

これが私の性格とでもいおうか。幸い学校側から給仕をしてほしいと話があつたので、私は学校に入ると勉強ができると思い「ハイ」と返事をしたのだ。家庭の事情で進学できなかった私には本当によい所だと思つた。四月十日、うれしい、心配だ、この二つの気持がごつちやになつて学校へ行く。新聞つゞり、お茶の接待、騰写板すり、電話の応待などの仕事から実社会の第一歩が始まる。友達がわざわざ私を訪ねてくれたのでいちだんと毎日が楽しくなつた。「世の中はつらいぞ」と聞いてきた私には、どんなところが、どんな点が、と不思議な気持だつた。でも私は一年生だ。これからうんとがんばつて一日も早く世の中を知らなければならぬ。そのためには反省が必要だ。私は日記という唯一の友をつくつた。そして毎日反省した。

——騰写板すり——

読みやすく、紙をよごさず、さつと仕上げることが第一の勉強だ。刷る方は早くなれたが紙を早く数えるのだけは困った。そこで西洋紙を $\frac{1}{2}$ に切つて、ひまな時何度も数える練習をした。その結果一年たつた今、騰写板だけは自信がもてるようになり、母に話すと喜んでいた。

——電話での応待——

第一に田舎育ちの私には、方言やなまりが多くて電話口に出ると、思うように話せないのが一番困った。赤くなつたり、先生方に笑われたこともあるが、そんなことでよくよしてはいけないと思い、私も一緒に笑つた。相手の要件をすばやくつかまえるつてことがむづかしい。新聞、雑誌などで電話のことが書いてあると必ず読んだ。だがいざとなると胸がどきどきしてくる。経験だ、何ごととも経験だ。朝、家を出る時今日は失敗しなければよいがと思うと、楽しい一日がさびしい一日に変わることもある。これではいけない。経験だ。

——お茶の接待——

時間が終るときつと配る。濃い茶は誰、うすい茶は誰とそれぞれの先生の好きなように気を配る。先生方はだまつていらつしやるが、そんな点は私の方で気をきかすのが当然だと思う。「どうぞ」といつてさし上げると「ウム」といつて受けとつてくださる。そんな時がいちばんうれしい。今年はお茶について一つ勉強してみようと思う。

辛いこともあるが働く所が学校だから、遠足に旅行にと楽しい行事も待っている。生徒と一緒に歌いながら山へ登る。何と楽しいことではないか。私はふつと、給仕をしていてこんなふうでよいかと思う。そのたびに女の先生に聞いて見ると「平気だ」という。「私が留守します」というと事務の先生が「行つてこい、行つてこい」といつてくれるし、他の先生も「さあ行くぞ」と私をさそつてくださる。

私は幸福者だ。友達は今ころ汗を流して働いているのかと思うと、じつとしてられない。負けるような気がする。わからない問題は先生に聞いた。先生方は「今年はうんと勉強しろ。珠算、ペン字などよいか、二年目だぞ。いつまでもぐずぐずしていると皆に追い抜かれるぞ」と力づけてくださる。だから私の気持も自然に明るくなり、時々いやなことが出ても何くそ、と思うようになった。放課後はひまな時、バレエをやる。一日の疲れを落すのだ。学生時代にバレエの選手をしていたので少しはできる。幸福者だ。世の中は十人十色でいろいろなこともあるかもしれない。私達若人は全力を振るい、何事にも負けない精神と身体を養わなければならない。

初めて職について

山 本 茂 子

(石川 織物工 16才)

私は今春九年間の長い義務教育を終え、初めて実社会の生活に出た。その時はあまりにも中学校時代に考えていたものと遠くかけ離れているのに驚き、恐怖をいだかずにはいられなかつた。けれども数ヶ月へた今日は、その当時考えていたこともいつの間にか忘れ去つて行く。そうして私に痛切に感じられたことは、環境が変わるとその人間も一度に言葉から動作に至るまで変ることであつた。

X

X

人絹工場といえは百台以上織機のはいつている大工場を思い出す。しかしそんな大工場といつたら数えるばかり、あとはみな二、三十台の個人工場ばかり。私の家もその中の一つである。朝は七時から夜は七時半、それからまた十時まで家内だけで残業をする。十時以前にしまふのは大きい工場だけで、個人工場はみな十時以後までしている。卒業した当時は学校のこと

ばかり考えた。十五日もたつとだんだんわすれてくると同時に、近所の人については、たおきをおそわつた。工場に育つた私は小さい時からみていたせい、他の人ほどあまり苦勞せずに見えられた。けれど糸がぬけたり、飛（シャトル）をかつて糸を七寸も八寸も切つた時といつたら、目から火花が出るような思い。そうして心の中には明日からはやめようかしらと思う。しかしすぐまた恩師の「しんぼうだ。しんぼうだ。人間にはしんぼうと根氣がなかつたら、牛馬と全く同じだ」という言葉が思い出されるのであつた。私の一つの心が二つに分れて迷うのだが、最後はしんぼうするのが結論。切れた糸を、教わつてゐる人が一本一本つむいでいる様子を見ていると氣の毒やら、情けないやらで、かみしめてゐる口びるの方がまけ、ひとりであつた涙がほゝを伝つたことは何度もあつた。おかげで今では人並に織機を六台もち、二、三十本の糸ならつむぐことができるので喜んでゐる。また自分の織つた製品が検査員の手によつて、赤く大きく「一等品」と印を押された時ほどうれいことはない。工場をしまふなり自宅に飛びこんで「お母さん今日の検査で私の製品みな合格よ」というと、夕食の仕度をしていた母は手をとめて「それはよかつたわね、これからその調子でね」と、につこり自分のことのように喜んでくださった。

残業が終り飛（シャトル）を二ちようそろえて、今日も無事に働かせてもらつてありがとうと感謝の氣持で自室に入る。今までしばらくいられたな、わがとかれたような氣持、何からしよ

うかと迷うほどたくさんの仕事がある。なつかしい友への便り、通信教育、幼い頃から好きな読書、時のたつのもわからない。隣室から「早く休まないと明日の仕事にさしつかえるよ」と母の声、なんとなく返事は重い。そのせいか起床する時ほどつらいことはない。

台所から「六時十分前ですよ」との母の声、わかっているけどおきられない。二度目もだめだ。三度目の母の声はきびしい。はつとしてとび起きると六時過ぎ「お母さんすみません」とただ一言。朝食がすむとすぐ工場へ、モーターがグググッとはいると、今日も一日無事でありますようにと心の中でいのりながら働く私である。

けれど同級の人達の姿を見ると、劣等感をもたずにはいられない。小学校の時からあんなに仲のよかつたAさんをみてもすかしてしまう私になつて、自分ながらもなさけなく思う。でも仕方がない。進学も実現できず、どうにかして定時制でもと思つたがそれもだめ。せめて学校に行かなくとも自宅で勉強する方法つてないものかと考えたすえ、通信教育が思い出されて現在が続いている。昼休みでも本を読むと年より達はきまつていう「工場のはたおりの女が本なんか読まなくてもよい。それよりもはたをおればいいのに」と口ぐせだ。けれど私は反対だと思ふ。学校に行けなかつた我々が、このひまに本でも読むことができなかったら、一体どんな人間になるだろう。また年よりになつてから、若い勉強したい盛りの人にそんなことをいつたら、どんなにさみしくかなしむことかしかない。若い働く者よ、進学できなかったことは残念

だが、職場の技術を身につけながら、また一方ひまをみつけて本を読み、新聞を読み、明日、明後日と変る政治に関心をもつて、これからあとの問題は若い我々が負うべき問題なのだ。そうして明るい政治を行い、明るい日本を築きあげようではないか。

行 商

加 藤 敬 三

(福井 行商 17才)

僕の仕事はこぶ巻行商である。つまりこぶ巻をリヤカーに積んで、市内を売り歩くのだ。魚屋や八百屋の小僧ならどこでも珍しくないだろうが、僕の仕事はちよつと変つてゐるので、サラリーマン・学生・おくさん達など、道で会う人は必ずといつてよいほど僕に目を注ぐ。そんな時、いやだなあとと思う。また人が前を行くと、どうしてもラッパが吹きにくくてしようがない。「君、ずつとあの商売を続けて行くつもりかい？ なかなか大変だな」とよく人にいわれるが、自分でもなぜ、こうしてつらい仕事をしなくてはならないのかと、つくづく思うことがある。

毎朝行商に出るのは七時である。そして夏は日陰でさえ暑いのに、炎天下を数時間（四里以上）も歩きつづける。顔も手も背も汗でぬれ、シャツはびつしよりとなつてしまう。海水浴に行く人人を乗せた電車が目の前を通りすぎて行く時、ふと自分があわれになる。そして家へ帰ると、体は綿のようだという形容そのもので、屋ごはんを食べると知らず知らずその場にねむ

つてしまふ。しかし家の手伝いもせねばならず、夜は学校にと、なかなか体が休まらない。

また冬は北国特有の吹雪がところきらず吹きつけ、リヤカーを持つ手は骨まで凍つたかと思われるくらいになり、しまいにはお金も数えられないようにこじけてしまふ。せめて一分間でも火にあたりたいと思つても、どうにもならない。

考えて見ると、僕はほんとうに不運だなあとと思う。生れてから父も知らず、いたずらな運命の神は、母をも幼い時にうばつてしまつた。そして後に残つた祖父母に育てられて来たのだが、祖父母はもう七十才も越してしまつたのに、今日もなお僕のために働いてくれているのだ。朝から夕まで、老体をひきずつて働いているのを見る時、何と言つて祖父母に感謝してよいか分らない。どうにかして祖父母を樂にしてあげたいがどうにもならない。

僕は毎朝多くの通学生に会う。丁度八時頃、大学高校、小中学校などいくつかの学校がかたまつてゐる近所を歩くからだ。縦の道も横の道も各各の学校へ行く学生の姿で一ぱいになる。そんな中を僕はラッパを吹きながら行くのだ。多くの学生の中には、かつては同じ教室で学んだ友もいる。親しい者ならば「お早よう」と声をかけ合うが、あまり親しくなかつた者や、女子の姿が見えると、ひとりで足は横道にそれてしまつてゐる。なぜだか自分でもわからない。そんな時、無念の涙をこらえるのがせい一ぱいなのである。あのように、カバンをさげて学校へ行けるのは幸福だなあと思う。

しかし、僕は此ころあまりそのようには考えなくなつて来た。いくら自分の生活がいやになり苦しんでいたとてどうにもならない。彼等は今こそ幸福か知れないが、将来は必ず困難な社会に出なければならぬのだ。

いや、それよりも幸福とは何か？という問題が大切だ。自転車が得られればスクーター、ラジオが得られればテレビ、金が得られれば地位名誉と、人間の欲望はつぎつぎと高くなつて行く。そんなものを追いかけても何にもならない。結局は心の問題だろう。

僕はこの三年の間に、魚屋、パン屋、八百屋などに働いている多くの者と友達になつた。これらの人々と話をしていると、ひとりでに氣持が明るくなつてくる。皆一生けん命働いているのだ。ある友達は僕にこんなことをいつた。

「人間は誰だつて働かねばならないのさ。学校へ行っている者でもいつかは仕事につかなくてはいけないのだよ。僕らのように早くから社会に出ている者は一足進んでいる。そして苦勞を多くしているからそれだけ強くなつていると思うね。苦勞をしていない者がすぐ参つてしまふようなことでも、苦勞をして来た者にとつては何でもない。つまり、少しでも早くから苦勞をした方がとくだよ。人間は一生が勝負さ。そのように考えてくると僕らの方が幸せだと思ふよ」。なるほどその通りであろう。彼はほんとうに楽しそうに仕事をする。彼のような人は幸福だろう。

自分の生活に真に満足できたらそれで幸福ではないだろうか。

不運を甘んじて受け、それと力一ぱい戦つていこう。抵抗が大きければ大きいだけ、自分の力を十分發揮できる。その方がどれだけ、人生に生きがいを感じるかもしれない。

今の世の中はひどくよごれている。国会からしてあの有様だ。そしていたるところに賄賂が横行している。しかしどんなにまわりが汚くても、蓮の花のたとえの如く、清く美しく生きたい。そう思つて今日も働いた。明日も明後日も、いや一生を自分の足で力一ぱい歩んで行こう。

私の一日

中 江 久

(福井 工員 17才)

ゴッという音、ついで地震のように寝ている僕の体をゆすつて行く。(六時の電車だな)僕は半ば夢の中でそれを意識する。もう朝になったのか。昨夜からのねむりも、ほんのつかの間のことのような。昨夜読んだ本の文句が脳裏にひつかかっている。六時過だ。すぐ起きねばならぬ。しかし体にはまだ疲労感が漂っている。もう少し、五分だけでもいいから寝ていたい。こんな欲望がむくむくと湧いてくる。くそつ精神一到……。気合をいれて起き上る。

便所の中では必ず本を読みながら用をたす。一分も無駄にできない。

食事後は出勤まで約三十分、昨夜のラジオ講座の復習をする。

七時半に家を出る。勤めは八時からだ。自転車で勤務先まで十五分ほど、この時間はメモを見て英文を暗記することになっている。また仕事服のポケットには英単語集を入れておき、便所へ行くごとに一つづつ覚えてゆく。

勤務先は木琴を主に製造している。僕の仕事は木琴の調律である。ボンボンと叩きながら鍵盤の裏をえぐつて音の高さを合わせる。一見単純な作業に見えるが、わずかな音の差を聴きわけられねばならず、また単調であるだけになおさら根気のいる仕事だ。

幸い主人は僕らの仕事に十分理解を持ち、また僕が夜学に通うことも考えてくださり、たびたび「無理をしないように」といわれるので、病みがちな僕も、今日迄どうにか働かせていただいている。仕事に疲れた時など、この仕事がいやになることもあつたが、今日までに僕が調律した何万台かの木琴は、今頃は子供達と一緒にボンボン歌っているに違いないなどと思うと、おもわず笑いが浮んで来て（一生懸命調律しなけりや）と力が出てくるのだ。

休み時間は皆ソフトボールをして過ごす。僕はたいいていの日は本を読んで過ごす。昼の休みは一日の中でも貴重な時間なのだから。

仕事は四時半にしまわせていただいている。服を着換えてすぐに学校へ走る。途中同級の人の中で弁当をたべさせてもらう。家と職場と学校とは方角が違うので弁当を二つ持つていく。一年二年と二年間胃をわずらつたので、食事をゆつくり時間をかけてたべる。

学校は五時半からだ。僕は仕事を早くしまわせていただくので、めつたに遅刻をすることはないが、中には授業中に額に汗を流してかけこんで来る者も多い。そんな人達を見るたびに、今の自分の恵まれた職場をありがたく思わずにいられない。

一二時間目は昼の疲れが出て眠くなる日が多い。先生の話を聴こう、絶対ねむらないぞと思うほどこえつてますますねむくなり、どうにも耐えられなくなつて、ほんとうに寝てしまうこともある。左右の者も疲れた顔をしている。僕達夜学生はそばの者が居眠りをしても、授業の邪魔にならぬかぎりそつとそのままにしておく。三時間目ころから調子が出てくる。夜学生の多くは家でほとんど勉強する時間が無いので講義は一心に聴く。四時間目も半分過ぎるころ、公会堂のミュージックサイレンが九時を告げる。一わたり鳴り終つて、最後の一つの鐘の音が重々しく響き心の底までしみこんでくる。今日も残り少なくなつた。教室内の空気も幾分やはらいでくる。

四時間が終ると皆思い思いに背伸びをして、ほんの一刻教室が騒がしくなる。しかしそれも五分とたたぬ間にひそまつてしまふ。皆一人一人家から見えぬ糸でたぐりよせられでもするかのように、一目散に家へ急ぐ。

家まで約二十五分、町はずれの電車線沿いの道を、ランプの光を頼りに一人自転車走らせる。家へ着くと家人はすでに寝てしまつてゐる。疲れ切つた体を机に向けてラジオ講座を聴く。流れ出る先生の声にいつも新しい力がわき、しらぬ間に講義の時間が過ぎてしまふ。ラジオを切つてしばらくすると、十一時の最終電車が通り過ぎる。それからまたしばらく小説を読んだり、将来を考えたりして過ごす。「成長をほつするものは根をおろそかにしてはいけな

い。若くして根をおろそかにしたものは大人になつて成長が早くとまる」。

若い僕には未来があり、希望も大きい。だが人はいつまで生きると保証されない。僕の命もいつまで続くかわからない。しかし、とにかく今日一日は生きてきた。今日は明日へとつながり、将来の希望ともつながっている。だから一日一刻もおろそかにできないのだ。この世に生まれ出たからには、世のために何事かなさねば生まれ甲斐がない。できるかどうかはやつてみるまでわからぬ。ともかく全力を出してぶつかつて行くのだ。



働きながら学ぶ喜び

十 返 一 平

(山梨 農業 17才)

空は晴れている。文字通りのさつき、晴れである。そろつて穂を出した麦畑、すでに葉が開きつたような桑園。その間に美しく見える油菜の畑。そこにはまだなごりをおしむように、ところどころに黄色く菜の花がのこつている。ここ二、三年、この町も果樹ブームがおとずれ、麦畑の中に桃やブドウの苗の植えつけられているのが見える。そんな景色の続いている野良道の間を曲りながら、私は道具ののつていないリヤカーを引いて畑の方へ歩いた。

峡東中学校を卒業して約一年、高校だけはどんなことをしても行きたいと思つたが、三学期に入ると父が突然神経痛をおこした。正月気分の抜けきらない一月十五日から約一ヶ月、父はとうとう床から起きられなかつた。それからというもの、父はぐつと年を取つたように見えた。三月頃父の散髪をしてやつた時、すその方にかなり白髪が見えた。以来私の気持は次第に変わった。五反百姓のこの家で、自分は学校に行き、この年取つた父にこれから先まだ働かせようと

いうのか……。あれから一年、私もだいぶ世間というものがわかつてきた。金さえあればどのくらいの力を持つかということも。高校を断念して落担していた時、近所の青年の人が定時制を進めてくれた。その人は定時制を卒業した大先輩だった。それからの私の生活は、中学のころには想像もつかないほどのものだった。私は昨年こぞの五月生まれて初めての日雇に行つた。それは授業料を自分で出そうと思い、またいくらでも家のためになつたらというほんの小さな考えからだつた。初めての日、私は自転車の後に弁当箱をつけ、麦わら帽子に学生服で行つた。「オイお前は年は幾つだ」「今年で十六才です」「よわつたナア」。土方は十八からでなきや使えんのだが「棒頭といわれる赤い印の入つたハッピを着た人は、そんなことをいいながら私の頭から足先までながめていた。学生服などを着ていたのでなおさら子供に見えたのだろう。その人は道具や自転車の置場になつている小屋へ行き、そこにいる二三人の棒頭と何やら話していた。皆は私の方をじろじろ見ていた。その内の一人がやつて来て「今は人が少なくて困っているから特別に使つてやる。こつちへこい」小屋の方を指すとさつさと歩き出した。私はほつとして、弁当箱を取ると後に付いて行つた。

それからの私は全く泣きたいような毎日だつた。いや最初の中はほんとに涙が出た。中学のころ「土方、土方」といつてばかりにしていたのが、何とたいへんな仕事だろうとしみじみ思つた。常用じょうようといつて七時半から四時半まで正味八時間働いた。コボの折れたのにパケツを二ツ付け

て、かなり離れた所の井戸まで水をもらいに行くのだ。「小僧、小僧、水をこつちへ持つてこ」私の姿を見るとあつちでもこつちでもそう言った。声のした方へシャクを入れてバケツを運ぶのである。「何をぐずぐずしているのだ。こつちへ先に持つてこなきやだめじやねエか」若い人達は必ずそういつた。彼らは二人から四人で組になり、駒といつてわり当てられた仕事を早くすませれば早く帰れるのである。だから皆早く帰りたいため一生懸命やつた。汗びつしよりになり、のどもかわいたのだろう。私の姿を見れば「小僧」といつて呼ぶのも無理はなかつた。だがそんなことをしているうちはよかつたのだが、数日たつとモッコをかつがされた。藤の蔓で編んだモッコに、小石やら砂を入れてかつぐのである。「モッコのかつき方を知らんのか」相棒になつた五十過ぎのおじさんは、言葉は荒いがわりと親切に教えてくれた。その日私は肩が痛くて困つた。こぼを肩にのせることができず両手でささえてかついだ。そんな恰好がおかしかつたのか、駒の人達はわざと声をあげて笑つた。翌日私の肩は赤くはれた。さわつてみるとひりひりした。「伸二すまん、つろうかつたら休めよ。無理して体をこわしちやなにもならん。そんなにまでしてかせがんでもどうにか食つていけるのでナ。それにお前は夜は学校へ行かねエならんしな」父は目をしよぼしよぼさせ、そおいつた。私は父のそんな言葉を聞くと、なおさら行く気になり、姉のこさえた弁当を持つて出かけた。

モツコをかつぐようになって約十日間、風呂にも入らず、学校へ行つてもたゞ行くというだけ

で教室の後の方でぼんやり講義を聞いた。机にうつ伏して終るまで眠つてしまつたことも何度かあつた。風呂に入らなかつたのは、赤くはれた肩が湯に浸たすとしみてたまらなく痛かつたからである。そんな毎日が続き何日かたつた。相棒のおじいさんが「オイ高野、明日は会計だからハンコを持つてこい」といつた。ちよつと私には何のことかわからなかつたが、とにかく金をくれるということだけわかつた。翌日仕事が終わつて道具を小屋に片づけていると「オイちよつと」といつて棒頭が呼んだ。金をくれたのである。茶色の薄い封筒の表に高野伸二殿とあり、裏には3600—と記されていた。私はただうれしく暫らくその封筒を見つめた。手に持つ封筒が霞んで見えた。いつか涙が出ていたのだ。私は中ものぞかず、そのまま二つに折ると学生服の内ポケットに入れた。そのまま持つて帰つて、父に中を開かせてやろうと思つたのである。その日の帰り、私は何度もボタンをはずして内ポケットを調べた。その夜父は私が渡した封筒を仏壇に上げ線香を立てた。母がとん死した当時まだ小学校二年八ッだつた私が、お他人場へ行つて働いて、初めて貰つた金。亡き母にそれを知らせるためであろう。私も線香を一本立て、時間が来たので学校へ行つた。六月から私は授業料は一切父から貰わず、またよほど高価な物でない限り自分の物は自分で買つた。私は会計を貰うたびに、父にそつくり渡した。父はそのうちから半分を私にくれた。私はその時左手で思わず肩にさわつてみた。もう今ではほとんど痛く感じなかつた。私はその時ほど金がどのくらい貴いものであるかを初めて知つた。自分が實際

にからかわれながら、肩を赤くして泣いてまで働いて得た金。とても無駄使いができなかった。あれから一年……百姓が忙しくなると、私は父となるべく早く家の方を片付けてからよそに手伝いに行つた。よその仕事はともやりにくかつた。しかし私にとつてそれはよい体験となり、私はそれらの体験をするたびに大人になつたような氣もした。学校は最初のうちはおやくめに行つていたのが、英語が面白くなり、数学がわかつてきてだんだん熱心になつてきた。国語と一般社会は中学のころから私の得意科目だつた。それに定時制を卒業しても全日制と全く同じ資格が与えられるということは、私の氣持を一層勉強好きにした。父も雨の降つたような日は「勉強をしる、勉強をしる」といつてくれる。私はこんなにも私のことを思つてくれる父を持ち幸福だと思う。この三月には四年生約十名ほどが、私達の分校から散つて行つた。やがて四月になり新しい一年生が入つて来た。私は定時制は勉強ともう一つ精神教育も教えてくれる所だと思ふ。それは先生が直接教科書で教えるのではなく、昼間一般の大人達の中へ入つて生活しているうちに、自然と人格もできていくような氣もした。だから今年一年生が入つて来た時、私はずつと彼らより大人のように思えたのである。私は五月に入ると同時に奨学資金貸付願を出した。もし今年だめだつたら来年も出してみるつもりだ。奨学金の分だけでも家のためになるのならうれしい。私は畑についた。私も人並みに桃の苗を植えるため、その穴を掘るのである。たて横二米深さ一米の穴を掘るため、今シャベルで土を投げようとしている。空はさつき晴れである。

しあわせの歌

柴　　さとみ

(長野　店員　17才)

H中学へ向いながら、両側に木々の青葉を感じて、せまってくる感情で自然にペダルを踏む足へ力が入つて来た。

「しあわせはおいらの願い、

仕事はとつても苦しいが、

.....」

心の中で力一杯歌いながら、あふれる涙もかまわず、風の中を自転車飛ばした。

今日は朝からいやな日だった。

店内の掃除をすまして、山のような配達雑誌の整理に私は大わらわだった。北部、南部方面と簡単に分けたが、それですぐ配達が始まるわけではない。その雑誌・書籍を配達順に整理し、ところによつては納品書の必要なこともあった。

やつと、配達できる段取りになり、ホッとしているところへ、奥の間から店のおじいさん（孫があるので私達はどう呼んでいるが、有限会社K書店の社長兼取締役である）が身仕度しながら出て来た。何かいらいらした表情で私を見るなり

「まだ配達に行かんのか、何をぐずぐずしている」

「さつさと行け」とどなつた。

「はい。」

急いで風呂敷に包みながら、〃さつさと行け〃が気にさわつた。自分は起きて間もないのに、いくら使用人に対するとしてもひどいと思つたが、さつさと店を出て自転車に飛び乗つた。あまり急いだため、配達の一部を置き忘れたことを途中で気づいたが、もどらなかつた。二度、三度、配達に回つていつもよりずっと早く配達が終つてしまつた。

時計は十二時を大分過ぎていた。私にはH中学へ行く仕事が待つていたが、誰も食事をしなさいといつてくれない。とうとう一時を打つた時、

「私食事に行つて来るわね」と口をきり、板の間へ一足掛けた。

「あ、その前に池田さんのところへ、これ持つてつてくれない。さつき電話がかかつて来て、待つているかも知れんで」、店内の机で手紙を書いていたお婆さんがいつた。私は自分から食事のことなどいいだしたのでたまらない屈辱を受けた。黙つてその本を取り上げると店を出た。

池田さんからの帰り、もう決して自分から食事をするなどといいたすまいとそう思い、重い心で店へ入った、と、私の顔を見るなり

「Sさん、学生が帰り始めると忙しくなるでね。早くH中学へ行つて来て」

お婆さんは待ちかまえていたようにいつた。私はその無表情な、口ばかり動いて眉一つ動かさない冷い顔をながめた。

私の驚きなどおかまいなしに、お婆さんの手のペンはスラスラ進んで、便箋の次のページに移った。私は何もう気力もなく、自転車をおし出した。

H中学への仕事は簡単にすみそうな仕事ではない。多分、帰りは三、四時になるだろう。

町の家々、道行く人々の色彩だけがぼんやりとひとみに映つて過ぎた。いつも二度三度、ホッと息を入れる急坂も一息に登つてしまった。何かわからない、自分に対するみじめさ、哀れさがたまらなく胸にしみた。

早くこんな感傷は吹き飛ばしてしまおうと、今度は声を出して歌った。

……みんなと歌おう、

しあわせの歌を、

響くこだまを追つて行こう……。

H中学の校舎が見えて来ると、私は平静の顔を取りもどした。H中学の仕事をすませて、そ

の明るいふんいきにじつとしていたかつたが、出がけにいわれたお婆さんの言葉が「早く行つて来てね」「早く」「行つて来て」と耳にひつかかつて追つかけてくるようだった。その言葉に追われるように店へ舞いもどつた。三時半だった。

お婆さんは意地悪のつもりでなく私の食事など気になかなかつたため、忘れていただけに違いない。が、私がまたそれをいいだすことは己を敗ぼくに追いやるだけだ。私は自らをみじめな立場に追いやることはすまい。一食二食抜く気持もよい経験だ。私は黙っていることによつてかえつて自己満足を感じ、みじめな気持はすっかり消え去り、明るい気分になつてきた。弁当は重いまま、カバンと共に学校から家へと運ばれた。家でいぶかしげに問う母に私は低い声で答えた。

「うゝん、ちよつと、ほしくなかつたの」。

遠い道

安藤 慈朗

(岐阜 工員 17才)

リリリリベルがなりひびく。それを（悪魔のベル）とぼくは呼んでいる。ぼくに対してあまりにも冷淡でしかも残酷であつたからだ。その音を聞とぼくの顔はいつそうこわばるのであつた。ベルトが回転を始める。せん盤が回りだす。工場の中が一度に活動を始める。まるで一時に万雷が落ちたかのようなのである。八時から四時五〇分まで、くる日もくる日もどなられこずかれ、まつ黒になつて動くぼく。それは辛く苦しかった。夜学へ行くため十分早く帰るのをしろい目で見られ、職工のくせにとののしられ、友達からはよく働くからひいきされていると疑われ、それこそ四時五〇分までの間、ぼくにいわせれば生きながらの地獄である。

「ぼうずちよつとここへこい」ぼくが鉄板に穴あけをしていると突然班長に呼ばれた。

「これは何だッ」行くとやにわにどなられた。いわれておそるおそる箱の中を見た。二、三日前ぼくが穴あけをした自動車の部品である。これがどうしたというのだろうか、不審に思い

ちらつと班長の顔を見た。

「馬鹿者っ」声といつしよにツバがぼくの顔にとんだ。

「一万円の損害だぞどうする気だッ」ひげむじやの顔をつき出してどなるその時になつて、穴の位置が違つていたのだなと直感した。ぼくの顔からはみるみる血の気が引いていった。一万円、とうていぼくには及びもつかない大金である。しかしこの穴はただTさんにいわれた通りにあけただけである。

「一体どうしたんや」その時当のTさんが近寄つて来た。思わずぼくはホッとした。班長から事情を聞終つたTさんはぼくを助けてくれると思ひのほか、あまりも意外な言葉。

「ボウズお前ここへ来てから何ヶ月になる。一年たつて満足に穴一ツようあけんのか」ぼくは思わず耳を疑つたが、確にTさんはそういつたのだ。頭がクラクラッとする。

「違いますッ違いますッ……」心の中で必死に叫ぶ……がTさんににらまれるとどうしても口には出てこないのだ。

「今日はゆるしてやる今後間違を起したら弁償だぞ。早く仕事をしろッ」

「すいません」そういうより仕方がなかつた。この時ほど勇気のない自分を悲しく思つたことはなかつた。だがなんときたない大人の世界だろうか。仕事も手につかず、考えれば考えるほど悲しくなるのだつた。ジーンと鼻がつまり、まぶたが熱くなつて来る。

「慈朗の意気地無し、泣く奴があるか」一ツの心が叫ぶ。

「なーに泣くものか泣くものか……」また一ツの心がいい返す。グッと歯をくいしばつて懸命にこらえようとする。だがしだいにまぶたがかすんでくる。今にもあふれ出そうになる涙、その時ちらりと母の顔が浮んだ。

「お母さん」思わず小声でつぶやいた。

「どんな悲しいこと、苦しいことにぶつかつても負けず、くじけず進みなさい。注意された時は自分の腕が未熟だと思い、一層努力しなさい」母の細い声がささやいた。ぼくは無意識にしゃがみこんで、とけてもないクツのヒモを結びなおした。泣顔を見られるのが恥しかったからだ。そつと目頭をおさえた、入つたゴミでも取るかのように……。その指の間を二すじの涙がスーッと糸を引いた、が、むしろそれを快よくさへ感じた。しばらくして涙もおさまり立ち上ろうとしたが、ぼくの一挙一動に皆の視線が集中しているように感じ、泣顔を見られたかと思ふと恥ずかしくて動けなかつた。このまま消えてしまいたいような衝動にさえかられた。そつとまわりをぬすみみした瞬間ぼくはハッとした。時計が四時四〇分を回つていたからである。さあ大変、何もかも忘れてしまい、立ち上がるが早いかすぐ掃除にかかつた。仕事のじやまにならぬよう気を配り、あまりあわてたせいか指を切つたのにも気がつかなくなつたほどである。

「ぼうず、ぼうず」やつと掃除をおえ帰ろうとした時、気短かの〇さんに呼止められた。部

品を倉庫まで運んでくれというのである。

「あのオ、時間がありませんので明日にでも……」

「何ッ俺のいうことがきけんのか」時計は十分前

「い、いいえ……」ぼくはギョッとくちびるをかんだ。

この十分間は、母とぼくが米ツキパッタのように頭を下げて専務さんからいただいた貴重な時間である。ぼくには、大人の世界は情の無い個人主義の考え方をもつた人達ばかりとしか、どうしても思えないのである。やつと運び終え後はもう無我夢中である。手もろくに洗いもせず、服を着るが早いか自転車に飛乗り一氣に曲り角を曲り、工場から見えなくなるとはじめてフーッと大きなため息がもれる。一日の仕事は終つたのである。いつものくせで片手で服を払う。工場のおいがついているように思え、たまらないからである。電車通りを車は一直線につつ走る。会社のできごとがよみがえってくる。皆の顔が浮んで来る。班長の顔、Tさんの顔、Oさんの顔、皆白い目でぼくをにらんでいる。思わず二、三度頭を振つた。その時パッと父のなつかしい顔が浮んだ。口を動かしている。何かしやべつていらしい。アッ笑つた。今度は口をつむつてしまった。そしてそのままスーッと遠ざかつていつてしまった。家を奪い父も奪い去つてしまった戦争が憎らしい、のろわしい。しかしまだボクより気の毒な人もいるのだ。そう思えばまだぼくなどは幸せである。だがなぜ同じ人間同志憎みあわなければならないのか。

誰が人生というものをつくつたのだ。こんなことを時々考えては解決を見い出せないほくである。

車はいつか長良橋にかかつていた。小学校一、二年であらう四五人の男の子と女の子が、身振手振もおかしく話しながらやつて来るのに出会った。少くとも社会の一片を知つたほくにとつてはその子達がうらやましかつた。その時一人の女の子がほくを見た。その澄んだ目の美しいこと、ほくには天使のように思われた。まるで偉大なる発見でもしたような気持にさえなつた。よししまた明日からがんばるぞ。この子達に負けぬように。さあ風よ嵐よドンとぶつかつてこい。

ペタルも軽く車は橋の上を走つていた。川のまん中にボートが一そう、初夏の日ざしを一ぱいに浴びて上がるともなし、下るともなく、ただゆらゆらと……。

コーヒーの陰に

中 村 久 子

(静岡 食堂給仕 17才)

私は昭和二十九年三月、中学卒業と同時に先生のお世話で市内のあるお店に就職しました。ここは旅館、軽い食事をさせる Grill、そしてレストランと、この三つの各部に分れて従業員六十名余りが働いています。そして私はおもに、Grillの方で働くようになりました。こゝでは朝九時半のサイレンと共に掃除が始まる。さあこれから戦斗の時間だ。なにしろ設備が完全でないためと人手不足で、一人の者が皿洗いから皿ふき銀器の手入れ(いわゆる磨き)トイレットの掃除、お客のサービス、はては会計の始末。こんな日が毎日毎日続く。十一時から開店とはなっているが、お客の中にはなかなかわがままな方がいらっしやって、時間前に入つて来ては私達を困らせる。

「相すみませんお掃除が終らないため、お支度が充分できてないんですが」といえば、「この有名な〇〇屋が、こんなことでどうする。どこでもよいから座らせろ」と掃除の途中

へ入つて来てしまふ。

お客商売の私達は、お客第一に努めなくてはならない気苦労、そのうえに上役に対しても氣をつかねばならない心身の疲労は、大勢の就職希望者の中から採用された喜びの日に誰が想像し得たことでしょうか。

今日は土曜日のためかお客の出足がとても好調だ。次から次へとお客はひっきりなしに入つてくる。マンボ調の音楽と、お客のざわめき、立ちのぼるタバコの煙、汚れた空気に油ぎつたあの料理の匂い、こんな時私はたゞたゞぼう然とし頭はフラフラ、氣はいらいらするばかり。はたからはどんなによく見えても実際にその場に入つてみなくては本当のことはわからない。そしてお客の注文に応じてそれぞれことなつた伝票を書く。忙しくなるとつい書き落してしまふ。伝票を付け落した場合、たとえコーヒー一つでも自分が弁償しなければならぬ。そのうえ主人側からは不熱心だからそのようなことになるのだと叱られる。よくはみられないわけだ。よほど緊張して仕事をせねばならない。事務以外の職場つていえばみんなこんな大変なのか。肉体も精神もくたくたになつてしまふ。調理場へ注文を通しに行けば、言葉じり一つ一つを取つてくつてかゝる。しようがない、さからつてはこつちの負けだと思ひすぐその場であやまる。この間はちよつとしたことから私は胸元をとられてなぐられそうになつたので、ぱつとよけてしまつた。涙がとめどもなく頬を伝つて流れた。あゝこれが人生の修業なのか？。でも

私の心を無言で慰めてくれる客がある。それはどんな時にしろ笑顔で愛想を振りまいてくれる外人客である。一日交替で二階ホールの番の時など、とるに足らないウエイトレスでも、その労をねぎらうように笑顔を向けられると今までの苦勞も忘れる思いがする。こうした思いやりは案外日本人のお客には少いのはなぜだろうか。

二階ホールはおもに定食のお客または大勢の会議の室に利用されている。表向きはなやかなこの二階ホールも、一日中働きまわる従業員には大変な仕事場である。ホールの片すみに、洗物一さいするいわゆるデッシュアップとでもいうか、こゝは朝から夜まで一日中皿はカチャカチャ、その上銀器の音がミックスされるので、たとえようがないやかましきである。皿の音はいやに高く響き頭痛がしそうだ。こんな所で一日中仕事に追われていると、音だけで寿命が縮まるみたいだ。宴会などがあり、その後の洗い物は相当たまる。こんな時お湯の出が少なくなつたり、出ても皿が洗えるだけの熱さでなかつたりある時には一滴の湯も出なかつたりする。ボイラー室のおじさんの所へ行つて「すみません。洗い物がたまつているので湯を出してください」といえば、「何いつてるんだ。こつちの知つたこんじゃあねえや、あんまり使うので悪いんだ」といつて、てんで話しにならない。しょうがない。出るまで待とう……考える余裕もないほど追ひ廻わされる日々が続く。それでも時には自分の現在をみて、将来の夢を何に求めたらよいか深刻な懷疑におそわれる。私と同じ職場には三十代の人達もいる。これらのオールド

ミスといわれるお姉さん達の、希望もない悲観的な考え方。そして一日一日失われてゆく青春。私はたまらない気持で目をおおいたくなる。時代の違う私達とは物の見方、考え方も違いお話も合うことのない平行線の上を行く。それでも私達は、このお姉さん達にも絶対服従を守られる。新しい時代の新しい感覚をとり入れて豪華をはこるこのグリルも、その階段のすみにも、あのカーテンの裏にも封建性の根強い空気が十重二十重に私達の身を取りまいている。だがしかし私は私にいきかせる。今は修業の身だ。長い人生にはたくさん苦難が数多く続くのだ。この苦難を乗り越えてこそ、高ねの月を楽しむことができる。私は若い。希望を明日に求めて苦難な日々を切りひらいてゆこう……と。午後七時二十分。一日を終え、疲労と空腹に空腹をおさえ、負けまい負けまいと明るい歩道を走つてゆく。

働 く 体 験

林 啓 元

(愛知 配達 15才)

「チェッ、いやんなつちやうな」とつぶやく声に、仕事の手を休めて窓を見上げたら、細かい雨がおちてきている。ぼくも思わず舌打ちをした。

ここは、ぼくが四月十九日から始めたQ化成株式会社だ。仕事は、この頃流行のポリエチレンで造るジュース袋・洋傘カバーの製造及び販売である。ぼくの受持は袋の裁断とお得意さんへのでき上がり品の配達である。一おう株式会社であるが、家内工業程度に過ぎず、人数も注文取りのY君、裁断のAさん、ぼくの三人に、圧縮機・高周波ミシンに座る女工さん三人の小さな会社である。だから先日、出社後雨が降り出し困つたなと思つているところへ、続けざまに東に西に注文が来た。「それ」と主人はせき立てるので、勢よく出かけたが、ぼく自身は傘はなし「これを着て行け」と出してくださつたのは小学生用の合羽で、ぬれないのは頭と胸だけ、下はびつしよりとぬれるしまつである。

あちこちお得意さんを回るうちに、ズボンは足に浸み通るくらいだ。最後の用事をすまして会社に帰り着いたのが四時五分、ぼくは、ああ学校へ行く時間に近くなつたなと思つた。ところへ「リーン」と電話である。思わずヒヤッとしたが「はい、Q化成でございますが」と出て見ると、やつぱり広小路の方のかき屋さんからの注文だ。明日にでもして貰えたらと思ひながら出かけたが、頭の中は学校に行く時間のことで一ぱいだ。雨はやけにビシャビシャと降ってくる。一心にペタルを踏む。体はびつしよりと骨までぬれてきそうに寒い。また腕の時計を見る。もう後二十分、十分、と登校の時刻は迫ってくる。一心にペタルを踏む。交通事故は、こうゆう時に起きるのだなと頭にひらめく。ようやく捜し当てて店に着いたら、中から女店員に「寒いでしょ、御苦勞さん」といわれた時は、今までにつかえた不満も忘れて、思わずニコツとしてしまつた。その日は滑り込みに登校できた。ぼくは（こんなところに小さな会社の悪いところがあるのだな、それにしても、おとな用のレインコートくらい用意してくれれば、こうまでいやな思いはしないのに）と思つた。Y君にしても、雨の日はコーモリがさをさして自転車に乗つて行くので、ぼく達は雨の日がいちばんいやだ。

ぼくはこの春中学を卒業した。友達は大体進学して行つた。ぼくも進学の方針だつたが、いろいろの都合で働きつゝ学ぶ道を取り、入社したのである。何の心構えもなく働くことのつらさより、むしろ楽しいことばつかりと考えていた方が多かつた。だが働いて見ると、そうはい

かなかつた。楽しいことより辛いことの方が多し。母は「何事も心をこめてやるのですよ」といつてくれるが、家で自由に振舞つていたほくであつたので、主人の言葉にも、つい口答えが出そうになる。ぐつとそれを飲み込むのは実に辛い。一番神経を使わせたのは電話である。なかなか「はい、Q化成ですが」の言葉が出てこず、せつかく聞いた御得意さんの名前を忘れたりした。「毎度ありがとうございます」もなかなか恥ずかしかつた。だが今では、だいぶ板についてきた。入社した頃は、一日中の「リーン」の音には実に弱つた。

月末に給料を貰つた時は、さすがに自分の汗と神経とを使つた結晶だと思ひ嬉しかつた。給料袋は封を切らずそのまま母に見てもらつたら「偉かつたわね」といつてくれた。

働くことによつてわかつたことはお金のありがたさである。なにぶん、ぼくは一日勤めて百五拾円である。映画にしても、よい映画であれば、ぼくの一日分はすぐになくなつてしまう。今までのむだ使いが思われてならない。全日制に進学した友達のことを思うとぼくも負けたくない。とうとうこの月も映画に行かず過ごしてしまつた。でもぼくの耳には、目には、友達よりおとなの生活がたくさん入つてくる。

Y君は「君要領よくやらなくては損だよ、学校の時間がきそうだつたら用事の出ない先に、失礼しますといつて行くんだよ」といつも教えてくれる人だ。

Aさんは、「君、恋愛はまだかね、好きな娘はないかね」と真面目くさつて、時々ぼくを面く

らわす。この人は東京で暮したことがあるそうで、よく銀座をアベックで遊び歩く学生の話をしてくれる。

女工さんは親から「貧乏人の子は体さへ丈夫ならいゝんだ」といわれ学校に行けなかったことを嘆いて、今は自分の力で洋裁学校へ通っている。要領よく、とは時間のことも忘れて、つぎつぎと用事をいいつけていく主人や、家族の用事までもお使いに行かなくてはならないぼく達の自然に学んだ武器なんだろうと思うが、職場の主人を無理解と責める前に、私はもつとなさなければいけないことがあるのではないかと反省しつつ、うしろに荷物を乗せて、今日もまた自転車でおつかいに行くのである。



働く幸福感

岡田喜久子

(三重紡績工 17才)

月日のたつのは早いもので、入社以来、もはや三年目を迎えました。毎年毎年四季の移り変りは平凡ながら、私の生活には大きな変化がありました。なつかしい中学時代のアルバムをめぐりながら、この人達も皆それぞれに人生のスタートを切つたのだと思うと、なぜかしんみりとなります。あんなにあこがれていた進学も今になつてみれば、その目的というものも考えずに、たゞばく然と行きたかつただけの自分が本当に愚に思えてなりません。実質的な生活の幸福というものはたゞ見えや虚栄のために学校にいくばかりではなく、その日その日に汗を流して働いた後のすがすがしい心から味わえる満足感だと思っています。

今年も多くの新入生を迎え、過ぎし自分の入社当時がなつかしく思い出されます。職場へ入った第一感といえば、むうつと暑く、耳をつんざくようなゴウゴウたる機械の響でした。夜、床に入つても神経質な私は職場のことが忘れられず、なかなか眠れませんでした。そして時間

でくぎられた生活は常に私を緊張させたのでした。そんなある日、母からの便りは、はりつめた私の心に温い力を与えてくれました。

「お手紙ありがとう。おまえを送つて帰り、お勝手元で働くおまえの姿をきよう限り見るこ
とができないのかと思つたら、急に熱いものがこみあげてきました。私は朝夕会社の方をお
がんで、無事で一日一日を過ごすよう祈つています。おまえが出た後、憲三も千枝子もよく
いうことをききます。皆で健康に氣をつけて、しつかり心を合わせて働きましょう。おまえ
も友達と仲よくして一意専心業務に励んでください。どのような仕事にあたつてもまじめに
働いてください。新潟県や長野県その他遠い所から来ている人のことを思つてまめに働きな
さい。まめでおればどこにいても同じです。家も近いのですから心配無用ですよ。笑つて働
きましょう。がんばりましょう。母ちゃんもおまえと競争で働くよ」

乱雑な走り書きではあつたが、いつも家においてわがまま一ぱいに育つた私は、初めて親のあ
りがたさがしみじみ感ぜられ胸が熱くなりました。職場においてどのような苦しいことがある
うとも私はがんばり抜くつもりです。不器用で頭の鈍い私ですが、まじめに一生懸命に働
きます。だんだんと機械のまわし方もわかりその反面、仕事のむずかしさがわかる時、先輩の歩
んできた道のいかに困難だつたことか、いまさらながらその経験に頭がさがります。自分が息
をはずませて汗を流してする仕事も、何の苦もなくすらすらと仕事を運ぶその器用さは、一日

や二日ではできない毎日毎日のひたすらな経験のたまものだと思います。

休日や祭日に家に帰ると、「姉ちゃんが来た」と小さな弟妹が走りよつて来て迎えてくれます。私が会社に出てからというものは、家事一さいをきりまわしている妹の手は、がさがさで可哀想なほどでした。それでも平気で「姉ちゃんは何んどつて」といつてせつせと働く姿は本当にいじらしいものです。まだ小学生で遊びたい盛りですのに。「日曜だけは姉ちゃんがしてやるから今日は遊んでおいで」といつてやつたら、ちよつとためらつていましたが、すぐとんでいつて遊びの仲間に入つていました。帰る時弟は「姉ちゃんもう帰るのか。ぼくは、姉ちゃんとの夢よう見る」とさびしげに私に顔をすりよせて来ます。「もう時間やで帰るわな、さようなら」といつて障子の陰になつた時、「姉ちゃんちよつと待つてもう一べん顔みせて」という弟を抱き上げて「またこんどの日曜日に来るでな」と別れる時、血のつながる弟のまごころがあらわに感じられます。

私ที่บ้านにいないことをこんなにも淋しく思つていてくれるのかと思うと、うれしくてたまりません。そうだ、そのためにもしつかりと働かねばならないと決心して、薄暗い夜道を寮へと急ぐのです。

こうして二年間の寮生活を経て四月より通勤することになりました。早番の時は朝四時に家を出ます。後番の時は十一時頃家へ帰ります。誰も通つていない夜道に私の下駄の音だけがカ

タカタとひびきます。一日の汗を流した身に感ずる夜風は気持ちのよいものです。そんな時、きよう日一日の悔なく働けたことの喜びを感ずるのです。

また私にとつて週一回の生花のけいこは、労働で疲れた私の唯一のなぐさめとなつてくれます。働くかたわらに編物、洋裁など婦人としての教養を身に付け、たゆまずめげず、正しき道を突進していききたいと思ひます。

嵐の船出

京 美 季 男

(滋賀 郵便外務 17才)

明るく晴れた田舎道を、いつもの時刻とあまり変りなく赤い自転車走らせていると、心も明るくなつてきて、いつの間にかそのたのしさが中学時代に習った歌のハンミングとなつて鼻から流れ出る。しばらく行くとつぎの部落も近づいて、大きな集配カバンを開くと戸ごとに郵便を配り出す。今ではこの仕事にもようやく慣れて、今日のように好いお天気だとむしろ楽しいほどだが、二年余り前、一番小さい号数の制服でも身に合わなかつたころのことを思い出すと、本当によくこゝまでやつてきたとつくづく思うことがある。

もちろん最初は希望通り都市に出て技術を身につけるようになっていた。だが中学三年生の二期の末、父が二日のわづらいであつけなく他界してしまつた。いちばん頼りにしていた父であるだけに、母も自分もたゞ泣いた。(先がまつ暗になる)ということの本当に味わたつたのだ。一家の大黒柱を失つた我家は財産とてなく、生活にも苦しくなつた。あとには妹や弟がい

る。この上は早く働いて家計を助けなければならぬ。幸い知人の方のおかげで、隣町の郵便局へ外勤として勤めることになった。このさい職業選択など考えるだけむだだとあきらめたが、ありがたかつたことはありがたかつた。四月一日、その日があこがれの就業第一日だつた。しかし父がこの世にいないという責任感は決してよくをよるこぼせなかつた。

それから毎日、上司に従つて郵便物の一ぱい詰まつた重い郵袋を数個、時には十数個、一日に一キロほどの坂道をリヤカーで五回も六回も運んだ。まだ少年だつたべくにとつては、かなり重労働だつた。学窓時代、社会というものは全く楽しくて働けばいくらでもお金になると胸の内でも一人決めて、希望に燃えていたものだつた。が一ヶ月もたたないうちにそのあまりにも矛盾なのにガッカリ力を落さざるを得なかつた。それは、ぼくだけではなく働く少年の誰もが経験するのではないかと思つた。しかしその中にも夢の実現を少しでも見出しながら三ヶ月たつと、今度は集配の交替制勤務に変わった。四区ある配達区域を覚えるまでに幾たび郵便物など捨て置いて家へ帰ろうかと思つたかしのれない。ある時など、配達途中で雨に出会い、家はわからないし、衣服からは雨滴がしたたりおち、心細くまた情なくなつたこともあつた。そしてあのいちばん親切な上司の方が迎えに来てくださらなかつたら、人家もない山道で立往生していたかも知れない。

今も思うが入局の時、採用人がただ一人だつたことが残念である。もし同年の友達と二人が

入局していたら、互に励まし合い、助け合つて力落すこともなく、前進できたのではないだろうか。これからも学窓から巣立つ多くの人達のために一度に二人以上採用して下さることを心から望んでいます。しかし日が過ぎるにつれ慣れるにつれて、区内の状況もわかりいくぶん落ち着いてきた。民家でひと休みさせていただいたり、あるお寺では人のよい和尚さんに庫裏へ上げてもらつて弁当を使い、生みたての卵で卵焼きを作つていただいた。秋の帰りには柿や栗だのおみやげを集配カバンに入れていただくこともあつた。つらいことはなるべく忘れるようにしているが、このようなことは本当にうれしくて忘れることができない。半年余りもたつと、お年よりの上司よりはるかに早く帰局できるようになり、そうなると思ふ体にも余裕ができて、局庭で若い上司の方と卓球を楽しむようになつた。思えばほくも少しの間に精神的にも肉体的にも強くきたえられたものだ。力こぶなど時々ふくらませて自慢することもある。

あの当時、雪の日など出勤するのがいやでひいては生きることすらいや気がさしていた。ほくに、常に勇気の光を照らしてくれたのは亡き父の面影だつた。その面影を忍ぶと決して怠けられなかつたのがいまだに不思議なようでもある。月月の俸給を仏前に供えて目を閉じると、母のようにお経の文句は知らないが（お父さん、ぼくは皆さんのおかげでこんなに強くなりました）と胸の中で呼びかけるのである。

此のころは赤い自転車走らせている時も、郵便の道順を組んでいる時も、とりわけよく歌を

口ずさむ。それはあたかも小学校で習った「心に太陽を持て、くちびるに歌を持て」の詩を無意識のうちに実行しているかの如く。

こうして重荷を積んだ小舟は、嵐にもまれながら荒い苦難の波を分けて、ようやく波静かな内海へ入ることができた。

もし途中でカジの手をはなせば、希望を失なえば、自分は人生から落こしていたかも知れない。

行こう！　へサキに希望を託して！

ある日の記録から

福 沢 友 行

(京都 養成工 15才)

またチュッと舌打ちをした。

旋盤のシン出し作業を朝からやっているのに、まだ思うようにいかないのである。他の者はもうシン出しを終つて切削の工程に移っている。

それなのに、自分だけがまだなんだ。早くやらなければと思ひあくせくする。

工作物を取りつけたチャックを左手で回しているが、その手もだんだんとだるくなる。トースカンの針先を、キツとなつてみつめているので、それ以上に目がつかれる。

スムーズにいけば二十分も要しない。いや十分も要しないシン出しに四時間近くかゝっている。それでもまだできないのだ。

くちびるをかみしめ、顔をしかめ赤く染め、必死になつてゐるが、あせるほどによくない。横で切削ヒツツしている音が私を馬鹿にしたようにきこえる。「クソッ」とますますあせる。前より

も悪くなつてしまふ。泣き出したくなる気持ちをじつとこらえて、一生懸命に作業を続けた。

しばらくして私は、アーと嘆きつゝ目をトースカンの針先からはなした。

切削している音が、のしるように、ひやかすように、私の耳をつきさした。しめつけられるような心持だ。心臓が大きく強く波打っている。左の手は、そのためにぶるぶるとふるえている。「おちつくのだ。まずおちついて、ゆつくりとはじめるのだ。おちつくのだ！」

隣りでやつているA君が小声でいつた。私も心にそう感じていた。戸口から見える遠い空に目を移した。心の動揺もとまり、青空からおもむろにトースカンの針先へ目を移した。そして再び彼が同じことを、つぶやくようにいつたのを、心できゝながら作業をはじめた。

それから数分。

自分でも、これ以上にはだれにだつてできるものかと思うほどにやつた。

「よく出た、大変よい。つぎに進みなさい」と指導員からいわれた時、ハーと大きく深呼吸をした。そしてA君と顔を合わしてにつこりとほほえんだ。

汗のために曇っているめがねと、その油汗をぬぐい終つた時、十二時——昼食のブザーが私の耳をつゝいた。

実に四時間もかけてやつとシン出し工程が終つたのである。もう二度とこれほど遅くなるまいと、何度も何度も心に誓つた。

いつになく昼食は楽しかった。

初夏の陽ざしをあびているクローバのじゆうたんの上にくろりと横になつて、広大な青空を望んだ。一点の雲もないまばゆいほどの青空をみていると、心が澄んで、口笛がとび出る。

遠く比叡の峰をながめた。数分間、この巨大な自然と一緒にすごした。ベルが鳴つた。

私はすつくと立つて、この巨大な自然に向つて誓つた。

「ガンバルゾー」と。

大きく深呼吸をして、力強い足どりで実習場に向つた。

給 料 日

糸 賀 邦

(大阪 紡績工 16才)

ブウ、交替時間がやつてきた。一日の労働を終え、手のひらで額の汗をふいた。そして、その手で思い出したように胸のポケットを押え一心に食堂へ走る……。胸のポケットには、さつき見回りさんからいたゞいたばかりの配布用紙が入っている。(これを落せば、一ヶ月働いて得たお金がフイになつてしまう) そう思うと私は、思わず手に力を入れた。そして前より一層早く走り続けた。走らなくてもよいものであるのに……。しかし、きようはどうしてもゆつくり食堂へ入ることができない。少しでも早く食事を終え、少しでも早く給料を受け取る。——もう私の胸はそんな喜びで一ぱいだつた。別に早く食事を終えたからといって、早く給料がもらえるわけではないのに……。がしかし、やつぱりゆつくりすることはできない。

食卓に着いた時はもうYさんがひとり来っていて「お疲れさま」とあいさつをかわした。ニツコリと迎えてくれるYさんはいつもと変らないようであるが、しかしやつぱりどことなくうれ

しそうだ。「あんたずいぶんうれしそうじやないの、たくさんあつた」「うゝん」と私はほゝつゝえみながらくびを左右にふつた。顔にまで出して喜んでゐるものは私ひとりかしら？ちよつと恥ずかしかつたが感付かれないように人の顔をうかがつてみる……。やつぱりいつもとちよとちがう。「あんた先月にくらべてどお？」「あんたは？」などと口口に喜びの言葉を交わしてゐるのが耳に入る。給料日という日はどんなに年を取つてもうれしいものだ、新入当時の部屋長さんからきいたことがあるが、本当にそうだなとつくづく思つた。食事もそこそこにすませて、急いで寮に帰る。「たゞいま」と元氣よくあいさつをした。「お帰りなさい——お疲れさま」ニッコリ迎えてくださる先生……「うれしそうじやないの」と、とうとう先生にまでひやかされてしまつた。ちよつと赤くなつてほゝえんだ。部屋に向う廊下での歩みも自然と走るに近かつた。こんなふうにも何もかも急いですませ、放送の知らせでまもなく二号教室に給料を受けに行く。

給料を受け取つてもやはりうれしきは消えない……がちよつと落ち着いてきた。こんどはもう走らないようにしよう……とゆつくり袋の記入に目を通して歩いてゐた。すると「糸賀さんあんた今月いくら？」と誰かに急によばれてふりむいた。Aさんである。「あんたは？」「あんたさきにゆうこと……ずるいわAさんつて、いつもこうなんだから……」。そういいながらもふたりは給料袋をみせ合つた。Aさんはほゝえみながら「ふたりともあい変わらずだわねえ」と

いった。あがつていないという意味かもしれない。しかし本当はすぐ今月はあがつていないので、私もおどろいていたところであるが、いつものAさんのユーモアだと思つて「そうねえ」と答えておいた。しかしAさんもやつぱりあがつてきた給料のよろこびをかくしきれないらしく「今月私達大分あがつてきたけど小包しない？ 私今月したら母さんにも五月まではしないつもりだから……また五月は子供の日と、母の日があるでしょう？ どうする？」とさいごのどうするところを急に声をおとしてナイシヨ声でいった。「私も今日配布を受け取つた時ね、しようかなあ……て思つたの……」「そう？ だんぜんしようね。それでどこへ行く？」Aさんのいつものあわてんぼうが始まり、買い物はK市でつぎの日曜に買いにいく……とひとりきめをしてしまつた。私は苦笑してしまつた。それでも母や妹達の喜びを想像すると、一日も早く送つてやりたい気持ちで一ぱいだ。送り物についていろいろと話し合つていると、学校に行く時間の近ずいているのも忘れてゐる始末だつた。

第一のベルで私達はじめて学校へ行く時間のことに気がつき、急いで別れた。部屋の人も皆給料の話に花をさかせてゐる。私もやはり喜びをかくしきれず、その人達と言葉をかわしながら登校の仕たくをした。学校へ行く時もまたAさんといつしよになつた。ふたりとも話はしぜんと送り物のことをいつていた。急にAさんが気の毒そうに「あんたあす行かない？」「あす学校をさぼつて？ できないわそんなこと」「そうねえでも早い方が母さんもよろこぶわ」「そ

うかしら急だからふたりとももつと考えてみましょう」私はそれだけいつてだまつて教室に入つた。

あすのことを考えていたのである。授業が始まつてもやはり考えていた。母や妹達の喜ぶ様子を想像すると、一日も早く送つてやりたい。母はそんなことをする私を喜ぶだろうが、しかしこの間の便りを急に思ひだした。そしてハッとした。母はあれほど私が一生懸命働き学ぶことを祈つていと書いてくれたのに……私つてなんて馬鹿なんだろう。学校をサボルなんて……ぜつたいに日曜日に行くことにするわ。Aさんだつてこんなことをいゝ出されたのもきようがめてだから、きつとわかつてくれるだろう。——そう思うといまゝでの悪のかたまりのようなものが、一ぺんに消えていつたような気がした。私は急に気がついたように糸切と油のしみた手に力をこめて鉛筆を握つた。

人間となるために

田 中 淑 子

(兵庫 店員 17才)

制服制帽を着てさつそうと通学する友の姿をながめて、新中卒業以来二ケ年間、幾度泣いたことか知れない。封建的な片田舎の一貧農家に生まれた私にとつては、高校へ行かせてくれといえようはずがなかった。私は一書店の店員としてここに実社会への道を一步踏むに至つたのです。勤務上における契約として、一、勤務時間は午前七時より午後五時まで。一、休日は月二日、個人の適当な日を与える。一、六ヶ月の見習が終つたら直ちに事務員とするなど。私にとつては思いもよらぬ好条件であつた。(働こう)とその日から全身を労働へ投げ込んだ。

一ヶ月の月日は流れ、やがて二ヶ月三ヶ月と月日が重なるにつれて、朝は「早くこい」とせきたてられ、夜は遅くまで働かねばならなかった。仕事も事務どころか徐徐に肉体的な面が加重され、二里三里の道をたくさんの本を荷台につけ、自転車で運搬することが毎日の仕事のようになつた。勤務契約はただ私達をつるための、針に付けたえさにすぎなかつたのだ。時には「君

「たちは商売がまずい」と叱られることも少くなかった。慣れぬ商売に慣れようとすればするほど、社会のどん底を見るような気がして耐えられなかった。ある日大人たちの不正な行爲を見て「あつ！それはいけないことです」と反抗する自分に「君は子供だ。これが実社会だよ」とぜんぜん相手にしてくれない。正しさを正しいものとせず、不正を是正しようともしない。これがこの社会の現実だったのか。このいやなやるせない気持から脱したい。そして教養豊かな人によつてよい社会をつくらねばと痛感し、定時制高校へ志望したものの「女子が夜学など」と両親はきいてくれようもしない。

ある日私は中学の恩師N先生に出会った。その時の先生の言葉に「君は学ぶのだ。夜学へ行きなさい。一つの目的を達成するためには多くの小さなことにかかつていてはならぬ。強く生きるのだぞ」と力づけられ、きいてもくれなかつた両親をようやくとき伏せ進学の許しを得た。その後の私の生活は一変した。上衣のポケットには常に手帳と、カードと、鉛筆が用意された。片手は自転車のハンドルを握り、片手はいつもカードを握っていた。今も足に残っている傷のあとを眺めていると、過ぎた日日のことどもがなつかしい思い出として眼底に浮んで来る。私は月二日の公休の中日を、定時制全日制合同体育大会に当てようと計画したところ、雇主いわく「君の現在は労働が一番大切なんだ。職場において絶対に学校のことを考えてほしくない。学校と職場とは切り離して考えてもらわないとだめだ」と。私は何もいわずにその日も

出勤した。またある時、ある人から「君高校出たのかい」「いえ現在定時制へ在学中なんです」「へえ！女の子が夜学とはねえ」といわれた言葉、私はこの言葉の解釈にも迷った。しかし軽べつされていることは事実だ。婦人たちの井戸端会議の中に「娘は高校くらい出さないと嫁入りぐちがありませんよ」と論じ合っていたのを耳にしたこともある。高等教育が嫁入り前の肩書きなのか。そして働きつゝ学べる定時制高校は高等学校とも考えていない片田舎の人たち！職場における非難、世の人々のさす指、冷たい眼、病身の兄を中にかく沈みがちな家庭の雰囲気！希望に輝いていた自分も今では何もかも消滅しようとしている。自分が一体なんのために学ぼうとしたか、何のために働かねばならぬのか、小さい胸はかきむしられるようであった。その時であるN先生は静かに教えてくれた。「君は人間だろう。人間となるために君は働くのだ。そして学ぶのだ。人間になるんだぞ」と。私は深く考えさせられた。一夜は眠らず床の中で泣きながら考えた。（そうだ人間になるんだ）正しく物事を判断し、美しい心を持つて生きて行く、それが自分の道なんだ。

三十年十一月「君、私の事務所で働かないかい」とやさしい言葉をかけられ、自分の身にあまる当事務所へ雇用されることになった。十数名の男事務員の他に女は私一人だったが、さびしい思いをしたことがないのも、皆が親切にしてくれたからだ。帳簿の記入においても無知の私に手を取るようにして教えてくれた。まるで私は別天地へ飛んできたような思いがする。今

まで社会は悪いとばかり考えていた自分も、今ではこんなよい人達もいるんだと思えば、一度消えかけた希望も明るみをおびて来だした。職場が楽しいので、朝は早く出勤したくなり、皆がそろそろまでには掃除をすませ、全職員がそろつたところに熱いお茶をくんであげると「ありがとう」といつておいしそうに飲んでくれる。そんな時私には何ともいえない嬉しさがわいてくる。五時のサイレンが鳴ると「君学校へ行けよ」とやさしくいつてくれる。私はあまりの嬉しさに涙さえ浮かんでくることがある。

世の人人が床にもぐり込むころ、私たちは螢光燈に照らし出された黒板の文字と、先生の講義に神経を集中させ必死に学んでいる。私は働かなければならない、人間となるために、一生懸命働き学ばねばならぬ。(明日も元気で働こう！)。



私の生活

水尾好美

(奈良 店員 16才)

私の職場は、家から二時間もある遠く離れたところにある個人会社です。会社とは名前のみであつて、私の仕事は運動具店の店員です。店員といつてもお客様の相手ばかりではありません。男店員の洗濯などこまかい仕事は一切私ひとりでせねばなりません。私は、なれないうちは多くの品物の名前を忘れて、まごついたことがあります。そのたびに男店員から「ぼんやりしとるからじやぞ、しつかりせい、この馬鹿者」となんでしょう。四人の男店員の中に女ひとり私は毎日毎日どんな悲しいことがあつても、お客様にはいつも笑顔を忘れないように努めてきました。

私の生活
朝は八時から帰りは六時半まで立ち通しの一日ですから、足が棒みたいになつてしまつてなんだか歩くのが変になつてしまひそうになります。夜九時半まで働くと、一日十四円の手当がつきます。だから、私は少しくらい体がつかれても、頭が痛くて倒れそうになつても九時半ま

でのこります。こうして一日一三時間も働いて、給料は手取がやつと四千円余りにしかならぬのです。

私には父母がありませんので祖母と二人で暮しておりますので、私は自分の食費だけでもと思つて、給料の中から三千円を食費として渡します。で、残りの壹千円余りが私のお小遣いになります。その中から汽車代が一ヶ月約三百円いります。将来のために百円づつでも貯金をしなければなりませんし、少しずつためてスーツの一着も作らなくてはなりません。百貨店のウインドも、お菓子屋のウインドも私にはめずらしい夢の国なんです。私は映画にも行きません。今年に入つてたつた一度行つたきりです。これもお友達がはらつてくれたから行きまし。た。私は映画は大好きですから毎日でも行つて見たいのですが、とつてもそんなことのできる身分ではありません。ですから、がまんしているのです。また一週間に一度の休みに、友達に本をかりて読むことが一番の楽しみなんです。本には私の世界からかけはなれたことばかりが書いてあるので、がっかりします。たとえばお友達をお招きするお部屋のかざり方とか、パースデーのおくりものの工夫だとか、といったように、遠い国のことばかりのせてあるので、私はまるでキツネにつままれたように悲しくなるんです。まるで世の中はみんなお金持ちばかりが住んでいるように思われるくらいです。

それに友達は「給料なんか、みんな自分の小遣いになるのよ」なんていうと、私はこのごろ、

こんなに働いてたつた四千円の給料で、ほんとうに馬鹿らしいと思うようになりました。私の店は当地のどの店よりも、給料が安いそうです。学校時代の友達に会つて話していると、一ヶ月の給料は六千円だといつていましたので、私もそこへ入れてもらえないかと聞くと、父母のないものはだめだということです。友達のお姉様が大会社へ行つていたので、そこも採用しないかときくと、高等学校を出ていないと駄目だそうです。

学歴のないものは、職場もつまらないところしかあたえられません。やはりこの世はお金の世の中です。私のような学歴もないし、お金もない者は一生下積みの生活を送らなければならぬでしょう。そんなことなら貧乏人は、子供を生まなければいいのです。生んでもらわねばよかつたと私は思います。

でも私は希望を捨てません。まじめにさえ働いていれば、いつかはきつといいことがあると信じております。美しい服装のできない私も、心だけは美しくありたいと願いながらも、毎日の生活を見ては、つい暗い気持ちになる私なんです。私はお金の世の中がいやになります。

就職難を突破して

匿名女

(和歌山 塗りこみ工 15才)

桜ふくらむ三月、柔らかい日ざしに大きな夢と希望に胸ふくらませて校門をあとにしました。家に帰るとすぐ机の引出しを開けてみますと『三月二十六日午前八時に入社されたし』とペンのあともあるややかな入社通知が入っています。そのハガキを手にして、この数日を静かにかえりみました。在校中、この彫刻会社を希望して百余名の入社試験を緊張と不安のうちに受けました。日本の人口増加は数字の上で知ってはいますが、この時ほど痛切に感じたことはありません。採用人員は八名というきびしさ。就職難にはおどろかされました。でも身長、体重ともクラス一番、成績も多少の自信はありました。身体検査も終り、この会社での最も大切な目の検査にもパスし、成績も最高点だったそうです。それに好条件は、この会社までは五分とかからない近くに私の家があることです。心配して、夕ごはんも食わずに待っていてくれた母や姉に、今日の成績に期待をかけ、ほゝあからめていろいろ話し楽しい食卓をかこみました。

そして翌日自信満満、先生の知らせを待つていました。「ちよつと職員室まで」先生の言葉にとぶようにしてあけたドア、でもそこには困つたような先生の顔、瞬間私の胸には真黒い雲がもくもくとひろがるのをおぼえました。「悪いけど落ちたんで、力落さんとなあ」となぐさめてくださる先生の顔もまともに見えず、走りだしてしまいました。実力しだいで見とめられると安心していた自分がおろかしく思えました。その日一日、机の前でぼんやりすわりこんでしまいました。

昭和二十年九月、たよりとする父を戦争で失い、父なきあと私たち五人の子供を苦勞に苦勞を重ねて育てゝくれた母、無理がかさなつてか、めつきり弱くなつた母、私の目頭は涙でうるみ、とめどなく大粒の涙がこぼれ落ちました。採用されぬ原因は片親育ちであるからと、人々のうわさに聞き、今の社会に失望を感じました。世間の人人は、なぜ私たち母子家庭に暖かいすくいの手をさしのべてくれないのでしょうか。卒業の日は迫り、きまらぬ就職にいらいらとして、気も重い数日が続きました。

いろいろ考えながら重い足どりで帰つた私の目の前に「これ」とうれしそうに妹の見せた一枚のハガキ。『採用通知』。夢かとばかりの嬉しさに妹と二人でこおどりました。先生も二度も足を運んでくださり、姉がしさいを書いた手紙を社長様あてに出してくれたそうです。幸いにして理解ある社長様のはからいにより今日に至りました。一日中こしかけてこまかい模様を

筆で塗つていく私の手から鳥が生れ、美しい花が咲く。きれいにでき上がつた布を見る時の気持は、働く者の最大の喜びです。困つたことは、じつとすわつていたので足がふとくになることです。「大きな大根、豊作や」とからかう先輩もあります。会社生活にはつらいこと、悲しいこともあります。が、楽は苦の種子、苦は楽の種子の言葉通り、いつか楽しみもまわつてきます。

私の運転する小さな舟は今、世間の荒波をこえて力一ぱいこぎだしています。嵐や、大波に負けません。初めてもらつた月給袋、うすつぺらで大きな袋、父の仏前にそなえ、立派な彫刻工になつてこの大きな袋を一杯にして、母の経済的負担を助けようと誓いました。

電話交換手

清水八代委

(鳥取 電話交換手 17才)

電話交換手——これが私の職業なのです。電話オペレーターであり、夜学生なのです。ある日曜日誰れもが寝しずまつた午前二時、私は宿直でまだ起きている。広い交換室に、そしてとりとめないことを次から次にと考えながら、白い壁にピンで強くはられた「やさしい声で何番へ」「かける人の気持ちになつて」などの標語が目につく。きよう出勤の時、中学時代の友達之母に出合つた。「あら今どこにお勤めですか」「そうですか、電話局と云うと……。あゝ交換手ねえ、夜間に、そうですか」といわれた。私はこの言葉を聞かされたとき腹が立つた。いかにもなんだ交換手か、なんだ学校は夜間か、という印象を受けたからだ。

往往にして侮蔑されるこの職業、そして夜学校……そして私はこの仕事に従事し、いや生活の源泉を求めて燃え上る勉強心を持つて、今日まで二年余り——。

何故にこの職業が、この職場が、この夜学がこんなにも卑下されなければならないのかと、

こんなことを考えて――。社会になくはならないこの電話。電話数はその国の文化生活のパロメーターなどといわれ、何千里何万里もの間を一瞬の内に接続し、意志伝達することができ、私達なのに。私達の仕事は交換台に向きさえすれば、つぎつぎと応答し、接続し、お客からの表示器が落下するたびに素早く応答し、一つでも多く応答し、一つでも多く接続することにより一日中追いまわされ、何千、何百と応答するために一生懸命で赤と白のコードをさしたりぬいたりして一日を終える。

私はこんな時「おそいぞ、いねむりしているのか」などと云われたり、「ばかやろう主任と代れ」などと大きな声でどなられたりすると、私は非常に情なく、涙さえ出る時もある。しかし私達の心得は「迅速」「正確」「親切」であり、サービスということが非常に強調されている。そして「お客本位の心構えを持ち、いかなる時においても、絶対に声に現わさないこと」「お客を言い負かさないこと」「お客の落度をとがめないこと」などいろいろ何度くり返しくり返し取扱方法に書かれている。だから「すいません」といわなければならない。私は加入者からどなられたりすると、そんな用語がうらめしく思われる時さえある。一日中背後には監督に監視されながら働いている……。

つかれきつた神経と体を、五時のサイレンとともに小高い東高の夜学校へ持つて行く。光らした手足、つまるような息で教室にかけこんで来る。そこには空腹をかかえた私と同じような

境遇の人がたくさんいる。新聞を配達するものゝ手、自転車で仕事にかけまわるものゝ手、またあるいはスコップやツルハシをにぎつた手がこの夜学校へ集まつて来てペンをにぎる。ここで四時間互いに、はげまし合い、助け合い、教え合う。だから私にとつて夜学校はオアシスである。十分間の休憩時間は、みんなと草原でくつろぎ、そして「しあわせの歌」などを口ずさむ。この時こそ私は一日中の疲れも忘れ、今や西の空一面を真赤に染めて沈んで行く太陽をながめ、明日への幸福を願うのである。

私は何のためにこんなにまで勉強しなければならないのか、いつたい何のために毎日毎日苦しいぎりぎりの生活をして、生きなければならないだろうかと……と。

だが現在の私にはわからない。私はたゞなんとなく生きているということである。しかし私はこの苦しい生活において希望を持つことができるのである。大きな希望を……。

この希望が、或る時は失望した私をはげまし、またある時はひどく絶望させるかもしれない、が苦しみがあつてはじめて喜びがあり、幸福を味わたるのではないかと思う。だから毎日毎日の苦しみの後には、やがて光を見いだすことができることを信じて、苦しみにつきあたり、苦しみなるものをぶち破つて生きているのである。

いつか小学校の国語の時間に教わつた「心に太陽を持て、唇に歌を持て、そうすりやあ何かしようと平気じやないか……」。この文はなぜかしら私の心の奥深くきざみこまれている。私

はいつでもどこでもこの文を思ひ出す。

たとえどんな仕事でも、自分の仕事を愛し、誇りを持ち、一生懸命で働き生きることだと思ふ。

間もなく交替する時間だ。後徹の人が目をこすりながら起きてきた。私は「お早ようございます、ごくろうさん」といつて静かに寝室へ行つた。うすぐらい寝室の中に、私のまわりに寝ている人の寝息がきこえて来る。私も早く寝ようと目をつぶつた。交換室を人がくつをひきずつてあるく音をきゝながら。

ひがみを捨てて

大坂利子

(島根 織市工 17才)

ふと私は手を見た。その手はみにくく荒れてふしぶしは高くふくれ上り、指先からは血さえにじみ出ている。(あゝ、これが私の手なのだ) そう思うと今までの苦しみに耐えて来た喜びとも悲しみともつかない涙が、ひとりではほほを伝わるのだ、そして私はこの手を見ながらいろいろな過去の思い出しに、またこれからの新しい希望に、胸が一ぱいになるのである。

私がああ楽しかった学校生活を終え、何もわからないまま社会にとび出してからもはや二年、月日は容赦なく過ぎてしまった。その間私はただ一生懸命働いて来たのである。

とかく、紡績工場の女工といえど何かとさげすまれがちな私の職業、しかし今の私にとつては何にかけがえることもできない大切な仕事なのである。入社当時は家恋しさに、仕事つらさに、ずい分泣いたものだ。糸結びをしながら布の上に涙をこぼすのも珍らしくなかつたあのころを、ふつと今思い出すとたまらなく自分がいじらしく思えてくる。

そしてまた、私はしみじみ考えるのだ。毎日上役の人からガミガミいわれながら、汗と、油と、綿ぼこりの中で、真黒になつて走り回っている私達を、誰か可哀想だと思つてゐる人があるだろうか。私達の本当の働く姿を知つてゐる人があるだろうか。ただ黙々と働いてゐる私達、右を向けといわれれば右を向き、左を向けといわれれば左を向く、まるで『ロボット人間』のような私達。こういう自分を、自分で本当に可哀想だと思う。もつと明るい楽しい心で働けたらどんなにうれしいだろう。

自分では一生懸命働きながらも（自分は腕が悪いのだ）（どうせ女工なのだ）そんなひねくれた考えばかりが頭に浮んでくる。自分は確かによい腕は持つてゐない。しかし自分にできる限りを精一ぱいやつてゐるのだから、この上に何を求めようというのだろうか。私はあまりにもひがみ過ぎてはいないだろうか。

この間の旅行のできごとだつた。

私達大和紡績出雲高等学院三年生は、連日の休暇を利用して日本三景といわれる『天の橋立』へ一泊旅行に行つた。工場にいれば外へもあまり出かけず、引込みがちな私達にとつては、たつた一泊と云えども、本当にたえようのないうれしさに胸もおどるばかりだつた。きちんと学院の制服を着てパッチをつけてゐる私達の姿は、他の人から見れば普通の高校と変らないように見えたことだろう。私達でさえ働いてゐることも忘れて、なんだか学校時代に返つたよう

な気持ではしやぎまわつていた。ところが一緒に乗り合わせたある男のお客さんが「あなたはどこの高校ですか」とたずねられた。私達はどう答えたらいゝのだろうと皆が顔を見合せて笑つていた。その人は「自分の行つてゐる高校の名がわからないのですか」と気持悪そうな顔をして黙つてしまわれた。私達は恥かしさとすまなさで顔もあげられない気持だつた。ただ一言正直にいゑなかつたばかりに相手の気持を悪くし、自分までいやな思いをしてしまつたのである。また、いろいろな歌を口ずさみながら、つい労働歌がとび出してあわてゝ口をつぐんだ私達。数数の楽しい旅行の思い出の中に、たつた一つ暗い影を残したことはそのできごとだつた。

何も恥かしがることのない私達女工。しかし何となくいやな女工という言葉（女工）（女工）私は心の中で何度もこの言葉をくり返してみた。そうだ、社会はあまりにも私達に対して冷たかつたのである。私達女工の織つた布が、社会でどんなに役立つてゐることだろう。私はこの糸、この布に私の最大の真心をこめて、一反一反と一生懸命織つてゐるのだ。たとえ今の社会は冷たくとも、やがていつかは必ず認めてくれる日が来ると私は信じてゐる。昔からの習慣で、今もまだいわれている工場での花嫁衣装作り、もちろんそれも大切である。しかしそれよりももっと大切なもの、それは自分をつくりあげることだ。ある友は云つた。「いつ果てるかわからない自分の生命、この生命の続く限り楽しいことをして暮したい。こんないやな仕事をして陰気に過ごすのはもつたない」と。

だが私はこの言葉に同意することはできなかつた。たとえいやな仕事だろうが、陰気だと思われようが私はがんばろうと思う。美しい着物が百枚あるよりも、美しい心と明るい心、そして健康な体さえあつたら私はそれで満足するだろう。それを今から養うのだ。今までのようなへんなひがみを捨てゝ、常に美しい明るい心の持主になるよう明日も元気で働こうと思う。このたくましい我が手で。

僕はがんばろう

加藤 志郎

(岡山 成型工 17才)

松竹映画「早春」で煙突の町として紹介された三石、僕はこの町の耐火煉瓦工場に、二年前新制中学を出るとまもなく採用されました。僕はここで、近くの台山から採れるロー石や粘土を原料として作った坯土を、木型や金型に入れて木槌で叩きつけ、一定の煉瓦に仕上げるのです。

仕事が終われば今度は、汽車である有名な船坂トンネルを越えて、上郡の定時制高校に通っております。

七時半、工場は始業のサイレンと共に活況を呈して来ます。フレットの粉碎する音、フリクシオン、エレベーターの音、それにまじつて僕達の成型する音。前日控室の黒板に書かれたその日の型枠を仕事台の上に置き、前に盛られた粘土に手を入れると、ひやりと冷たく身のしまる思いがします。最初の一、二個を仕上げると、はや全身汗びつしよりとなるので、冬でもラン

ニング一枚だけでやつております。

この粘土の湿り具合や型枠の構造で、時にはいくら打つても粘土がしまらず、またできあがつてもすぐひびが入つたりして、泣きたくなることもたびたびです。工場で楽しい時は、やはり昼休みです。午前中の仕事ですつかり減つた胃袋に、母の心のこもつた弁当を食べ、ある者は将棋や碁に、ある者は読書にそして若い僕達はバレーボールをやるのです。

ほとんど二十才以下の者ばかりでバレー部をつくり、白球を追つての一刻は、すつかり夢中になつてしまい、仕事のつかれも忘れてしまいます。まだやり出してまもないので、外部とは一度も試合をしたことがありませんが、今秋くらいには試合に行けそうだと一同張切つております。

十二時十分、午後の開始のサイレンに、再び作業に入りますが、午前中の作業により大体の打揚量の見通しも立つので、やはり気分的に午前中よりは楽な気持になります。しかし反面午前中にあまり打つてないとあせりが出て、また疲労も早くやつて来ます。二時半までにはたいてい予定量を打ち終り、型枠を片付け、木槌を整理し、三時十五分に職場の清掃をすませ、それから組長の所にその日の打揚数を報告し、黒板に書かれた明日の作業の用意などをしていると終業のサイレンが鳴ります。これで僕達の一日の仕事が終るわけですが、僕にはこれからまた学校に行くというつとめが残されています。

身体を洗い、工場内に設けられた購売部でパンを買い、それを食べて腹ごしらえをし、今度はくつをかゝえて学生に早変わり、自転車で駅までかけつけるのです。汽車を待つ間の一刻、高いプラットホームに立つて西陽のさす山間の煙突の町を見下し、僕はいろいろなことを思い出します。

特にその日仕事が思うように打てず、疲れがひどい時など（なぜ僕はこんなに働いて、またこうして学校まで行かねばならぬのだろう）と、何となく悲しくなる時があります。しかし父のない今、身体の弱い母それに妹のことを考えると、僕が一生懸命に働き（一日でも早く一人前になり、また一日も早く立派な人になることが最もよいやり方だ）といまさらのように決心をあらたにすることです。

学校で二時間の授業を受け、終つてから駅まで走つて出てやつと汽車に乗り込む。汽車の振動はさながら眠りを誘うように快く感ぜられます。九時過ぎ家に帰つて入浴すると、今までこらえていた仕事の疲れと眠気とが一時に襲つて来て、食事夢中ですましやつと床に入ります。たいていの場合、復習をと思い枕元に教科書をもつて来るものの、一頁も見ないうちに、はや夢路に落ちるのが毎日です。

「読まずして、眠ると知りつゝ枕辺に、夜ごと本置く、くせつきにけり」

最初入学当時は毎日が大変苦しかったので、何度中退しようと思つたかわからなかつたので

すが、友達や母にはげまされて、ひるむ自分をむちうちつゝがんばったかいあつて、近ごろでは自然になれてさほど苦しいと思わないようになりました。

当人の僕は覚悟して歩み出した生活でありますが、日ごろ身体の弱い母が、毎日毎晩、僕の帰りを首を長くして待つていてくださるのは本当にありがたく、この母の愛情が、どんなに今の僕を力付けてくれているかわからないのです。

僕は養成工

松岡 洋 一 郎

(広島 養成工 15才)

「兄ちゃんもいよいよ一人前になつたナー」と、今年小学校一年生になつたばかりの弟が、そばであきれたようにいつてくれる。今日は、あれほど希望とあこがれに胸をおどらせていた三菱電機の入社式のある日だ。「行つて来ます」といつて出かけると、母がまた「真面目にやつて、しかられんようにせえよ」とくりかえされた。学校の先生からも会社のことについては、何回もくりかえされて注意をうけている。ただ真面目にやるのみだ。真面目以外は何も考えまいと思つて、入社試験の時とおつた道を急いでやつて来た。少少早すぎたと見えて、まだ多く人は来ていなかった。門の守警さんにいつてそこで待つていると、急に大人の人や女の人、がどやどやと入つてきだした。背広姿の人、菜葉ズボンの人、セーターを着た女の人、時時金ボタンの学生らしいのは多分、僕らの先輩の養成工の人であらう。アッ、入社試験の時、面接された人もこられた。誰が工場長さんかさつぱりわからない。入つたら誰が教えてくれるの

か、それもわからない。しばらくすると係の人がやつてこられた。すると、あちらから一人、こちらから一人といったように、五人の友達の顔が見えた。見ると試験の時に隣にいて、自信に満ちて元気のよいことをいつていた友達の姿は見えなかつた。あの人はきつと合格するだろうと思つていたのに、どうしたのだろうか。駄目だと思つていた自分が合格して不思議に思えてくる。入社式はかたくなりすぎて、今から考えるとくわしいことが思ひだせないくらいだ。それでも工場長さんの顔だけは、しつかり覚えてゐる。

このようにして、僕は三菱電機養成工の一員となり、まだ一ヶ月余りの浅い工場生活ではあるが、ようやく工場にも慣れた程度である。ふりかえつて見ると、この一ヶ月間余りは、僕には苦しいことばかりだつた。ヤスリ作業では、大きな豆がずらりと並び痛くて痛くて、もうヤスリをにぎるのもいやになるくらい苦しかつたし、ハンマ作業では、十数回或は数十回となく手をたたき、最後にはダンゴのようにふくれ、茶わんも持たれないようになつた日もあつた。しかしこのような苦難に打ち勝つことこそ、将来の成功の道と信じて、一心に練習をつづけてきた。また僕の母は父が戦地に行つてゐる留守中、か弱い女手一つで幼い僕と祖母の面倒をみながら、何不自由させずこの年まで大きく育て上げてくれた母の苦勞を思うと、このような苦しみに負けてたまるものかとがんばりぬいた。

またこのような苦しいことがある反面、必ず楽しいことがあるもので、もうすぐ京阪神旅行

がある。僕達はそれが待ち遠しくて、毎日毎日カレンダーをめくつては日数を勘定し、友達といろいろ計画をたてている。また僕達の工場では、養成工は半日は勉強し、後の半日は実習というように勉強をさせてくださるので、普通の学校と同様に勉強は十分でき、それに三年間勉強し、卒業してからも就職の心配はないし、その上養成工手当ももらえ最良の環境に恵まれている。このように環境の整った工場の中で、遊んだりなまけたりしては良心がゆるさない。今後この工場の中で自分の持つている全能力を発揮して、努力に努力を重ね大いに役立つ人になりたいと思つている。またこの間、生れて初めて自分で働いてもらつたお金を手にした時は、なんだかうれしくてうれしくてたまらなかつた。自分で働いて得たお金は無駄使いたくないで、弟の学資のために貯金をしておきたいと思つている。

それからもう一つ、忘れてならないことは、僕達の工場では給食制度があり、僕にとつてはこの食事の時間が一番楽しい時間だ。月曜日と土曜日はうどんで、二週間に一度はライスカレーとずしが出るが、勉強でまだ実習で大変疲れて空腹になつたところへ、上手な栄養士方の作つた料理であるから、一層おいしく、一度に疲れがなおるように思われる。また昼休みの時間は野球をして楽しいひとときを過ごす。

今では苦しいことはあまりなくなり、楽しいことの方が多くなり、いつも朗らかに養成工の道を歩みつづけ、努力に努力を重ねている。努力こそ最も大切な目標と思つている。



見 習 工

長 岡 博 司

(山口 機械修理工 17才)

黒くひっそり閑としていた実習室の窓から、緑をのせた初夏の風が快い感覚を私達に与えてくれるようになった。今日もハンマーの威勢のよい音が、この界わいに響いている。

みんな額に薄い汗をかいて、手の中のタガネ目がけてハンマーを振りおろす。これが初夏の明るい風に乗つて飛びかう音である。一月も前のころは汗と油で黒くなつたホータイに、茶色の血をにじまして、泣きそうな顔をしてタガネにハンマーを当てていた。こわさに堅くなつた手でハンマーを振ると見事に手に当つて、皮がむけ血がにじみ出る。しかし以前はよく血をにじましていた者も、このころはびくびくしなくなり、手を打つ人も少くなつた。手を打つて泣き面するのは自分ぐらいのものであつたろうか。だがその僕も今は大分自信がついたように、ぼいん!!と手を打つようなことは減多になくなつた。打つても、精精一日に一、二度程度のものだ。それは骨のシンに響くかと思われるのだが、このごろではそれがまた大へん愉

快でたまらなくなつた。みんなも手を打つてこの程度は泣いているんだ、僕だけではないんだ、自分だけ笑つてはいけけない。お互いにかんばるんだ。こう思うようになって来たのだ。これが自分の本当の進歩かも知れない。そして進歩だと思ふことが、逆にある程度の自信をつけてくれたのかもわからない。ともかくこの動かない進歩を一番喜んだのは、自分であることには相違ない。

ハンマーでタガネを打つ、時には手も打つ。手を打つて目をさましたら一日の終りである。逃げるように日目は目の前を過ぎて行く。日曜近くの土曜日ごろともなればみんなはしやぎ回つて、白い歯をむき出し、黒いヒトミをきよろきよろさしている。こんな日にはあまり手も打たず、打つたらただにが笑いをするばかりである。

白い雲が青く晴れ渡つた空にぽつかり浮んでいる。機械のうれしい音のする工場の灰色の建物が両側に並び、その間を白いアスファルトの道が通つている。その道を何物かを追うように走る汚れた学生服。それが私達である。息をはずませながら四角な机に皿を並べ、むさぼるように夕食を食べる。そして僚友が暖かいお茶をおわんの中に入れてくれる時など、みんな目を細くして喜びのこぼれそうな顔を、茶色のわんの中に押しつけている。食事が終れば緑の芽の出た桜の木の下を横ぎつて寮に足を運ぶ。ホコリで汚れた靴の中から、汗でくさくなつた靴下の足が現れる。そしてころぶように室の中に入つて行く。しかし汗と油で汚れた作業服を脱

ぎ、洗濯された清潔ですがすがしい学生服を着れば、もう今帰つて来た道を通つて、工場内の定時制高校へ行く楽しい時間がやつて来ている。ある人は初夏の明るい夕雲を薄紫色の空の中に見ながら、無上の喜びと幸福をこの時に感じているだろう。快い疲労感に身を包まれながら、勤勞の喜びと勉學の喜びを一身に合わせ持つのが、実にこの時なのだ。ともかくこうして学校へ行くことによつて、社会に対する視野がぐんぐん広がっていることは確かだ。

僕は遠い未來の中に何物かを見つけようとしている。そしてその目的に向つてまっしぐらに進んでいる。その道はイバラの道である。この道を僕は重い荷物を背負つて登りつつあるのだ。日中の僕は汗と油を身体ににじませながら、全日本産業の一翼をになう者としての誇りと夢を胸に抱き懸命に働いている。夜は夜で教養の充實と人格をみがくために、一心不乱に勉強を続けている。時には心身を削られるような思いをすることもある。しかしみんなやつているのだ。僕も負けないようにがんばろう。僕のどこまでもやり抜くという底力は、何物にも犯され得ぬ強固な不思議な力を持つている。この氣ハクと忍耐感のこもった精神は、汗と油にまみれて働きつつ学ぶ若い僕達のものだ。この精神はあらゆる障害にぶつかつてもくだけず、玉のように結び合い、雪だるまをころがす如く大きくなる。僕はじつと暑い夏を、また厳しい冬の寒さを耐え忍ぶ。この忍耐と鋼鐵の如き魂で、やがて訪れる春を待つのだ。白い雪だるまは汚れて溶けていつても、堅く結ばれた一滴づつの水となり、やがて大海に注ぐことであらう。僕

は社会のチリの如き存在である。人間の生涯には数限りない仕事が残されている。

僕はこの力強く芽ばえる精神で、あらゆる難問題をもやつてのけ、そして明るい健全な社会を造り出そうと願っている。これが僕の生きる最大の目的だろう。

働くことは一番苦しく、一番楽しく、また一番美しいことなのである。

社会は違ふ

匿名男

(徳島 店員 17才)

“卒業の寄せ書こわい世と知らず”

こんな川柳を、療養中の叔父が私の卒業を知らせた返信に書いてよこされました。

馬鹿なそんなことがあるものか。昔の人と違つて甘い考えはどこにももつていないや。私の心は反発し、奮怒さえ覚えました。

しかし現実にはあまりにも厳しく、重荷となつて私の心をゆさぶります。

学校で想像していた社会は、現実的と思つていた私を根底よりくつがえし、お坊ちやんだつたと思はしめるだけでした。決して待遇がわるいものではありません。住込店員として恵まれた食事は貧しい家庭以上ですし、女店主ですので暖かい心使いもしてくださいます。ああそれなのに私の心はあまりにもみじめなのです。恵まれているんだと思ひ返しても、疲れ切つて二ヶ月に一貫あまりやせた自分の体をなでていると、社会は違ふというよりほかありません。こん

な時叔父が就職の時書いてくれた、腹を立てるな、ヤケをおこすな、長い目で物事をみる、あせるな、の四カ条を出してみることにしています。それと同時に不幸な叔父の生活を思い出し、ます。

叔父は私と違つて秀才といはれ、学校一の成績で国鉄に就職しました。しかしそこにあつたものは学校を出ているだけで区別されている階級差です。高校卒はラシヤの服で雇、中学卒は木綿の服で傭、その仕事も前者が出札改札に対し、後者は連結、小荷物扱とはつきりわかれ、ております。叔父の心は激しい怒りに燃え、学校を出ていない者の悲哀を味わいました。腹を立てた罰です。少年よ大志を抱け。一年鉄道で生活した叔父は県庁の給仕になり、アルバイト学生となりました。猛烈な努力は人に負けまいとしたアセリの生んだ産物です。しかし鉄でない人間の体は、疲労の重なりで胸をおかされました。それでも半年働くと学びを続けました。ヤケのなしたワザです。それから五年叔父はすべての望みを捨ててベツトで横たわつております。何て馬鹿な人間だつたのだという叔父の自ちようが、私の耳にきこえてくるようです。長い目で物事をみると叔父はいいです。じつと国鉄でとどまつていても、今ごろ車掌ぐらいになれたのになあと汽車ごとに思うそうです。

私はこの叔父のなげきを自分の身にあてはめてみます。そうするといつか叔父と同じ状態の心を発見します。

私の勤めている店は花カツオの製造卸ですので、風雨の日も配達をしなければなりません。これが仕事と思つても、腹の立つ日がどうしてもおこりがちであり、氣にくわぬお得意の暴言にも若い私の心はむらむらとなりがちです。これではいけないと思ひ返します。

ヤケをおこすな、これもよくやります。腹が立つとついヤケになり失敗を二つ三つ重ねます。

あせるな、長い目でみる、人生はマラソン競争であると自分でいいかせていてもスピード時代の意識にかられて自分を見失いがちです。あるがままをオキテとし精いつぱい努力することだと最近思ひ始めました。あまりにも心身の成長にあわない努力は病氣の原因であり、幸福を望んでいる私達の夢は一瞬にして崩壊してしまいます。

健康第一、そしてあまり大志を抱かず、着実にあゆんでゆくところに、築かれた人生があるように思えるのです。社会という大きな力は、理想と抱負をもつてとびこんで来た私達を、長年の慣習によつて同化してしまおうとかけります。仕事を覚えること以外の人づきあいのむずかしさは商店経営を目指す私にとつて大きな課題です。体力的疲れよりも精神面の八方ふさがりが、学校時代ののびのびした気持を型にはめてしまおうとします。私はここで大相撲をとらなくてはなりません。理想と現実の四つ相撲の術を体得しなければ動きがとれません。苦しいことは覚悟していても社会はあまりにも他人にきびしく、冷たい心の戦いは一歩町にふみ出す

綿ぼこりの中で

谷 高 子

(香川 紡績工 17才)

もうあと三十分、ひたいから大粒の汗がポロポロと流れて来る。昨夜の睡眠不足のせいかわしくて苦しくてたまらない。手にびつしより汗をかいて、糸が思うようにつむげず、ともすればその場にしゃがみたい衝動にかられる。私は苦しまぎれにふと後をふり返つた。私の目に映つたのは、一週間前に入社したばかりの新入生の姿だつた。綿ぼこりの中で何もかも忘れてただ糸をつむぐこと、そのみに身心を打ちこんでいる姿を見た瞬間、私は二年前の自分の姿を思い出した。

O 中学校を卒業して本当にまだまだ未熟な私がこのT社に入社したのは、昭和二十九年の桜の花の咲きほこつた四月の中旬だつた。十人に一人という激しい競争率のこのT社にパスした私は、なんともいえないほこらしい気持と、今日から一社会人だという喜びを持つて美しい緑に包まれたT社の門をくぐつたのである。そして二ヶ月、三ヶ月私には新しいそして自信に満

ちた生活が続いた。寄宿舎の共同生活というものはとかく感情のもつれが多く、いろいろ苦しいこともあつたが、私には何もかもすべてのものがただ珍しく楽しかつた。しかしこのような自信に満ちた生活も、そう長くは続かなかつた。あまりにも平凡な自分の生活がたまらなくいやになつてきた。そのうえ女工という者に対して、とかく偏見の目で見える外部の人達の態度に、私はなんともいえないいきどおりを感じた。私はたしかに紡績で働いている。しかしそれがどうしたというのだろう。私だつて一労働者として文化的な生活をしているつもりだ。紡績で働いているがゆえに、なぜこんなに肩身の狭い思いをしなればいけないのだろう。わからない、わからない。(私だつて一労働者として一生懸命働いているのです。もう少し私達に対して暖かい気持で接してください)と大声で叫びたかつた。

また私の工場は二交替制であつた。先番の時などはまだ夜のとぼりがすつかり明け切らない四時に、ベルの音で反射的に飛び起きる。ねむい目をこすりながら冬などは手も凍るような冷たい水でたんねんにそうじをして、あたふたと工場にかけつけて行く時など、ただむしように悲しく、なんだか父母を恨みたくなるような気がして、ポロポロと涙をこぼす日も珍しいことではなかつた。工場の中でも日増しに持台数をふやされ、だんだん苦しくなつていった。しかし私は力のある限り一生懸命に糸をつないだ。しかしつないでもつないでも、糸はつきつきと切れてどうにも手のつけようがなくなつて、泣き出してしまふという始末だつた。しかし私はそ

んな時すぐに父母の顔を思い出した。(お父さんやお母さんは今日までいろいろな苦勞をしながら私を守り育ててくれたのだ。こんなことではいけない。もつとがんばらなくては……)と何度自分で自分にいきかせても糸が切れることだけはどうにもならなかった。しかしいくら糸が切れて走り回つていても、先輩の人達はあまり同情してくれなかった。見回りさんが回つて来て「どうしたの?こんな糸を切つて、もつと一生懸命にやりなさい」とそんな冷たい言葉をあびせかけられた。しかし私はただ「すみません」と答えるだけしかできなかった。しかし心の中では懸命に叫び続けた。(私は力のある限り一生懸命やつているのに……これ以上どうしろというの?私のどこからこれ以上の力を出せというの)。しかしどんなに心の中で反抗しても自分の力ではどうにもならなかった。立身出世のためには、部下の者には多小の犠牲者が出て平気でいる大人の人達。そして少しでも何か失敗すると、二言目には能率給をさげるといつてお金のことにふれる人人。私はだんだん『働く』ということについて疑問をもち始めた。働くということは一体何だろう。たしかに賃金を得るために働くのだ。しかしいくらお金を得るためとはいいながら、毎日泣きながら綿ぼこりの中で走り回ることだけが精一ぱい。

これでいいのだろうか?私は毎日苦しんだ。私の考えていた働くということは、何かもつと楽しみがあつたはずだ。どんなに身体は苦しくても、その苦しみを撤回してくれるようなふんいき。そして働くことによつてできるりっぱな人間性。そういうものがあるはずだ。どんな

に肉体的には苦しくてもよい。精神的にそれを撤回してくれるような喜びがあれば……。やはり私の考え方が甘かったのかしら？　そう思うと何かうらぎられたような気がして残念で残念でたまらなかつた。私の心の中は、どろどろにとけた鉄が一度固まると、もうなにも加工できないように、何か固定してしまつたような気がした。そして私は毎日毎日つばな労働者とは一体どんな人だろうと考え続けた。糸が上手につなげる人、これがりつばな労働者だろうか。ハंकをたくさんあげる人、こんな人だろうか？　いやいや違う。そういうことも大切だろう。しかし本当にりつばな労働者はそれだけではない。まずりつばな人間性を作ることだ。少しぐらい糸つなぎが下手であつても、職場の人と仲良く働き、よいふんいきを作り思いやりのある人間。こんな人を本当にりつばな労働者というのではないだろうか？　そのためにはまず第一に教養を身につけなければいけない。自分は学校を卒業したので勉強などは必要だと思えていた。勉強だ。勉強だ。人間は生れてから死ぬまで勉強しなければいけないんだ。そんなことが頭の中に浮んで来た。世の中の矛盾に反抗して、理屈つばいことばかりをならべたところでどうにもならない。それを実行することだ。そう考えた私は手あたり次第に本を読んだ。本をよむことによつて何かを得ることができると思つた。定時制にも行こうかと思つた。しかし後番のある自分の生活ではそんなことは不可能だつた。仕方なく私は工高校の通信教育部に入学した。しかし通信教育といつても思つたように知識が身につくわけではなかつた。誰の指導もな

く、忙しい時間をさいて一冊の本をたよりに勉強する通信教育。そのうえ友達からは（えらそうに勉強なんかしている）と冷たい目で見られ、消燈の時間もきまつているので、ソッと窓を開いてうす暗い廊下燈の明りで懸命に難問ととり組む、というような状態だつた。そして働くということのむずかしさをつくづくと悟つた。また同時に、以前とは違つた働く者の喜びというものが味わえるようになった。働きながら学び、学ぶことによつて仕事の上に何か少しずつプラスされているような気がした。

あれから二年、職場にもすっかり慣れて、世の中のあらゆることにも冷静に判断できるようになつた。この二年間私の考え得たことはまず大きな夢を持ち、自分の職業に対しては、ほこりをもつて正正堂堂と前進することが大切だということであつた。私には夢がある。それは将来代議士になりたいとか、一流の作家になりたいとか、そんなだいそれた夢ではない。（すべての人に愛され平凡な人間になりたい）これが私のただ一つの大きな夢であり、希望である。あの新入生達も今にきつと世の中の矛盾というカベにつきあたり苦しみ考えるだろう。私と同じように……。でもこれは人間誰しも一度は通らなければいけない道であり、そのカベをつきぬくことによつてだんだんと一人前の人間になつて行くのだ。私の苦しい生活もこれからなお続くだろう。いやもつともつと苦しくなるかも知れない。しかしあらゆる困難を堪え忍んで、大木のように根強く生きて行きたい。

働く年少者の皆さん。いつも大きな夢をもち、ほこりをもつてがんばりましょう。そうすることによつて、私達は生きる喜びを見出しすくわれるのです。たとえそれが牛の歩みであつても、一步一步自分の夢に向つて前進しましょう。過去を反省し、そして明日を夢見ながら…。

雑務課長

野 辺 当 宗

(愛媛 観光社員 16才)

その日は土曜日だったので久しぶりに早くうちに帰った。

「兄ちゃん、お帰り」と僕を迎えたのは、笑顔で食卓についている家族と、白いフキンののかつた食卓、それにいつもと違った夕食時のふんいきとであつた。

(おやっ!!)と思つたがわざと何気なく上着を脱ぎながら「今日は誰かの誕生日かな?」とカレンダーを見る。なるほど三月十日土曜日のところに書き込まれている。近寄つて見ると母のらしき字で「長兄就職記念日」とある。思わず振り返つて、こちらを見ている家族にニヤリと歯を見せてしまう。

「兄ちゃんおめでとう」「当宗おめでとう」母や弟妹達の暖かい言葉を浴びながら、くすぐつたい気持で食卓につく。じつとまぶたを閉じれば、過ぎ去つた一年のことなどが、はつきりと脳裏に浮んで来る。

——中学卒業を間近かに控えた僕達の眼前に「将来の方針はいかに」という大問題がぶつかつて来た。僕達はそれぞれに将来への大きな希望をいだいた。だが就職難や進学難に荒れ狂つた未知の世の海原は、僕達希望号の穏やかな出港をゆるさなかつた。

まもなく先生より「交通公社に似た旅行あつせん関係の会社へどうだ?……」と今の職場を紹介された。僕は考えた。そして自分の希望のケースにそれをはめ込んでみた。どうもびつたりせずなやんだ。港だけはどうか出たが。さてどの方向に舟を進めようかと迷う新米船長のよう……。

だがやがて、朝暗いうちから行商に出る母のこと、一日を苦しい労働にむちうつ父、それに自分を頭に六人の弟妹達のことを思い浮べるとき、僕の心はきまつた。

——それから一年たつた今、僕にはその一年間がなくてはならぬものに思える。

入社当時、勝手がわからず事務所のすみに席をもらつて小さくなつていた自分、電話に出ては舌が固まつたり、相手の声が聞き取れず、(この電話、こわれているのじゃないかしら?)と小首をかしげた自分、あきらめていた高校進学がゆるされ、定時制高校入学の願いがかなつて大いによるこんだ自分。それら幾人もの自分が、おかしくまた非常になつかしく思い出される。

また多くの苦労や不満につまづき、よろめいたことも思い出す。客に接することが多いため、自然に起つてくる服装の問題、若い自分と大人達との考えの相違、それらの苦しみは遠慮

なく自分を襲い固まらせた。

しかし旅行にたびたび行けること、会社側に理解のあること、その他三千円ばかりの給料から弟妹達に何かと買つてやり、兄貴ぶつたりすることのできる楽しみは小さいものではなかつた。

そんな中で一番不満を持つたことは、僕にだけ定まつた仕事を与えられないことだつた。与えられる用とは、使い走りとか、かねて考えていた仕事とはおよそ無関係なものばかりだつた。そのため心の中でたえず何ものかがぐづぐづいつていた。

——ところがつい近頃のこと、あることを発見して自分の考えに大きな変化をもたらせた。旅行シーズンになり、急に忙しくなつたため雑務がものすごく僕を襲つて来た。

まず朝は廊下、階段などの掃除に始まり、自転車の掃除、旅行切符の購入、市内市外への使い走り、時には社長、専務の私用に走るなど、どれも自分にはうれしい御用ではなかつたが、最近ではボロ自転車にまたがり、仕事をつぎつぎとすませて汗にまみれて社に帰つて「うん、ありがとう……すまんがこれもやつておいてくれないか……」とまた用をいわれてもいやとも思わず、かえつてそこに新しい力がわいてくるのを意識するようになった。

最初は何に幾人もの人がいるのに、どうしてこう自分ばかりに用をいい付けるのかと、不思議に思うと同時に（どうせ中学出の僕など、いつまでたつてもこんなことばかりさせられるん

だ)というやけつばちな考えすら持った。

だが今では、そのように活動力を必要とする用事の一つ一つが、若い自分に最適であることがわかつて来た。それは決して自分勝手なウヌボレではない。背広ネクタイの大人達に、自転車の掃除や、またあつちこつちへ使い走りができるのか？ そのとき役立つのが若さという特権をつた自分達なのだ。そのうち、だんだん多くの用事をいい付けられるにしたがつて(この雑務なる仕事は、ここでは僕だけにしかこなすことのできぬ仕事なのだ)との確信をさえ持ち得るようになった。そのため近頃では、弟達に「兄ちゃんは何してるの、会社で?…」と聞かれても、自分は胸を張って答えてやる。「兄ちゃんはな、株式会社愛媛観光社の雑務課長だよ」と……。だからこのごろ僕が出勤のため家を出かける時、きまつて弟妹達が「課長さんのお出かけえー」とふざける。それだけならよいが、このあいだ妹が近所へ行つて「うちの兄ちゃん課長さんよ」といつて来たのにはまいってしまった。しかし自分が雑務課長である誇りは今も変らない。

課長室どころか机の一つも与えられない自分だが僕は満足である。雑務課長が机にじつとしていては自分の役目を十分の一も果せないんだもの。今の僕には室や机などもらうより、心から「これ頼むぞつ」と一つでも多くの用をもらうことなのだ。

最近僕はこんなことを考える。

僕が就職した初めのころのように仕事が好きになれず、またあたえられた仕事にとつくんでいけぬ人達が多くなるのではないだろうか。仕事や職場をよく変える人。それらの人々は、働くことの尊さ、働けることの幸せにおいて、もう一度違った角度から自分を見てみるとが必要ではないだろうか！ 世の中の人々が自分の仕事、それがたとえどんな仕事であろうとも一生懸命ぶつかつて行くならば、就職難、失業というあの大問題も少しづつ解決されて行くのではないだろうか。

また夜学ぶ苦しさの中にも、理解ある会社側のすすめで定時制高校に行ける僕の幸福にひきくらべて、学びたくとも学びの庭に入ることのできない多くの友達が、一日も早く通学できるように願うと同時に、自分も早く会社にも、また社会になくはならぬ雑務課長になろうと心を新たにするとともに、他に働く若い同志の中から多くの雑務課長が生まれてくることは、新しい日本の社会を作りあげるに大いに役立つように思えてならない。

綿ぼこりの会話

匿名女

(高知 紡績工 17才)

何の話から始まったのか忘れてしまつたけれども、休憩の時にKさんが「私この会社がいやになつたけ、やめたい」といいだした。それにつられてBさん、Hさんも「本当に難氣(つらい)なのねえ」と相づちを打つ。

「うちらでも血の通うた人間ぜよ、それを牛か馬とまちがえて人間が機械を使つてゐるのか、機械に人間が使われているのかわからんちや」「おまけに班長さんや、係長さんににらまれて」「うち考えていたら死んだがましと思ふけね」「馬鹿ねえ、こればあ(これくらい)のことですんで死んだりして、うちなんぼ難氣なと思ふても、死のうなんて考えんぜ、未来は立派な人間として活躍せにや、結局負けたということになるきねえ、しつかりしいや」「うちらばあ(私達ばつかり)こんな勢い込んでも、世間の人はあそこの女工さんはガラが悪いというてさんざんよ。この間も町へ行つちよつたらおぼさんの人が、〃この女工さんはタバコもお酒ものんで

金使いが荒けなんて、ペチャペチャ悪口ばかりいいよつたんぜよ。うち腹が立つたけ、どなり返しちやろうかと思つたけれど、無駄じやと思つたきやめてもどつたけれど、涙がひとりこぼれたぜ」「いいたい者にはいわしちよきや、自分が真面目にしつかりしちよつたらえゝじやいか」「そりやそうぢやけれど、学校へ行きたい思うても、二交替制じやどうすることもできんし」「あゝ哀れなる者、汝の名は紡績女工なり」「そうひがみなや、やろうと思へばなんでもやれるぢや」「そんなのん気なことというて、学校卒業してもう二年過ぎたぜよ」「少年老いやすく、学成りがたし……か」

こんな会話を聞きながら、私は涙がこぼれそうになつた。二年前、どんなことがあつてもがんばろう、進学しなくても勉強はできると勢い込んでこの工場に入つてきた。

しかし私の考えと現実の社会のへだたりはあまりにも大きすぎた。現在の私はこの空間をうめるだけが精一杯。帰郷するたびごとに、白髪の増した頭を悲しくさげて涙する母「ミコちゃんすまないねえ、小さい時から勉強の好きだつたあんたを、こんなところに押しこんで……」「厭ねえお母ちゃん、ミコ、そんなことなんとも思つてないわ。今は働きながら勉強できる時代だもん、そしてミコ達をこんな生活に落とし込んだ戦争を、この世からなくするようにミコ達若い者がするの。女は女らしくなんていうけど、和裁や洋裁、お料理が上手になつてよいお嫁さんになる。それも人間の生き方だし、一生懸命勉強して教養を積んでゆくのも人間の生き

方。ミコはどつちも勉強するの。友達は生意気だつて笑うけどミコは自分の道を進んでゆく『あんたの気の強いのはお父ちゃんゆずりやもんしようないけど、ミコちゃんがそんなこというと、よけいつるうてね』『うちのことなら平気よ』こみあげてくる涙を我慢しながら「それよりお母ちゃんて苦労性やねえ、まるで苦しみに生れて来た人みたい。これからの世の中はミコ達の手でみんなが住みよい明るい社会をつくるの。ウフ……」いつもこんな会話をかわしている私達母子。そして楽しかった幼い時の家庭を思い出す。

「ミコちゃん、何考えてるの、さつきから黙りこんでしまつて」というKさんの声に「あんならの話が私の子守歌のかわりしてたらしいわ」「まああきれた、子守歌とはあんまりわやにせんちよいてや」(馬鹿にしないで)「ごめんね、うちそんなこと考えていたら頭痛がするもん。それにうちね。私達のいま持つている向学心が何時まで続くかしらんと思うて、二十才になつても三十才になつても同じじやおか思うて」「そんな先のことはわからんけど私達だけでも持ちつゝけたいねえ」

こんなことを話し合つているうちに休憩時間も終つて、みんなそれぞれの持場に入つて行く。

綿ぼこりの中で未来のことばかり思つている私達。今迄は紡績女工はこうしたものだときちめていた人人が大勢いる。しかしこんなことではいけない。宿命という言葉にのせられてい

ては、何時までたつても人間としての生活はできない。私達も、ひとりの心ある人間として扱われたい。それにはやはり身近なことから研究し勉強する必要がある。女工は女工なりの正しい人間の道があるはずだ。女工だからといって卑下する理由は何一つない。また外の人達も女工さんだといつて私達を軽蔑しないでほしい。おたがい人間として生命を受けたものなのだから、人間と人間にかわりはない。だのに私達はなんとなく区別されているような気がする。こんな劣等感をなくするためには一番大切なのは、世間の大人達の深い理解だと思う。私は何時かこの世の中がみんな平等の人間社会を営む時がくるように、神でも仏でもない私達と同じ姿をしている人人にお願いしたい。

こんなことを考えていると、ふだんは敬遠している係長さんが台の間を見て回つても、そう固くならず仕事をする事ができた。

私達若い者が次代を背負つた時、KさんBさん私達は、どんな姿をしているのかしらと思ひながら、綿ぼこりの中でぎゅうとくちびるをかみしめた。



働きながら学ぶ喜び

昭和二十九年三月僕は卒業した。

いよいよこれから実社会のスタートを切つて、自分で判断し、自分で実行しなくてはならぬ。ある者は高校へ進学しなお一層の教養を身につける。これにはやはり家庭経済が対立するだろう。僕のような者は就職することが第一の目標だつた。大きな会社に履歴書は出したが試験も受けられず落ちてしまつた。やはり親がいらないからだと思つた。幸い町の小さな食料品店に就職が決つた。この時だけは非常にうれしかつた。また、進学者に負けてなるものかと思ひ、家計は苦しいけれども定時制に入学することができた。

卒業式の翌日は弁当を持つて出勤した。初めてなのでなんだか胸がどきどきして恥かしいようでも元気がなかつた。店の中に入つて「お早ようございます」といつただけで真赤になつた。もちろん心の中では（よろしくお願いします）とつぶやいたが、どうも声は恥かしくて

山・内 栄 一

（福岡 店員 17才）

出なかつた。早速配達である。「町の食堂に五百刃」といつて削り節を箱の中に入れてくれた。地図も書いてくれた。なかなか親切そうなおばさんだ。これから毎日自転車に乗れると思うとうれしかつた。こうして十一日働いて月末に七百円もらつた時は急いで帰り、母にお菓子を買ってやつた。だんだん慣れてくると機械の方も教えられた。油をさすところ、スイッチの入れ方、魚の名前、いろいろである。削り節機械は十二枚のカンナをとりつけて、魚を一匹一匹機械の中に入れて作るのである。

或る時僕は一心に削つていたところ突然チャチャと妙な音がした。横にいた店の主人が「とめんか」といつた。どうしてよいのかわからなかつた。すばやく主人はスイッチを切つて、カンナを見た。一枚一枚ぼろぼろになつていた。魚の中に石がはいつていたそうだ。その時ほどしかられたことは今もわすれない。「いつも熱心によく機械を見て仕事しろ」といわれた。制服を着て道をいばつて歩いている高校生を見ると、なお一層くやしかつた。何のために俺はこう毎日しからなければならないのだ。ある時は自転車に大きいかごを積んで町の中を配達している時、友達と会つて指さして笑われたことさえあつた。こんな時もどうして俺はこんなに苦勞しなくてはいけないのだろうかと思う。夕方四時半まで足がいたくなるほど市中を走り回り、五時から学校で八時十五分まで腹ペコペコで勉強する。勉強の方は苦にもならないし、恥かしいとも思わないが、どうもあの店で仕事をするのがいやになつて、一日やけくそで寝て

いたこともあつた。寝ていても眠つてはいないで、つぎつぎにいろいろなことを考える。

これからの日本を進歩させるわれわれ少年が、このような態度では進歩どころか暗い世の中になり、下落してしまうことだろう。仕事もせずにぶらぶらしては学校の月謝代も払えない。また給料は安いが一家の家計も手伝うこともできない。人がなんといおうとしつかりと自転車のペダルを踏もう。店の主人からどんなにしかられようと、だまつて力のあるかぎり最後までがんばろう。この時やつと夢からさめた。この日は休んでよかつた。今日はなんと俺を幸にしてくれたことだろう。今日こそ俺の反省の日だ。それから毎日仕事にはげんだ。電話がかゝれば自分で出て、自分で製造、自分で配達するようになった。こうして毎日元気に働いていればなんて気持がよいことだろう。この気持こそ道をいばつて歩く学生にも、家にぶらぶらしている者にも味わえない。本当の就職者だけといえるだろう。

就職して八ヶ月目には給料三千円になつた。前よりすこしは封筒も厚味が出たようだ。三千円の給料の中から五二〇円は学校の月謝に、残りはみな母にやつている。僕の仕事は配達が多いので、夏の暑い時などはどうも気もすすまない。しかし働かないとくびになる。山を一つ越えて配達することもあるし、風がばかにひどい雨の日の時などズボンはずぶぬれ、自転車はパンクしてとぼとぼと歩く時もあつた。自転車店で修善すれば四〇円かゝる。領収証をもらつて店の主人に見せ、金をもらおうと思つていても、机の前に座わつてしきりにそろばんをはじい

ている姿を見ると、どうもしかられるような氣持がする。結局学校に出す紙代の金で払つたこともあつた。

今ではもう就職してから二年を越した。始めは店の者からしかられると非常に氣持が悪かつた。しかし今では注意されるほどうれしくなつた。それだけ始めより世の中のことがわかつてきたのだらう。店の中ではやはり主人が一番僕の親しみやすい親のように思えるようになった。時計の針が一秒一秒刻んでいくように、僕らも一歩一歩と成功の道に近づいているのではないか。僕よりもつと想像もつかぬほど苦勞している方があると思う。どうか働く少年少女の皆さん、つぎの日本をせおうべきわれわれは、いかなる苦勞にも負けず、最後まで生き抜こうではありませんか。

働く青少年に愛の手を

相 原 正 信

(佐賀 販売 15才)

私はこの春中学校を卒業いたし、幸いにも高校に入学を許された者であります。私達の中学校では進学を志す者が約七割、就職を希望する者が二割、家事の手伝いとどまる者が一割ほどいました。進学を希望した者の中にも、不幸にして合格を許されず就職した者もあります。また本人は進学を希望しても、家庭の事情がそれを許さずやむなく就職した者もあります。もちろん進んで就職を希望した者もおられます。進学できなかった者も、就職を希望していた者も、今や新たな希望に胸おどらせ実社会に飛び立つたのです。しかしこれらの青少年を社会はどう扱ってくれるのでしょうか。はたして暖かく迎えてくれるのでしょうか。希望に満ちあふれているその心を、無情の一撃で打ちのめすのではないのでしょうか。私はそのことが心配でならないのです。

これは私がヤクルトのアルバイトで、一軒一軒注文をこい歩いた時のことでした。私は先ず

最初に一軒の、みるからに大きい屋敷の中へ恐る恐る入つて行きました。家中が静まりかえつていましたので、留守ではないかと思いましたが、思いきつて呼鈴を押してみました。するとすぐ足音が聞え、玄関をあけて出て来た人はその家の主婦らしい人でした。たいへんに優しい声で「何のご用でございましょうか」と尋ねてくれました。私はこの言葉に力を得てグツと生唾を飲み込んで「私はヤクルトのアルバイトをしている者ですが、お宅でヤクルトを取つていただけないでしょうか」と一気に答えました。するとその女の人は急に厳しい顔になつて「ああヤクルトですか。家にはそんなものはいりませんよ。忙しいのですから勝手に呼鈴を押して貰つては困りますね」と云つて急いで玄関をしめてしまいました。私は一瞬打ちはじめられたようになつてその家を去りました。世慣れぬ私がこの時どんな感じを受けたかはいまさらいうまでもないことでしよう。その日はもう歩きまわる元気さえなく、すぐ家に帰りました。そして母や兄にこのことを話すと「それはそういう場合もある。しかしそのくらいのことにくじけるようです。もう一度元気を出してやつてみる」というのです。私は今日の苦しい経験がありますのですぐには納得できませんでした。しかし私の家も父の亡い後に母一人で兄弟三人を育てているのですから、決して楽ではありません。小遣錢も満足にはもらえません。そこでまた氣を取りなおして翌日出掛けることにしました。

その日は雨も降つていましたので私は余り氣乗りがしませんでした。案のじようもう夕飯時

というのに、まだ一軒も注文が取れません。私はもう帰ろうかと思いましたが、何くそ一軒くらい取ってみせるぞと雨にぬれた手で説明書を握りしめながら、ある一軒の、通りから少し引つこんだ家を尋ねました。「御免ください」こう申しますと、食事中だったようですがその家の主人とうなづかれる人がすぐ出て来て「何でしょうか」と問うてくれました。私は食事中じやましたことを大へんすまなく思いながらも、先日の要領で説明してみました。主人はしばらく考えておられましたが、やがて気の毒そうに「私は引揚者でして今のところ余裕がありませんので、まことに気の毒ですがこのつぎの機会にでもまた一度来てみてください」といわれました。私は昨日のこととくらべてどんな気持だったでしょう。夕飯時にうかがつてあるいは素気なく断わられるのではないかと思つていましたのに。その時のご主人の態度こそは幾多の教訓よりも何よりも、身にしみて私を社会そのものにふれさせ理解させてくれました。

私はそれに力を得て、またその翌日から注文をとり歩いたのです。私の体験は小さなことです。まだまだ社会には幾多の青少年達が、血みどろの生活の斗いをくり返しているのです。私の友人に中学を卒業して大阪のある工場に働いている者があります。その友はいつも「自分は寂しい。手紙がほしい」と訴えて来ます。これはどういうことでしょう。もちろんまだ環境になれないためでしょう。故郷がなつかしいためでもあります。しかしはたしてそれだけの理由なのでしょうか。いな、私にはそればかりとは思えないのです。その工場の営業主や先輩

は、彼に親切にしてやつているのでしょうか。彼らに働きよい職場を、快い憩いの場所を与えてやつているのでしょうか。私達青少年はこわれやすい瀬戸物のような神経を持つた身体と、これに伴う感情もまだ十分に伸びきらない未完成な人間なのです。実社会にふれてみてすぐそれに染まる危険性さえあります。私は働く青少年のために、社会の福祉施設がもつともつと充実され、我ら青少年にその暖かい愛の手を延ばしてくれることをせつに希望してやみません。

働きつつ学ぶ

山 田 裕 男

(長崎 豆腐製造配達 17才)

私は制限されたスケジエールの中で、勉学に勤労に励んでいる。若いわれわれはとかく青春時代を、明るく有意義にそして楽しくかつ健全な生活を送りたいと願うのである。その願望も、定まつた職業につき、定まつた勤務の時間内においては全く許されるものではない。よしんば雇主からの許可を得たとしても、そこには人情といふものがある。義理といふものに圧迫されて、私達は耐え忍ぶのである。

革ぐつをはき、ピカピカ光る金ボタンの学生服を着た屋間の生徒が、どれほどうらやましいか、またどんなにせつなく感じられることか。幼少にして恵まれない環境、心境の私達にはとうてい望むところではないと知りつゝ、若い青春時代を何の意味もなく送るのが悲しくてならない。中学時代、クラスメートだった友人も、汚れた作業着のわれわれには顔も向けてくれない。宿題を手伝ったこともあつた。掃除を手伝ったこともあつた。本を貸し合つて読んだこと

もあつた。そんな友人も現在の私には、友が友でなくなつた。私はどれほど失望と絶望にみまわれたことか！全くの孤独に私は悩まされた。このような環境にある私は、赤赤と燃え立つた顔を向け、苦勞を共にしている同胞を得て幸福を感じるのである。

五時から八時半までの夜の授業は全くの苦斗である。三時限目、四時限目となるといつしか頭が机につく。墨板の字がぼやけて見えなくなる。講義が聞きとれなくなる。応用力がなくなる。そして他人の陰にかくれて寢息を忍ばせるのも私には下品には見えない。みんなはおかしいのかみ殺して互にかばうのである。こんな情景も夜学生のわれわれにはむしろ常識とされた。職場退場の時間が遅れ、授業の会間にソーツと忍びこむことも毎日ある。授業料が未納と云ひわたされても、その理由をいえず頭をたらし泣く者もいる。すべてが残酷（私はそう思ふ）そのものであるようだ。

私は豆腐製造業といふまれな職業である。午前一時に時計のベルを聞く。朝といつては誤りのような、まだ昨日の気配が残つている時刻に私は起きる。午前二時、三時ともなれば一日中でも一番眠い時刻だ。眠気のとれぬ重い頭をささえ、疲勞の抜けきれない足を引きずつて、狭い仕事場で働く。ついさつき教わつた代数の公式も、英語の単語もはや暗記する余裕もなく、またそんな態度も私には全く失なわれる。午前五時、でき立ての豆腐をバケツに入れ配達する時の憂うつなこと。しかし五時となると、ようやく眠りからさめる。まだ明けきれない東

の空は、ウツストラと銀色にして朝霧が静かに私の行く手を妨げる。朝の空気は私の体から疲労も、苦悩も、すべてのものを洗ってくれる。人家のあちこちに灯がつき、煙が立ち、そろそろ人人の話し声が聞え出してあたりは明るくなる。早起きの小学生がもうかばんをさげて走つて行く。新聞小僧が「お早よう」といつて遠ざかる。牛乳配達が自転車で走る。

八時ごろ一段落して朝食をすますと五分の猶予もなく、次の仕事が待ち受けている。銀色の米を口いづばいほほばつて、朝の食事の楽しいこと。そのたびに実家の父母の顔が浮ぶ。兄妹の顔が浮ぶ。私は悲しさと嬉しさとで胸が一杯になり、便所の中で思いきり泣くのである。九時、十時ソロソロ眠気がさしてくる。初めて昼寝の許可を受けて、せんべい布団にもぐり込む。二時間三時間して、たちまちたふき起こされる。

学校から帰宅して就寝するのが十時、わずか三時間の睡眠に、昼寝三時間の複雑なあわたしい生活が連続して行く。予習する間もなく、試験勉強する間もなく、成績は一学期よりも二学期、二学期よりも三学期とさがる一方。時たま余暇を利用してノートを開いても、疲労と睡眠不足のためか、いもく頭に入らない。

しかし私はそんな環境の中にも、両親の老いた面影を胸に抱いて毎日の労働に耐えるのである。母の喜ぶ顔が見たい。父の喜ぶ顔が見たい一念に。

たくましい体の奥底から、若い力をふりしぼつてこの矛盾した社会に一步一步前進して、よ

りよき未来を築きあげて行きたいと努力するのである。

あ ゆ む 道

上 川 頼 雄

(熊本 料理士見習 16才)

私は菊池郡瀬田村字立野に住んでいました。この春無事に義務教育を修了したのです。中学時代の私の第一希望は進学、第二希望は就職でした。そうして進学に志して一心ふらんに勉強をしていたのですが、ある夜ふと夢を見たのです。その夢は私が大きくなつて魚屋を営んでいるのです。

母も頼もしそうに手伝つているところです。大繁盛をしていましたけど、はからずも目がさめて夢だつたのでがっかりしました。

そこで考えたのです。私が進学しては母にたいしてすまないと思いました。母は進学しなさいといわれるけど、母の願ひは私が魚屋をやることと思ひました。なぜならば今から十年くらい前は、父が魚屋を出していたのですが、戦争が始まつて、父は召集令状という赤紙がきて、上海に行つたまま敗戦となり、音信不通で戦死の公報が来たのです。その後母一人で私達姉弟

の三人を恥ずかしくない生活をさせてもられたことを思うと、進学よりも社会に出て、夢ではないけどお店を出せるようになりたいと決心ができたのです。さつそく母に話し、先生にお願いをして、熊本市洗馬の幸楽という店にきまり、それからというのは学校生活は卒業が待ち遠いほどでした。

そして、三月十六日がきて晴の卒業です。この日九ヶ年間の無欠席賞をいただいたのも、母のおかげとつくづく思いました。

五日後の二十一日に社会人への第一歩をふみ入れました。この日は母と姉ときてくれました。ふとんはもう着いていました。母が夜おそくまでかゝつて作ってくれたのです。その日主人と会いろいろな話しをされました。小遣金は千円といわれた時、大へんうれしく思いました。なぜかならば家では勉強だから五百円ぐらいだろうといつていたからです。そして朝は八時半に起きて、朝食十時、中食三時、夕食十時と言われました。八時半とは、あまりおそいと思いました。でも今ではねむいくらいです。母達と夕方六時に別れ、私は兄さんから白のコートと、前かけをいただきました。コートをきた時のあのうれしさは、今でも忘れることができません。そして一日終り、二日三日とたつていつたのです。

それから十日ほどたつて私はこんなことを考えたのです。こんな鍋ばかり洗つていて、魚の料理を覚えるだろうかと不安になったのです。

また、（私は在で魚屋をするならば）折詰めもおぼえるといいなとも思いました。鍋を洗いながら将来何をするのだろうかと思うと、悲しくなり涙まで出てしまふのでした。ほんとにいままでにない苦しい悲しい生活でした。中学時代あれほど早く職につきたいといつていた私でしたが、これが職場かと思うと悲しいばかりでした。鍋を洗っている時涙が出ると、しらないふりして便所にいつてよく涙をふいたものでした。死にたいほどに思いました。これではいけないと思い、さつそく母へ手紙を出してみました。二、三日後返事がきました。

もちろん、便所にいつて読みました。声をするほど泣きながら手紙を読み、元気づけられました。そうです。今から迷つてはだめだと思いました。何をするにしても一人前にならなくてはだめだと思い、それからというものの生活は楽しくなりました。家でやつていなかったせんたくも自分でやるのです。ほんとに母の苦勞がわかります。特にズボンは洗いにくいものです。でもこれが修業と思つてやつています。

私はもう「幸樂」に来てから二ヶ月になりますが、まだ何も覚えていないような気がします。先生の話によれば、料理士の免許は十八歳になつたらとれるとのことですから、今ははりきつて勉強しています。ほんとに学校生活よりも職場がおもしろいようになりました。

中学時代味わうことのできなかつた、自分で働いてお金をもらうことが何よりの楽しみです。私は今からは自分から進んで仕事をやり、中学時代のモツコス（人のいうことを素直にきかな

いこと」をなくしていこうと思つています。モツコスからぬけ出て馬鹿になり、また私が今の職業で一人前になるのにはそうするよりほかにしかたがないと思います。でもそれで、はたして社会の荒波をわたつていけるでしょうか？

それは疑問です。これからはその荒波とたたかつて、立派な一社会人として大手をふつて社会という道を歩けるようになることが、現在の私のそのぞみです

将来は小さいながらもささやかな店を出して、今まで苦勞をかけた母に、一日も早く私の手で恩がえしをしていくのが長男としてのつとめでしょう。また将来への夢でもあり、希望です。その希望を一刻も早くおとずれるよう私はがんばります。この希望を私は忘れずに、職場で石にかじりついてでもやりぬきます。

深夜の仕事

匿名

(女)

(大分 洋裁見習 17才)

洋裁師になることを夢見ながらこの道にはいり、早くも三年の月日が流れようとしている。もう今では大たい一人前になつたといわれるが、その間には泣いても涙の出ない時もあった。夏の暑い時なら汗をふけばよいが、寒い冬は手がかなわなくなり、せつかく縫つたのに縫い目がそろつていないといわれ、でき上つてもまたといてやりなおさせられる。冷たさと悲しさに泣きだしたくなる。涙は見せないが心の中で泣くことが絶える時はない。ある寒い日の夜のことが今も私の胸に残っている。その日の午後五時ころ、私と同じぐらいの女の人がこの店にあらわれて「あのう明日の朝八時ごろまでにセーラー服ができるでしようか」と先生にたずねている。「八時ね、ちよつとむりかも知れないがやつてみましょう」と先生はいつて、その人から布を受け取つた。

しばらくしてから私に「英子さん、それがすんだら今のセーラー服を今夜中に縫いあげて

ね」といわれた。私には自信はないが「はい」と答えていた。縫かけの服を縫い終った時がちょうど七時であつた。縫いあげた服をしまつてから、セーラー服の型紙を取ろうとした時に先生が「夕ごはんにしましょう」といつた。たべ終ると、先生が「かたづけはいいからセーラー服を縫つてしまいなさいよ」といつた。おどおどしながら、私は布にはさみを入れて、もう一度しらべて見た。まちがいがないので裁ち、縫い始めた時に先生がやつて来て「先生は休むから、まちがわないように縫いなさいよ」といつて、先生は仕事部屋を出ていつた。つらいとは思つたが、いいつけられたことはしなければと心を引きしめ針をはこぼせた。九時、十時となればだんだんと町の家家の燈は消えていつた。十一時になると、もうすっかり消えてしまい、私のいる部屋の燈だけがあかあかとついている。冬の十一時といえばずいぶんおそく、眠たくてたまらない。でも、眠つてはいけけないのだ。これだけは仕上げなければと、自分で自分を力づけながら仕事をはこぼせた。先生もかせいしてくれればいいのにと心の中では思つたが、口ではいえない。仕事をしながらこんなことを思つた。「この先生が私のお母さんであればどうだろうか。子供だけに仕事をさせて、お母さんだけが早く休むだろうか。いや、そんなことはないだろう。私を休ませてお母さんが一人でやつてくれるかも知れない……」とこの世にいないお母さんのことが思ひだされた。外は寒い北風がびゅうびゅうと吹いている。この寒い夜におそくまで仕事をさせながら火鉢もくれない先生である。冷たい手をふきながらも、亡くなつた両親

のことが思い出されてくる。今父母が生きていてくれたら、こんなつらい思いはしなくてもいいのに……でもどんなに泣いたつて返つて来ない。じつと考えていれば、どちらか一人でも生きていてくれたらなあと思つた。深夜まで仕事をするのは慣れてはいるので、仕事はちつともつらいとは思わなかつた。が、あわれな自分の身の上を悲しく思つた。時間はどんどんたつて、やがて一時になろうとしている。もうほとんどできあがり、あとスナップをつけると全部おわる。縫い終つたセーラー服を自分の体にあてて見た。親がいてくれたらこんなセーラー服を着て高等学校へ行くことができるかもしれないのに、(この服を着る人はたぶん幸福だろうなあ)と思つた。仕上げをして燈を消す時はもう一時三十分で、もうあと四時間半しか眠る時間はない。床にはいつて早く眠ろうと思つても、ふるえるように寒いためなかなか眠れない。少しあたたまつてからやつと眠ることができた。見習として住込んでから三年、過去の悲しかつたことはすっかり忘れて、今は一人前になつた喜びで一ぱいである。この身よりのない私にも、はじめて働くことのたのしみがわかつた。私が大人の人たちにお願ひしたいことは、使う人たちを自分の子供と思つていただきたいことである。それからあまりおそくまで仕事をさせないように、田舎の方では、まだまだ青少年をひどく使っている。労働基準法というものはまったく考えていないようだ。私たち年少労働者にあたたかい手をさしのべてほしい。



カワラ焼き

富 迫 勝

(宮崎 カワラ工 16才)

三十年間カワラ焼きをしてきた父は、その道では何んといつてもベテランである。家族七人カワラ工場に住むぼくらは、文字通りカワラに明けカワラに暮れる。

どんより曇つた朝空の中にも小鳥の声は朗らかに響いて、今日はぼくはアルバイト学生だ。職人の方が仕事開始と共に絶好の調子にもつていけるように、新まいのぼくはその三十分前に工場に入り、今日の作業の準備を行う。今日の出勤人員は七名、仕事の担当は、女子A、B工員二人は午前中荒練りと二度練り(土練機で土を練る)。午後は男子A工員を加えて荒地取(最初のカワラで形だけできる)。男子A工員は午前中機カワラ切断機回し(型の中に入れて荒地を機カワラに形を整える)。男子B工員は一日中ノシカワラ切断機回し。男子C工員は一日中薪割。母は午前中薬塗り(これはカワラに光沢を出すため)。父は午前中道具物作り(鬼カワラ、棟巴などの込み入った熟練工でなくてはできない仕事)午後は父と母で窯積み(磨きもかけ、乾

燥も行い、葉塗りも行つて焼くだけになつてゐる白地カワラを窯の中に積んでいく。これも熟練を要する。ぼくの仕事は午前中リヤカーで薪運び、午後は熱窯出し（焼いて口を開けそのまま窯の中に入つてゐる、しかもまださめていないのを外に出す）。この他にも磨き土入れ、土運び、窯焼き、窯整理選別と数多い仕事がある。さあ、いよいよ仕事開始、各自分担の仕事に取りかかる。アルバイト学生もリヤカーを引き出す。今日もまた国道を横断して製材所に向う。製材所はまだ仕事を開始してはいないらしい。自転車に乗つた高校生二、三人楽しそうに語りあつてペダルを踏んで行く。たぶん普通高校に通う学生だろう。小学生の時から自転車で高校に通う学生を夢見ていた自分が思い出される。小学校の先生が二人、足早やに歩いて行かれる。ぼくの希望としてゐる学校の先生、ようしきつと自分もあのような先生になるぞ。普通高校生なんかに負けるものか。手にするリヤカーにも一だんと力が加わる。力み過ぎて火傷した跡が痛みだした。先週熱窯出しで、あまり熱かつたためか手袋の中の手が少し火傷してしまつた。撰氏六五度程度の熱のさめていない窯の中から手袋で持つてカワラを出す。手袋は使つてゐるものの役にたたぬ時もある。頭の髪が焦げることもある。窯の外にカワラを出せばよい簡単な仕事だが、一番骨のおれる仕事だから職人の方がさけたがつて薪運びをやる。自然薪まいのぼくの方に目が向く。この他に骨の折れる仕事と窯焼きがあるが、窯焼きは父より他の者はできないし、薪運びはこれまた新まいの方にくる。がアルバイト学生はぼくは文句はいわない。

週三日こうして得た給金は半分学費に、半分父母に渡す。いかなる大雨にもびくともしないぼく達の作つたカワラではあるが、暴風に吹きはがれるともろくもこわれる如く、我が家の経済も父母の健康も甚だ不安定な状態なのである。労働は楽しい。ぼくが毎日働けばもつと多くの給金が父母と四人の弟妹をうるおすことだろう。だがぼくの氣持を現在ささえているものはたして労働の楽しさであろうか。働きのながらもぼくの心を占めているのは学校生活のことではないか。授業時間、クラブ活動、楽しい野球。

ぼくは、ぼくに定時制高校への進学を進めてくださったある恩師の言葉を反すうしてみろ。

「君こそ定時制高校へ進むべきだよ。働きながら学ぶんだ。そして高校だけでなく大学まで行つたらいいじゃないか。今すぐ職について孝行することもあるだろう。だが君の希望通り大学を出て教壇に立つ日がくればこれまた大きな孝行なんだよ。学資の問題も君の心構え一つでどうにかなる。苦学して修学することはまれではないのだ。育英制度もあるし、ぼくもでき得る限りは力になつてやるからがんばるんだ」。この言葉は、高校を卒業してもはたして就職できるだろうか。できないとすれば中学を終つてすぐ就職した方が順当ではないか。ましてや今のぼくの家経済状況からしても、また長男としても寸時でも早く就職することが当然ではないだろうか。父母はぼくの進学したいのを見てとつてか「マサルが高校に行つても家はなんとかない」とそれとはなしにいう。進学したいのはやまやまだからその言葉は嬉しい。しかし中学生

ともなれば家の状況や父母の心境はおのずと察知される。かといつて全然諦める気にもなれないのだ。一体どうしたらよいのかと迷つていたばかりに一大指針を与えてくれたのである。そうだった、これこそよくに課された唯一の道だ、と息を吹き返したのである。今高校二年、父母は時おり「小学校に入つた時から学校の先生になるのだとけなげにいつていたお前が、今になつてもやはりその氣でいるのか」と笑つたり、励ましたりしてくれる。苦学して進むといふことは口でいうほど生やさしいものではない。だがいくら苦難の道であろうと、学と業とを両の手にして、いかなる問題にもあまりこだわらず、目標に向つて突進するのみである。

豆腐つくり

田 中 好 市

(宮崎 豆腐製造配達 15才)

きようもふとんをひきはがされて目がさめた。螢光燈の光がまぶしく目にはいつてくる。まだねむい。ごろりと横になろうとした時、柱時計が四時をうつた。これではいけないと思つて、仕事着に着替えた。「ザーッ」。豆ひき機械に豆を入れる音がする。もう兄さんは起きているらしい。スイッチをいれる音がして、ベルトが回りだす。ぼくは下駄をつつかけて井戸ばたへ顔を洗いにいつた。冷たい水がひんやりと顔をぬらし、気持がよい。これでやつと目がさめた。まだ外は暗く外燈の光で洗面器の水がゆれながら光っている。どこからか犬のほえる声もしてくる。「ぐずぐずしているな」兄さんの声がした。さつそくきのう干していた雨ぐつに踏み替えたが、きのう曇つていたせいかまだかわききつていないで、中がじくじくしていて気持が悪い。

兄さんはかまどの火をたきながら、眠たそうにうつらうつらしている。時時間える主人のキ

セルの音に、びつくりして目がさめては、またうつらうつらしだす。それもそのはず、夜はいくら主人が「たまには早く寝て仕事中は眠らぬようにしなくては」といわれても、毎日十一時ごろ遊びにいつて帰ってくるのだから。だいたい五時間たらずしか寝ていないんだから、ねむいのは当然のことだろう。カマの中はぐらぐらたぎつて、いまにもふきだしそうにあわがあがつてくる。ゆげがもうもうと立つ。ぼくはカマの中をまぜた。主人はしようじを広く開けて、ふとんの中から頭ばかりだしてたぼこをすつている。またキセルを火ばちで「とん！」とたたいた。兄さんがびつくりして目をさます。と、「火は燃えておるか」主人の声に、何かぶつぶつひとりごとをいいながらカマの中をまぜはじめた。兄さんは、中学校を卒業してすぐここにきて、もう五年間も働き続けてきたのだそうである。この豆腐屋に住み込んで働くのはぼくで五人目なのだそうだが、みんな勤まらず兄さんだけが一番長くいるのだそうだ。ぼくも眠いんだが、ぼくまでいねむりしたら豆腐はできないだろう。ここに働きにきてからまだ二ヶ月しかたつていないので、まだそんなに豆腐つくりはなれてはいないけれど、主人にあまりしかられる兄さんがかわいそうで、兄さんは眠らしてぼくができることはしている。けれどもぼくのくつ音がするたびに主人かと思つて目がさめては、ぼくのしている仕事を見て「それをしろ……」とよくいう。ぼくは腹がたつてくる時もある。ぼくがしている仕事を見て、ああしろこうしろといわなくといいことではないかと思うのである。兄さんはまた素晴らしいながらも、うとうとと眠りだす始

末だ。かわいそうになつて、兄さんに代つてかまどをたくのであるが、じつとしているとぼくも眠りそうになつてくる。眠るといけないと自分にいきかせながら、かまどの火をにらみつける。しかしなんとしても眠くなつてくるのだ。考えて見ると、ゆうべ夜学から帰つてから一時間半勉強してから寝たのだつた。学校がすんでから勉強しないと、する時間がないから仕方がない。

うちがまずしいので昼の学校には出られず、昼は働いて夜間部に行こうと決心したのが三カ月前だ。昼からは仕事が終わつて勉強することができるということで、この豆腐屋に勤めたのであつた。ところが勉強していると「本を読んでいる時じゃないぞ」と、仕事はないのにこんなことをいわれる。もちろん昼寝でもしようものなら兄さんからすぐ文句をいわれる。主人やおくさんは、昼寝はしてもいゝとよくいわれるけれど、勉強していると何か仕事をしなくちやならなくなる。それで学校から帰つてきてから勉強するのであるが、朝は四時から仕事を始め、夜学が六時から十時まで、せいぜい早く寝て十一時である。これでは睡眠不足で病気になるのじやないかと心配になつてくる。

ぼくは窓を開けた。ぼくらの丁度前がガス会社、右隣りが消防署である。ガス会社の工夫が二人まつ赤に焼けたボイラーの中に交互にスコップで石炭をすくつては投げ込んでいる。黒い煙がもくもくと出る。すると「ポッ」と火がつく。よごれたシャツを着、腰に手ぬぐいをはめ

た工夫のまづかにそまつた顔がよく見える。外燈がまつ白いガスタンクを照らしている。その時「ガチャガチャ」と、びんとびんのあたる音がして牛乳配達の人が通り過ぎた。ぼく達よりほかにまだ朝早くから働く人がたくさんいるんだなあとと思うと、なにかしら元氣が出てくる。兄さんがカマの豆腐湯をくみだした。ここで豆腐になるのとおからとにわけるのである。袋にいれてしぼり出す。豆腐のにおいが（ぶうん）とする。ガス会社の外燈も消えて、ガスタンクがしらじらと見えてくるころ、丁度五時だ。ぼくと兄さんは、できた豆腐を今から配達である。すがすがしい気持で、だれも通らない町通りをベタルをふんだ。

過去と現在

E • T (男)

(鹿児島 洋服見習 17才)

ぼくが小学校四年生の時だった。母と麦かりに行つた。大きい畑なので、とうてい二人ではかり取れない。いくらもしないうちに太陽が、まるで日の丸のように真つ赤にかがやいて沈んでいった。夕ヤミが手元からぼくと母をつつんで、仕事がしにくくなつてきた。「母ちゃんもう暗くなつた、帰ろうよ」ぼくは泣きそうな声を出した。母は腰を伸ばしながらかつた麦を束ねてぼくに背負わせ、自分はまたぼくの三倍も背負つて、それから二人は野道を急いだ。母が頭にかぶつている手ぬぐいが白く浮いて見えた。

少し行くと重くなつたので、下の方をささえるようにして歩いた。また少し行くと今度は肩に食い込むように痛くなつてきた。「母ちゃん重い、少しでいいから休んで行こうよ」「もう真つ暗だよ・早く帰らないと心配しとる」「すこしでよが」「悦ちゃんは弱虫じやね」といいながら、それでも母は土手の松の根本に腰掛けた。ぼくも母と並んで背負つていた麦の束をおろした。

ぼくはなんとなく自分の足と母の足と並べてくらべて見た。「母ちゃんの足すごく大きい」ぼくはとん狂な声を出した。母はわざと真面目な顔をして「悦ちゃんの三倍くらいあるな」といつて笑った。『水のみ百姓』といわれても母はいつでも笑いを忘れる人ではなかった。貧苦の生活に負けず、毎日を健康で働けることを感謝し、どんな苦しみにも飛び込んで打ち勝つだけの力を持った。喜びに満ちあふれた笑いだったと思う。辛かったが母と共に生活し、貧しいながらも楽しい毎日だったと、たまらなくなつかしく思い出すのである。その母も、ぼくが小学校卒業式の日亡くなつた。三月十八日今でもあの日のことは、はつきり記憶している。時にはいうにいわれぬ悲しみが胸いつばいにひろがつて、ひしひしとぼくを苦しめる。

僕は山と水と畑を愛していた。だから中学校を卒業したら、農業専門の学校へ進学して、農業改良普及員になりたかつたのである。この夢も貧乏という言葉がやぶつてしまつた。貧乏は本当につらい。貧乏だということでは人間の価値まできめられてしまうほど残酷なことはないと思つた。母が死亡してから、なにか満たされない毎日であつたが、それでも一家八人、父、姉三人、妹、弟二人、私、みんな元気で生きがいがある毎日を過ごしていた。特に父はすごく元気者で早起きであつた。だから朝飯は、いつも父が作つてくださった。妹はこんな父を、「父んちやが御飯たくさん、母ちゃん早く死んだんや」こんな時、父は困つたような顔になる。

弟が二人もいるから、ぼくは何かちゃんとした仕事を身に付けようと、卒業する前から心に

決めておつた。専門の学校へ入学するなどということはとても許されない。奉公のかたわら技術を習得できる職はと、いろいろ頭に描き、あれこれと考えて洋服屋ならこの仕事がぼくにいちばん適していると思つた。そして中学校を出ると、すぐ鹿児島市のある洋服店へ住み込んだのである。

弟子入りしてから半年は職場と店の掃除と使い走りの毎日であつた。奉公さえすれば簡単に習得できると思つていたのは、ぼくの大へんなあやまちであつた。すっかりあてがはずれ悲観した。(こんなこと、初めから覚悟していたはずだ)と自分にいいきかせながら、精一ぱいがんばつたおかげで、十月にはいつて職場へ回わされた。最初は針の使い方からであつた。(一寸の鉄ぼうを自由自在に動かす仕事だ)とぼくは思つた。しかし、針を持つことさえ容易ではなかつた。徒弟制度は廃止されたとはいつても、仕事は難行苦行の修業なのである。夜業する日が多く、毎日くたくたに疲れる。作業で疲れた体は、食べることで、ねることしか要求しない。できるだけ家人にめいわくをかけないよう、水をのんで床へ入つたこともある。朝は五時起床であつた。最初二ヶ月ぐらひは死ぬほど苦しかった。もつとも日がたつにつれて慣れてきて、だいぶらくになつた。

十月十四日、この日はぼくにとつて忘れることのできない、心の奥深くきざまれた悲しい日である。ぼくは朝から集金にかけ回つていた。払わない家はきまつているから別に気にもし

ない。しかしつづけて三軒も集金できないと、ちよつと憂うつになる。金額が大きいので精神的に疲れる。午前中はなんのこともなく過ぎた。午後にも集金をした。六時ころ、横道から飛びだしてきたタクシーの車輪の下敷となつた。思いもよらぬ負傷をした。医師の精密な検査の結果、左大たい部骨折と宣せられた。病院の冷たい感触と、薬品のへんなにおいがしみこんだベッドの上で、腰から下はキプスで固められ、体をすこしもうごかすことはできなかった。もう不具になるのはまぬがれまいと思うと、黒い雲が胸一ぱいにひろがつてぼくを苦しめた。絶望と不安の半年を病院で送つた。

店中の視線を浴びながら、みんなが仕事をしている職場へ不自由な左足をひきずりながらはいつていつた。仕事をしているうちに無性に悲しくなり涙が出てきた。こんなぼくを見てだれかが「仕立屋かたわ者のすてどころ」と小さな声でいつた。胸がにえくり返り、なにか爆発しそつだつた。

ある時海に飛び込んだことがある。どういうわけとびこんだか今でもわからない。泳げるんだから、本当に死ぬつもりならポケットに石でもつめただろうと思う。堤防へはいあがり、ぬれねずみで職場へもどりバケツにぬれた着物をほうりこんでねてしまった。真夜中だつたのでだれにも気づかれずにすんだ。センチメンタルで空想的な僕が、夢を失つてしまつてそんな日日を過ごしていた。不具を忘却の彼方へ流し去ることはできなくとも、働くことに希望を見

出そうと思つて、これからさきつらいことや苦しいことがあつても、かならず打ち勝つてみせる。いまさら不具の身を嘆き悲しんだつて、もとの健康な体がもどるわけでなし、つとめて明るく健全な毎日を送ろうと努力している。

「働く少年少女の生活文」労働大臣賞受賞者の消息

労働省婦人少年局年少労働課

「働く少年少女の生活文」の募集は昭和二十六年に始まり、以来毎回二千通余りの応募をみている。いろいろな職場に働く多くの年少者の生活記録は、労働生活の体験、職場の批判、意見、社会への批判や要求等を幼いなりに真しな態度でつづり、訴え、社会の反響も少なくなかった。

過去五回の応募者中、約二百人が労働大臣賞を受けている。

私たちはかねて、よりよい施策のためにも、年少労働者が成人となる間の生活上の、また精神的な曲折を知りたいと考えていたので、これらの受賞者たちが、受賞後歩んできた道についてふたたび手記を求めた。

内容は、①受賞についての感想や当時の環境、②その後の職場の変更、③その他、現在の自由感想等についてである。

受賞者の約1/3が回答を寄せてきたが、働く年少者の生活、考え方の推移を知る一助となるものである。

一、回答数、

七六名（男四〇、女三六）

この他に、本人の母及び養成工時代の教師からも感想文が寄せられた。

二、現在の年令

一五才Ⅱ一名、一七才Ⅱ八名、一八才Ⅱ一〇名、一九才Ⅱ二五名、二〇才Ⅱ一三名、二一才Ⅱ六名、二二才Ⅱ六名、二三才Ⅱ五名、年令不明Ⅱ二名

納豆売りをしていた小学生時代に受賞したものなどもあるが、おおかたは成人になっている。

三、その後の職場の変更の有無

○受賞当時と同じ職場にいるもの、四八名（男二三、女二五）

○受賞当時と変ったもの、二五名（男一五、女一〇）

○その他、三名（男二、女一）

四、職場を変つたものの経路と主な理由

（ ）内は退職の理由

（女）

▲小企業の織布工（生活に希望、喜びなく過労、勉強したい）——大企業紡績の守衛、満足して働いている。

▲印刷見習——個人家庭の女中（経済上、ことに弟を進学させたい、上京）——料亭の女中、技術を身につけたいが、時間的、経済的に不可能、重労働で過労、しかし一生懸命に働くつもり。

▲炭鉱事務員——証券会社事務員（会社閉鎖）——製材所の工員の炊事婦（仕事に不満）——半年間失業——見習看護婦、技術高い、誠実な看護婦になりたい。

▲家業の林業（家庭経済上）——洋裁店見習兼女中（過重労働、精神的にも疲労）——個人家庭の女中（経済上）この間に定時制高等学校卒業——商社会社事務員（経済上）——温泉地旅館女中、どんな職業でも一生懸命働けば立派だと思っている。

▲家業の農業（勉強等、精神的向上を求めて）——製材兼材木店事務員、珠算習得、満足して働いている。

▲小企業のメッキ工（手、指が非常に傷むので）——見習看護婦

▲小企業の印刷工（経済上、定時制高等学校も退学）——見習看護婦、看護婦学校に入學、仕事は過重だが元気にはげんでいる。

▲家業の農業（精神的向上をのぞんで）——見習看護婦、長時間労働で過労だが一生懸命働いている。

▲大企業の紡績工（生活文応募のため圧迫されて、いやになり）——マーケット売り（営業

不振閉鎖)——幼稚園給食婦(期限つき就職のため期限切れ退職)——失業中、定時制高等学校に通学中。

▲事務員(伯母の養女となるために)——店員、伯母の店を手伝い、定時制高等学校退学(男)

▲塩田の製塩工(製塩工程近代化のためかく首)——鉄工工員、まじめに働いている。

▲スケートリンク事務員(営業不振退職)——鉛工見習、職人気質のはげしい先輩の中で働きにくい。

▲製糸工員(病氣)——小企業の織物加工工。

▲自動車会社運転見習兼事務員(仕事がつまらない)——官庁土木事務所臨時雇。

▲砂利取り人夫(重労働のうえ将来性なく)——小企業の織物工場の自動車運転見習、現在同工場織機整備、モーター責任者、非常に愉快に働いている。

▲文房具及び食料品店売子兼配達(定時制高校に就学したため)——他の文房具店店員(母病氣、経済上、就学も不可能)——小企業の電球製造工員、就学はあきらめて働いている。

▲材木店店員兼木材運搬(強度の重労働、職場のふんいきも悪く、精神的に疲労)——官庁臨時集計員、定時制高等学校通学

▲農業協同組合事務員兼物品運搬係(過重労働から病氣、職場の責任者も不親切で回復後退

職、この間のみ定時制高等学校通学——鉄道機関区臨時雇、一生懸命働いているが身分不安定で不安。

▲家業の農業（経済上）——建築工（健康状態わるく退職、上京）——商店店員

▲書店店員兼配達、定時制高等学校通学（勉強時間がほしくて）——新聞配達（大学進学希望のため上京）——書店店員、定時制高等学校通学（勉強時間不足のため）——牛乳及び菓子販売店住込、店員と牛乳配達、定時制高等学校通学、労働もはげしく非常に疲労する。

▲電報配達夫——生活必需品販売組合事務員（何かの失敗により退職）——親籍をたより他県に移り、所在、職業共に不明、時々母の声がかきたいと電話をかけてくる、運転手をしてゐるらしい。

▲牛乳配達（朝鮮人のため、他の職業につけず、強制帰国の不安もあるので帰国後の将来性を考えて）——大工見習、他人は大臣賞を受ける頭を持ちながらと笑うが打込んでやつてゐる、定時制高等学校退学

▲納豆売り（中間の供給者移転のため自然休業）——新聞配達（学費を出してくれる特志家があつて屋間高等学校へ転校）——衆議院速記養成所、目下、母の仕送りで生活

▲うどん製造見習、定時制高等学校通学（受賞の際、生活状況が新聞に出たため、ある工場の社長に招かれ、うどんやの主人も喜んでくれて）——会社給仕、工業高等学校へ転校、

しかし学力がおくれていて落第、一生懸命勉強している。

▲ガラス工（もつと働きのいのある仕事はほしくて）——家具店店員、定時制高等学校通学
▲土工（将来性のある仕事につきたくて、上京）——私鉄臨時工員
（この他に次のようなものもある。）

▲学校給仕、定時制高等学校通学——昼間高等学校へ転校、給仕退職の男子

▲家事の農業のかたわら海苔採取の季節労務者をかねている女子

▲地方電報局から東京中央電報局へ転勤した男子

五、手記にみる心境の推移

職場に入つた当時は一樣に期待も大きく、人生への希望に文字通り胸ふくらむ思いであつたが、多くは、単純作業の反復、一応の修得の時期、環境への慣れを山として、自分の地位や、将来性への不安などあせりが芽生えてくるようである。過重労働、自由時間の不足など生理的、精神的疲労が職種、環境などによつて加わってくる場合は、不安、不満もより強くなり、動揺してくるようである。

相当の長い時期をこうして悩んでいるが、しかし割り切つて働きつゞけようとする努力は全体に見られる。たまたま身辺に話し合う相手——職場の長、先輩、年長の知人など——を持つことができたものは、大人には想像し難いほどの大きな気分転換となつて、ふたたび希

望を抱いて立ち直っている。しかしこのように恵まれるものは少数で、多くはその相手にも機会にもめぐまれず、悩みつつ、その職場から離れることで新しく希望を見出そうとしている。約半数は卒業当時と同じ職場に続いて働いているが、これらの年少者にしても、ひとり考え、ひとり悩み、卒業の際に教師からは、なむけされた言葉や、大人の社会に通用している考え方——長いものにはまかれる等の——を思い出し、それに反発しながらも、あきらめ、自ら励ましては働き続けてきたようだ。

その時期から、自分自身の問題、身辺の小さい社会の有様を通じて、社会の構成、動きへと目が向けられ始める。そして一個人のあがきの無力さに気がつき、社会、政治のしくみへの不満、憤りとなつていく。そして自分を含めて、このまゝでいいのか、どうなるのかと疑問を投げかけていく。「郷土出身の総理に寄するわが期待ひたすらにして年あけにけり」などという短歌もこの時期のものである。

しかしそのような日日にも、やはり、仕事をほめられる、責任ある仕事を与えられるということは大きなよろこびと自信の源となり、「この高級お召は大衆のものではないから、将来自分はナイロン工場をやるう」と云い「学校へ行く友人にはまたそれぞれ難関があるのだ。自分は自分の職場でがんばる」と希望も新たになり、考えも落ちついてくる。

家業の農業をしつつ農協の学校に通学し、素直な希望と理想を持つて農業を研究し、かた

わら、郷土の歴史などを共同で研究しているのびやかなものもあり、雇用されているものは対照的な明るさを感じさせる。また、当時、十七才であつた女子が、成人し、結婚し、離婚し、現在も引続き同じ職場に働きつつ、独学で大学受験準備を始めているという、意欲的な不屈な強さを語っている例もある。これには使用者の理解も大きな力となつているのであろう。また、田舎町の屋根裏の仕事場で、泥絵具で映画館の絵看板を描きつづけ、仕事によるこびを持ち張り切つていゝという、零細な職場に働くものの明るい例もみられる。

これらの生活態度は、受賞生活文にみられる当時のものとは大きな相違——悩みつつ大きく成長しているもの——を見せている。しかしそのささえとなつてやるものが、人的にも物的にもなさすぎる感が深い。働く年少者の多くは、大人の掌の外で悩み、傷つき、考え、苦しみつつ一生懸命に正しく生きようとしている。脱落して行方不明という年少者でも、母の声がききたいという気持はある。このように、成長の大事な時期にある若い人びとのために、社会の、大人達の、理解と暖かい助力が切望される。

(昭和三十三年七月)

職場のこだま

昭和32年7月10日印刷

定価 120円

昭和32年7月20日発行

〒 16円

無検印
編者
承認

編者 労働省婦人少年局

発行者 婦人少年協会

印刷者 芳山 猛

発行所

東京都千代田区
神田一ツ橋1-1

婦人少年協会

